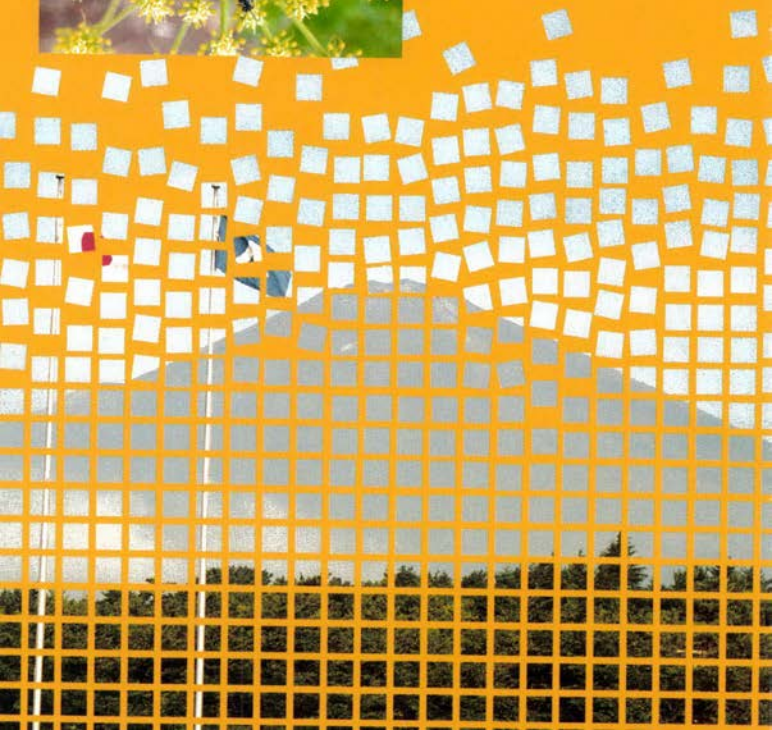


# 日本への回帰

第37集

平成13年 富士合宿レポート











大学教官有志協議会  
社団法人 国民文化研究会

日本への回帰  
(第三十七集)

——第四十六回全国学生青年合宿教室（御殿場）の記録より——



十一月二十五日、海上自衛隊の三隻の艦船がインド洋を目指して国内の各基地から出港した。既に情報収集の目的で先遣されてゐた三隻と洋上で合流し、護衛艦三隻・補給艦二隻・掃海母艦一隻から成る「日本艦隊」がインド洋で任務に就くことになつたのである。これらの中、パキスタン・カラチ港への被災民救援物資の輸送を主任務とする掃海母艦を除く、五隻は来年三月末までインド西側海域に留まつてテロリスト焙り出しの軍事作戦を展開する米艦隊などに燃料や食糧を補給することになる。

テロ集団を匿つたアフガニスタンのタリバン政権が早期に崩壊したため、やや遅きに失した嫌ひはあつたが、湾岸戦争の折は資金提供（百三十億ドル）と事後の掃海艇派遣にとどまつたことを思ふと、隔世の感がする。それだけ、ハイジャックされた航空機が乗客もろとも凶器となつて高層ビルに突入するといふ破天荒な行為（九月十一日）の衝撃が、さらに予期しないビルの崩落にもつながつて一瞬にして三千余人のビジネスマンの生命が奪はれた事件の衝撃が、深刻だつたからである。二十四名の邦人も巻き添へになつて落命した（土埃に塗れて逃げ惑ふ人々の映像に、思はず「空襲」下の同胞の姿が重なつた）。

国防総省や世界貿易センタービルを狙はれた米国は国を挙げて奮ひ立つた。自らの軍事力と経済力を象徴する建物が標的になつたのだから当然だらう。ブッシュ大統領は「新たな戦争が始つた」と言明し、連邦議会と国民は結束して反テロの軍事作戦を支持した。そして、米政府の要請に應へて、百三十六ヶ国が軍事支援を申し出て、百四十二ヶ国がテロ疑惑資産を凍結した。七十六ヶ国が米軍機の離着陸を許可し、NATOは集团的自衛権を發動した。(米政府報告書「テロとの世界戦争―最初の百日」。十二月二十二日付産経)。

かうした中で自衛艦の派遣であるから、わが政府は国際的にはともかくも面目を施した恰好だが、「平和憲法」といふ名の「独立自存努力否定の憲法」から発するところの足枷には何ら手をつけようとはしなかつた。米軍支援は「あくまでも慎重に」(十一月十七日朝日の「社説」タイトル)となほ執拗に繰返す有力メディアもあつたが、しかし今やその矛盾は極限に達してゐる。自衛隊艦船派遣のために新規に成立したテロ対策特別措置法は二年間の時限立法であり、集团的自衛権についての政府見解が依然として「国際法上は所有するが、憲法上はその行使は認められない」としてゐるため、洋上で給油活動を行ふにしても「非戦闘地域」でなければならぬのだ。憲法が禁止する武力行使との一体化は避ける必要があるからである。

軍事作戦を展開する同盟国を支援するといふのに非戦闘地域でとか後方支援地域でとかと言つてみても、どれだけの実質的な意味合ひがあるといふのだらうか。食糧や油の補給なら許されるが弾薬の輸送は無理だとしたところで、そのどちらを欠いても作戦に支障を来すのだから、本質的には違ひはないといふべきである。米国が進める今次の「不朽の自由」作戦には日本を含む十三ヶ国が何らかの形で軍事協力をしてゐる。これらの国々の中で果たして自らの行動のために新規に立法措置を講じた国が他にあつたらうか。米国中枢部へのテロ攻撃は、また平和憲法下の歪なわが国の実態をあらためて浮び上がらせてくれたのである。振り返つて見れば、ポツダム宣言（第九項）に基づく武装解除状態を制度化し合理化するために、米国を主体とするGHQは戦力不保持を謳ふ「平和憲法」を一週間で起草した。その憲法が今となつては対米支援を制約してゐるのだから、これに過ぎる歴史のパラドックスが他にあらうか（平和憲法はまた日本国家の歴史的連続性を断つといふ毒素を内包してゐる）。

今はただ自衛隊艦船が任務を遂行して全艦無事に帰港することを願ふばかりである。

ところで、今回の自衛艦のインド洋派遣について、北京政府は「日本が堅持してきた専守防衛の方針と明らかに合致しないものだ。憲法に基づいて行動してほしい」と日中外交当局者間協議（十一月二十一日）で繰り返し反対を表明してゐたと後日、報じられた（十二月十七

日付産経)。何を言はうが勝手だとはいへ、他国の憲法解釈にまで口を出すとは随分な所行である。舐められたものである。しかし、これまで政府は「専守防衛」を言ひすぎた。他国の脅威にならない範囲で防衛力の整備を図る云々と「専守防衛」を口にしすぎた。それは平和憲法下に安住してきた戦後政治の生み出した「集団的自衛権否認」と並ぶ、もうひとつの足枷に他ならない。もし他国が「脅威を覚える」と申し入れて来たらどうなるのだらうか。

自らの手足を自分で縛ることを善しとする「自己不信」がこの国には充満!?してゐる。テロに備へて警備体制が整へられたにしても、皇居・国会・首相官邸の警備から自衛隊を外した。警察力に余る場合には時と所を問はず自衛隊がカバーするのは常識ではないのか。自らの持てる力と智恵を自らのために最大限に発揮することを躊躇する自己不信が、確かにわが国を覆つてゐる。それはまた国家の後先を慮外にするその日暮し的な政治と同義語である。

現在、官房長官主催の懇談会で戦死者を追悼する新たな施設づくりが話し合はれてゐる。

これは「内外の人々がわだかまりなく追悼の誠をささげるにはどうしたらよいか議論する必要がある」との八月十三日の首相談話を承けてののだが、戦死者の慰霊といふ国家の存続存立に欠く可からざる聖域中の聖域にまで他国の意向を迎へ入れようとしてゐる。「国外の人々が」そのやり方には「わだかまりがある」と言はなくなるまで引き下るといふのだらう

か。これまた「確信の喪失」即ち自己不信の産物の最たるものといふ他はない。

病的なまでに自己を見失つたかに見える現状ではあるが、脚下照顧、一步踏み止どまつて思ひを巡らせば「今日の日本」が歴史の連続性の裡にあることに考へ及ぶはずである。去る一日、皇孫敬宮愛子内親王殿下が御誕生になられて、師走の列島は時ならぬ温気温風に包まれた。御慶事は「平和憲法」を乗り超える長い長い歴史が存在してゐることを改めて思ひ出させてくれた。私共はかうした歴史的な文化土壤に根ざした学問こそが、日々、盛んにならなければならぬと思つてゐる。それなくして「自己」を取り戻すことはできないと考へるからである。毎夏、私共が学生青年を主対象に宿泊研修を開く理由もそれにつきる。この冊子は八月に御殿場で開催された今夏の宿泊研修の報告である。御精読願へれば幸甚である。最後に当り、御多用の中をお運び賜り、さらに御講義御講話要旨の掲載をお許しいただいた伊藤哲夫先生、長谷川三千子先生、東儀俊美先生に厚く御礼を申し上げます。

平成十三年十二月二十三日

大学教官有志協議会  
国民文化研究会

# 目次

はしがき

## 講義

### 第一日目（八月二日）

歴史認識と父祖の物語……………福岡県立太宰府高等学校教諭 占部賢志…1

### 第二日目（八月三日）

近隣諸国の動向と日本の主権……………日本政策研究センター所長 伊藤哲夫…23

吉田松陰『講孟餘話』……………新日本製鐵(株)プラント事業部（嘱託） 今林賢郁…57

### 第三日目（八月四日）

「日本の思想」……………埼玉大学教授 長谷川三千子…79

### 第四日目（八月五日）

日本の国柄——尊いことが尊く見えてみますか——

……………福岡県立嘉穂高等学校教諭 小野吉宣…111

古典に親しむ——『古事記』——……………昭和音楽大学短期大学部教授 國武忠彦…133



講話

雅楽への誘ひ……………日本芸術院会員 東儀俊美…153  
若き友らへ語りかける言葉——かまどのけぶりほそくとも——

……………元電源開発(株)環境立地本部本部長代理 長内俊平…163

体験発表

沖縄について思ふこと……………熊本製粉(株)住宅事業本部 吉村浩之…183

文化の伝達者としての女性……………主婦 工藤千代子…195

短歌入門

短歌創作導入講義……………羽後信用金庫川口支店支店長代理 須田清文…207

創作短歌全体批評……………国立療養所福岡東病院副院長 小柳左門…223

一年の歩み……………第四十六回合宿教室運営委員長 山口秀範…241

合宿教室のあらまし……………

合宿詠草抄……………275

あとがき



講義

——合宿導入講義——

歴史認識と  
父祖の物語

福岡県立太宰府高等学校教諭

占部賢志



蔓延する自己喪失感

歴史を遡ると、そこには「父」がある

厳冬期富士山の気象観測に挑む

是非にわらは御供致し度く

芝山巖教育に殉じた六士先生とその継承者

## 蔓延する自己喪失感

今、教育問題が様々に論じられてゐますが、現場にゐて痛感するのは子供の間に自己存在感が衰弱しつつあるといふことです。旧聞に属しますが、かういふデータ（表1）があります。各国の小学生対象に「自己評価」に関して取られた調査結果なのですが、世界の子供達に比べて、我が国の場合、自分に対する評価、ひいては存在感を感じてゐる小学生は、こんなにも低い。最下位なのです。

あの日本列島を震撼させた「酒鬼薔薇聖斗」と名乗つた中学生は、神戸新聞社に送りつけた犯行声明に何と書いてゐたか。彼は、みづからを「透明な存在のボク」と自己規定してゐました。ここには、一般の子供達の自己喪失感と奇妙な共通点がかがへるやうに思へます。自分といふものを見つめたとき、そこに何も見えない、何も感じられないといふ小学生達が増えてゐる状況は、我が国が抱へる教育問題の最たるものだと思います。

（表1）小学生の自己評価

アメリカ	52.1%
ブラジル	45.2%
中国	33.9%
韓国	22.2%
日本	12.6%

平成7年 ベネッセ教育研究所

かういふ現実を前にして、先般来、中学校歴史教科書をめぐつて国内はもとより中韓両国から烈しい批判や干渉が加へられてゐるのは御承知のことと思ひます。今回の検定教科書はすでに公開されてゐますから、皆さんは多少はご存じでせうが、これまで教科書がどんな歴史認識のもとでどのやうな記述をしてゐるのか、じつは驚くべき記述が多々ありました。それは教科書の結末の箇所です。意外に見落とされやすいのですが、そこは教科書としての歴史観がまとめられてゐる箇所であり、生徒達へのメッセージが書かれる部分なのです。

従来から教科書を刊行してゐる或る出版社の検定済み教科書には、「日本の歩みと世界」の学習をおえてと題して、「何と人間は、おろかにも、多くの誤解にいろどられ、おたがいが信じあうことなく、にくしみに満ちた日々を歩んできたのだろうか。歴史を旅する人は、戦争によつて流された血や、死者のかなしみの声に耳をふさぎたくなつたことであろう。わたしたちは、これが人間の歩んできた道であつたことを、しっかりと目をあけてみつめなおし、ここから明日をどう生きるかを考えていこうではないか」と書かれてゐるのです。

このやうに愚者と不信、憎悪の歴史が我が国の歴史であつたと断ずる教科書が罷り通るのですから、いつたいどうなつてゐるのか。自分を失ひつつある生徒達を前にして、さらに追打ちをかけるやうにその根を断ち切らうとする所業は実に許し難い。かうした時代状況に困



まれて子供たちも私たちも生きてゐるのです。そのことをまづ念頭においていたいただきたいのです。

歴史を遡ると、そこには「父」がある

このやうな教科書を読んでゐたとき、並行して私は戦前に活躍した星一はしはじめといふ人のことを調べてゐました。その時、息子にあたる小説家星新一氏が書いた伝記『明治・父・アメリカ』と題した本があることを知つたのです。さつそく読みはじめたのですが、その冒頭の記述に一気に吸ひ寄せられました。読んでみませう。

だれでもそうだろうが、川を眺めていると、  
いったいこれをさかのぼったらどうなっているの

だろうと考える。なぜ、ここに川が流れているのだろう。上流のほうのようすを知りたくなるのである。人生においても、そんなようなことがある。いつもは時の流れに身をまかせ、なにやら忙しく、一日一日をすごしている。しかし、ひまができると、少年時代のことを思い出す。

そこには父がいる。私の父は、私が大学を出て四年目ぐらいに死亡した。遠い追憶のなかの父は、いつもにこにこしていた。……私が小学校三年生ぐらいの時だったろうか。父は古本屋から、和とじの『大学』という本を買ってきた。……なかには漢字ばかりが並んでいた。父は私をきちんとすわらせ、それを開き、火ばしで一字ずつ押えて読み、あとにつづけて読めと命じた。ちょっと面白かったが、これから毎日そうなのかと思うと、これはえらいことだと、身ぶるいした。読めないと、火ばしでひっぱたくという。しかし、それは一回きりだった。なにかのことで自分の少年時代を思い出し、それを私にこころみたくわけだろう。

一回きりにもかかわらず、私には印象的なことだった。昔の人はこうして字をならったのだなど、具体的に知らされたのである。その時はじめて、父にも少年時代があったのだということに気がついた。それまでは、父とは、もともとおとなとして存在していたもの



だと思っていたのだ。新鮮な発見であった。(星新一「明治・父・アメリカ」)

星新一氏は、このやうに告白して父親の伝記を書き始めてみます。私は、この文章を読んで改めて気づかされました。さうか、これが歴史に学ぶといふ事だな、とつくづく感じ入ったのです。ちやうど先程の教科書を読んで暗澹としてゐた時でしたので、尚更さう思ひました。新鮮な文章として映つたのです。新一氏のお父さんはじめ一氏は若き日にアメリカに渡つて修業を積み、帰国して製薬会社や薬科大学を作つた一代の事業家です。新一氏も父親のあとを継ぐのですが、結局やめて小説家になります。その彼が後年、亡き父の伝記を書くに至る動機を、その冒頭に書き留めたのがこの文章なのです。

たしかに我々は、ふとした時に自分の根っこをたづねてみたくなるものです。星新一氏は言ひます。川を眺めてみると、この上流の方はどうなつてゐるのだらう、その様子が知りたくなつてくる。歴史に学ぼうとする萌しは、さういふものなのでせう。星氏にとつてそれは父親だつたといふわけです。これが彼にとつて歴史との邂逅でした。

先ほど紹介した歴史教科書は、歴史を回顧すればそこには不信と憎悪だけがあつたやうに断じてゐますが、皆さんは、教科書の記述と、星新一氏の一文と照し合せてみて、どういふ

ふうに感じられるでせうか。過去を生きた人々に対する姿勢のあまりに大きな隔りに気づかれたはずです。それではここで、歪んだ教科書風歴史観では解釈出来ない、近代史に刻まれた二つの史実を取上げてみませう。

### 厳冬期富士山の気象観測に挑む

我々は今、ここ御殿場の地で学んでゐます。富士山は目の前に聳えてゐます。そこで、まづこの富士にちなむ父祖の物語をご紹介してみたいと思ひます。

ここに二人並んだ人物の写真を御覧下さい。この二人は福岡県出身の夫婦でして、野中至、千代子と言ひます。二十代の若い夫婦ですが、明治期に富士山頂で我が国最初の厳冬期気象観測の偉業に挑んだのです。私たちは誰しも前日に天気予報を見て翌日の段取りをたてます。私たちの日常において切つても切り放せないのが天気予報です。その草分けとなつたのが、じつはこの二人でした。

明治期、正確な天気予報を実現するといふ重要な課題がありました。しかしそれは難事業でした。天気を予報するには、様々な気象観測のデータをとらなければなりません。より正

確な予報には高地での観測データは必須でした。そのために最高峰の富士山頂での観測は最大の課題だったのです。何故なら夏山ならいざ知らず、厳冬期の富士山頂に登り長期滞在して観測するなど無理だったからです。滞在するどころか登る人さへ殆どありませんでした。

ところが、明治二十八年、下関条約が調印されて日清戦争が終結した年でした。このとき、対外戦争は終結しましたが、まったく別の新たな戦ひに敢然と立ち向かった若い夫婦が出現したのです。これも明治といふ時代のすごさです。当時、四千メートル級に近い厳冬期の高山で観測する等、世界でも試みられたケースは殆どありません。

富士山の冬期は十月一日から始まります。すでに富士山は氷雪に閉ざされつつありました。至は九月末から登頂を開始しますが、どうやって登つてみたか。じつはすでに同年一月にチャレンジしてゐます。その時は、アイスバーンへの対策として登山靴に五寸釘を何本も打込んでスパイクのやうにして登つたのですが、途中で釘が曲り失敗に終わりました。そこで本番ではつるはしを持参したのです。当時は今のやうにピッケルなどはありませんから、このつるはしを振ひながら一步一步登りました。

当時、この野中至の挑戦は新聞でも報道されました。しかも国民に多大の関心呼びましたから、山頂の至を激励しようと慰問隊が結成されるほどでした。至が観測を開始して二週

間後、新聞記者も混へた慰問隊が危険を覚悟の上で山頂を訪れ、両親に宛てた至の手紙を持ち帰つてゐます。数日後、この手紙が新聞に掲載されました。

(前略) 小生は翌十月一日午前零時より、直ちに観測に取り懸り居り候。(中略) 夜半寒気のため風力計廻転致さず、よつて熱湯をこれに注ぎ、わずかに廻転するを見て急ぎ室内に走り帰り、電気盤を観る事に御座候。観測所前の山下は、暗黒墨を流したるがごとく、名にのみ聞く暗黒地獄を目前に見る心地仕り候。

荆妻儀はかつて説諭を加へ、かつ昨今すでに降雪もこれありたる事故、断念したる事と存じ居り候処、一昨日、剛力両三名召し連れ登山仕り、同人が決心今は動かし難きに付き、その意に委せ申し候。この上は万事に注意し、首尾よく越年を遂ぐる覚悟に御座候。

(東京朝日新聞 明治二十八年十月十九日)

文面にある通り、山頂での観測はまさに難行苦行の連続でした。零下二十度以下のすさまじい冷気が襲ひ、氷ついた風力計に熱湯をかけて観測するといった事態に見舞はれます。しかも、夜半の眼下は墨を流したやうな恐ろしいほどの漆黒の闇が拡がる世界でした。わづか

二週間でかうですから、誰の目にも単独の観測は不可能に見えたでせう。

ところが、この手紙にはもう一つの報告が書かれてゐます。後段冒頭の「荆妻儀」とは我が妻といふ意味です。つまり、至がこの手紙を書く二日前、何と妻の千代子が強力三名を引き連れて登つて来たといふのです。至はまさかと思つたこととせう。さういふことがないやう強く言ひ渡してゐましたし、また女の身で冬の富士山に登れるわけもないと安心してゐたことだと思ひます。にもかかはらず登頂して来た。その驚きはさぞやと思はれます。

しかも千代子の様子を見たとき、その覚悟の程をただちに至は感じとつた筈でせう。両親に向けて「同人が決心今は動かし難きに付き、その意に委せ申し候。この上は万事に注意し、首尾よく越年を遂ぐる覚悟に御座候」と伝へるほかになかつた。千代子の並々ならぬ決意と覚悟が偲べれます。

### 是非にわらは御供致し度く

では、プロの男たちでさへ怖ぢげづく冬季富士山にどうして千代子は登れたのでせうか。じつは彼女も言はず独り決意して登山の準備を進めてゐたのです。実家の福岡に戻る

たびに背振山などに登つて密かに足腰を鍛へてみたのでした。そして夫の至が、ここ御殿場で登山の準備中、しばらく一緒に滞在し、至の登山一カ月ほど前の九月初め二歳の娘とともに東京に戻る事になった。東京には至の両親がゐて同居してゐました。

ところが、御殿場の駅で記者を待つあひだ、千代子は手紙を書くのです。それは東京の姑とみ子に宛てた手紙でした。ここで初めて彼女は温めて来た決意を明らかにします。文面はかうでした。

取急ぎ一筆申上候。到様御事、此度いよいよお登り遊ばし、今後八、九ヶ月の間、御一人にて明暮れ煮炊きの業までも御世話遊ばすやらにては、日頃如何にすこやかとは申しながら、万一の事とおはし候はば、是迄の御心尽し相碎け、御痛はしふ候へば、是非にわらは、御供致度、兎にも角にも安閑と致し居るべき時には候はず。(中略)母上には勝手廻り煩はせ参らせ、まことにお気の毒様にて、私はいかほどの罪あるものか、お許し給はれかし。

さては、今度の私の振舞、御方々、わきて到様より幾程の御しかりを受候とも、此の事ばかりは思ひ止まりかね、ふみ切り、下県致し候。何卒あしからず思召し、唯々御平かに

いらせ給ふやう願上候。

かしこ

九月四日

御殿場停車場にて 千代子

夫至の悲願を何としても達成させたい、万事を独力でしなければならぬ状況下、何事かあればさぞ無念であらう。かう思ひ至つたとき彼女は、「是非にわらは、御供致度、兎にも角にも、安閑と致し居るべき時には候はず」と決意したのです。皆さん、「是非にわらは、御供致度」といふ決意の言葉に注目していただきたい。

誰でもいい、誰かの志に触れて、その信賴する人のあとを追ひたいと願ふ。人はそのやうにして人生を決断することがあるといふ事です。それもまた立派な「こころざし」であります。

かうして姑に手紙を投函して彼女は福岡の実家に向ひます。そして実家の両親に娘をあづけ、最後の準備を整へて、再び御殿場に向つたのです。御殿場では強力を説得して冬季に入った富士山頂を目指しました。独りで密かに計画した彼女の必死の段取には驚かされます。これが明治の女の真骨頂です。

しかしながら、二人で強力しあつて観測をつづけるものの、山頂はいよいよ険しい寒風に



さらされ、過酷な生活を強ひられながら、二時間おきに気温、風速などを観測しては記録する作業を昼夜交替して続けるのです。つひには肝心の観測機器も凍りついて破損し、温度計のほかは大半が使用不能となりました。その上二人はあいついで凍傷や高山病に罹ります。

さうした事態のなか、十一月三日を迎へたときです。二人は気を取り直して立上がり、時は天長節、すなはち明治天皇の御誕生日でした。この時の様子が千代子みづから書き残した『芙蓉日記』にしるされてゐます。

今日は霜月三日ぞかし。げに人里もなき此の山さへさすがに御国の祝日とて、常には似もやらで冬空乍ら四方の景色心もおのづから長閑けくぞ覚ゆる。(中略) 良人は御国旗を取り出給ひて、

けふこそは御代の祝ひの時なれやいざ御旗をば打ち掲げぬべし

(中略) 今身は天上にありとて、もいでや寿ぎ奉らんとて、窓の戸こじ放ちていざりいで、やがて風力台のもとに御旗打掲げんとするに烈しき風は情なくもあはや吹き去らんとして手を放す事だに叶はず。今は力なしとて懐に巻き入れ、唯二人こゝに跪き東に向ひて御所を拝し奉り、扱もかゝる高き所より下伏して拝む事のかしこさ許させ奉へと祈りつゝ、今



しも東西におはす父母にもかれと、あなたこなたの天を見るが内に、(中略) 乱る、吹雪は時ならぬ落花となりて、轟く音喩へん方なし。(『芙蓉日記』私家版)

ここには、天長節を寿がうとして気力を振りしほり、再び観測に挑まうとする二人の真摯さ、そしてその二人に襲ひくる山頂のすさまじさがさながらに叙述されてゐます。おそらく二人がもつとも苦しかつた時でせう。その苦境にあつて富士山頂から天長節を祝ひ、両親に思ひを寄せる、そして再び立上がらうとする明治の先達の姿に胸が熱くなります。

かうして重体に陥りながらも観測しつづける夫妻を発見したのは、再び山頂を訪れた有志の慰問隊です。ただちに救援隊が組織され、十二月二十二日、二人は文字通りの極限状態での救援隊に背負はれて下山することになりました。実に八十二日間にも及ぶ観測生活でした。標高三七七六メートルの冬山での気象観測は世界でも初の壮挙でしたから、外国の新聞にも大きく報道されてゐます。

その後も夫妻は本格的な観測所の設立を求めて様々な活動を行なひ、再挙を期しましたが、大正十二年、千代子は急逝しました。享年五十二歳でした。都内の護国寺境内奥には夫妻の御墓があり、傍には二人のレリーフも建てられてゐます。

## 芝山巖教育に殉じた六士先生とその継承者

じつは野中夫妻が巖冬期富士山の気象観測に挑んだ同じ年、我が国が下関条約で領有する事になった台湾に近代教育を普及しようとして馳せ参じた六人の教師がゐました。実際は七人でしたが、彼らの上司で台湾総督府学務部長の伊沢修二は一時帰国してゐました。したがつて、ここで取上げるのは六人の教師です。この六人は、台湾の近代化教育を進める為に全国から集まつた有志でした。最年長が三十九歳の楫取道明、最年少は平井数馬といふ若者で満年齢十七歳でした。

当時は日本による統治がはじまつて間もない頃ですから、日本による領有統治に反対するゲリラが各地にゐました。半年後の明治二十九年元旦、現地のゲリラ（匪賊）によつて六人の先生が襲撃され、惨殺されました。これを世に芝山巖事件と言ひます。しかし、台湾の多くの人々はこの六人の先生のことを決して忘れなかつたのです。後に数へ子だつた潘光楷といふ方がかういふふうに戻想してゐます。

最初の教室は芝山巖廟の後棟樓上に設置せられ、余は此所に楫取道明先生と起居を共にしたり、生徒は僅か六名、(中略)師弟の温情益々深きものあり(中略)。我等が恩師は南瀛の文化を啓発し、人心を陶冶するの目的を以て、遠く絶海の孤島に臨まれ、旦夕余等を教導するの任に膺り、余等亦慈父の親みを以て之に見えたりしも、竟に其の鴻圖を果さず空しく天涯の鬼と化せらる。今や當時を追憶し轉々断腸の念に堪へざるものあり。然りと雖も今日日本島の教化大に大に揚り文風日に進みたる、是れ豈に在天諸氏が英靈のこれを啓発せられたるに依らざらんや。〔芝山巖誌〕収録 潘光楷「回顧三十年」

芝山巖といふのは台北市の郊外にあつて、昔から由緒ある地域でした。学務部長の伊沢修二は、ここを教育の地として選び、七人の教師とともに近代教育を始めたのです。ところが、現地の人々は近代学校とは何かといふことが分からないのです。これは明治初期の日本でも同じでした。ですから、親が子供を学校へ出さないのです。かうした困難に直面しながら、彼らは教育の意義を説いて回り、やつと六名が集まつてくれた。その経緯がこの潘光楷の回想に書かれてゐます。これが台湾近代教育の嚆矢なのです。

回想談に「余は此所に楫取道明先生と起居を共にしたり」とあるやうに、時には起居をと

もにして教育に当つたのです。かうして、六人の恩師が全力を尽くしたおかげで、日に日に台湾は隆盛を迎へつつあると感謝の念を述べてゐます。潘光楷さんは、後に士林庄長となられます。また六人の先生たちが、六人の生徒たちと一緒に泊り込んで生活をした芝山巖といふ学び舎は、今では士林国民小学校といふ台湾の名門小学校になつてゐます。心ある方たちは、あの殉職された六人の先生を「六士先生」と呼び、今でも忘れないのです。戦前、現地では六士先生を祀る芝山巖神社が建立され、年毎に慰霊祭が執り行はれてゐました。

ところで、六士先生の偉業は一年にも満たなかつたのですが、その台湾教育に賭けた情熱の火は消えたわけではありません。六人の先生の悲報が日本に伝はるや、全国から教職の資格を持つ有志が続々と台湾に赴いて行つた。その教師たちが六士先生の跡を継ぎ、全力で台湾の近代教育に明治、大正、昭和と当つていきました。

しかし、彼らの中のかなりの方が現地教育に携はりながら亡くなつてゐます。マラリア、赤痢、腸チフスなど、風土病に罹り殉職していつたのです。台湾には富士山より高い玉山（当時は新高山と呼ばれた）と高山地帯が広がつてゐるため、台湾は寒帯から熱帯までの全ての気候地帯が揃つてゐるのです。そのため、絶えず風土病に悩まされてゐたのです。近代教育の普及は文字通り命がけでした。

また、六士先生のあとを継ぐべく教育に当り台湾でなくなつた教師たちも、芝山巖神社に祀られました。当時の史料を仔細に見ますと、亡くなつた教師たちは四十七都道府県すべてに及んでみます。ですから、この何倍もの教師が赴任した筈です。芝山巖神社に祀られた方たちの出身地を都道府県別に一覧表(表2)にしてみました。当時の人々の願ひがどういふものであつたか、歴然と読み取れるでせう。

(表2) 芝山巖神社合祀者の数

北海道	一	青森	三	岩手	一	秋田	二	宮城	九	山形	五
福島	十四	茨城	十一	栃木	五	群馬	五	新潟	十二	千葉	五
東京	十	神奈川	二	埼玉	五	山梨	五	静岡	七	長野	八
富山	三	石川	四	岐阜	七	愛知	二	福井	二	滋賀	二
京都	二	三重	四	奈良	四	和歌山	三	大阪	三	兵庫	四
岡山	五	広島	十二	鳥取	一	島根	七	山口	十	香川	八
徳島	四	高知	四	愛媛	六	福岡	十三	大分	十三	佐賀	十六
長崎	七	熊本	二十三	宮崎	十四	鹿児島	二十一	沖縄	三		

合計 三百十七名(うち女性二十七名)

最近、台湾では大陸系の国民党の退潮に伴つて中学校用の歴史教科書が全面改訂されて使用されてゐます。「認識台湾」と名付けられた教科書ですが、とくに日本による台湾統治に關して是非で記述するやうになりました。とくに近代教育や産業振興などについては高く評価してゐます。かうした評価の原点が芝山巖教育を嚆矢とする六士先生とその継承者の日本人教師達にあることは推察されるどころです。

かつて高砂族と呼ばれた先住民が多く住む台湾東部の花蓮を、現東京都知事の石原慎太郎氏が訪れた時のことです。現地ガイドの方から受けた説明に感じ入つて、石原氏はこんな感想を書き綴つてゐます。

現地の旅行社の役員の工さんは、頭上の険しい断崖を指しながら、「日本の統治時代、日本からやってきた小学校の先生たちは、彼らもまた天皇の赤子であるということで、あの崖の上のはるか奥地にすむ西蕃と言われていた高砂族の教化のため、裸足であの滑りやすい崖を攀じ登り、自分の手で小道を拓いて部落まで赴き、彼らに教育を施した」と言つていた。以前、日本からのある教員組合の観光団を案内したとき、同じように断崖を指差してその話をしたら、中にいた若い教員は、「その頃の日本の教師はよっぽど馬鹿な奴が

いたんだなあ」と言い、皆が同調したように声をあげて笑ったという。工さんはそれっきり不愉快になって口をきかなかったそう。〔石原慎太郎「流砂の世紀に」〕

石原氏がここに指摘してゐる日本からの教員組合の観光団と、冒頭に取り上げた中学校歴史教科書に見られる歴史観とは、その基底において相通ずるものがかがへます。それは、自国の歴史を呪詛の対象とみなすか嘲笑ふかによつて正面から見つめまいとする病的な態度です。おそらく、さう構へなければ感動が襲ふからに違ひないのです。だから、過去の日本人が善いことをした筈はないとするイデオロギーを自己防衛すべく、愚劣な身構へに汲々とするのでせう。

どうか皆さんは、さうした不健全な態度を克服して、堂々とみづからの感性を大事にして歴史に学んでいただきたいのです。





講義

近隣諸国の動向と  
日本の主権

日本政策研究センター所長

伊藤 哲夫



はじめに——友好といふ名の屈従——

中国調査船活動の目的

中国の海洋戦略

「A級戦犯」分祀とは何か

「有条件降伏」——ポツダム宣言の意味——

日本の立憲制を守るための戦ひ

東京裁判での弁護団の戦ひ

先人達の思ひに連なる学問を

はじめに — 友好といふ名の屈從 —

来年度から使用される中学校の歴史教科書の選定作業を巡つて、中国並びに韓国から色々なルートを通じて直接的に圧力がかかつてゐたことがだんだん明らかになつてゐます。

我が国では、かなりの数の市町村が中国や韓国のどこかの町と姉妹都市提携をしてゐます。また、修学旅行だとかサッカー試合などの交流をしてゐます。そこで、さういふ繋がりを通して、我が国の各市町村の教育委員会に対し、中国や韓国から、この教科書を採用したら今までのかうした関係は全部ご破算にするぞと強い圧力がかかつたのです。教員委員会の方々は驚きまして、そんな大問題が起きるならこの教科書は採用する訳にはいかないと、どの教科書が一番良いのかといふ判断ではなくて、さうした圧力への恐れから扶桑社の教科書を選択しない所が、全国に続出したといふ訳です。

日本人は、かうした安易な友好といふ発想がどういふむづかしい問題を引き起こすかといふことを全く考へてゐないのではないかと思ふんですね。今回のやうに相互ひの歴史観がぶつかり合ふ、そんな時に友好ですからあなた方の言ふ通りにしませうといふ訳にはいかない

のです。本当は、こちらの本音と向かうの本音をぶつかり合はせて、時には喧嘩をするかもしれないけれども、その中で一致点を見出していくといふのが、本当の友好に到る道でせう。ところが、その途中のプロセスを全部排除して、深い考へも無しにとにかく手を握つてしまふ。国際政治の認識としては実に浅はかな考へで、姉妹都市といふやうなものが全国に作られてゐる。その結果、日本の国の隅々に、中国や韓国からの内政干渉の網の目が張り巡らされてしまつたといふ状況になつてゐる訳です。

修学旅行もさうです。日本の子供達は、例へば韓国の独立記念館や、中国の色々な戦争記念館といふ所に連れて行かれるのでせう。そこで向かうは、一方的に日本は過去の戦争においてひどいことをしたと宣伝する。日本の子供達は、それに対して最小限の反論する知識すら与へられてゐない。もちろん、先生の中には向かうに迎合するやうなことでしか教へない者もゐる。さうすると、連れて行かれた子供達は、その一方的な説明を聞かされて、日本は悪いことをしたんだなあといふ罪悪感だけを抱いて帰つて来るのではないか、さういふことを私は想像します。

我々日本の同胞は、中国や韓国からの内政干渉に対して有効な反論も為し得ず、向かうから言はれれば、ただ頭を下げるといふ形で屈従の姿勢を一方的に執らされてゐる。この日本



の現状を思ふ時、これを本気になつて考へないで、ただ友好だとか姉妹関係だとかそんな綺麗事で済ませてゐては取返しつかないことになると思ふ訳です。

#### 中国調査船活動の目的

ここで私が言ひたいのは、日本人として基本的な主張といふことなのです。

中国の調査船の問題を考へて見ませう。公海上には、その国の沿岸から二百海里の先まで、排他的経済水域といふものが国際法で認められてゐます。日本と中国の間でこの二百海里の線を引き合ふと、お互ひが重なり合ふ。重なる所では、その真ん中に中間線といふものを引いてゐる。日本の立場は、その中間線の日本側に関しては、中国の船が入つて来て、

純然たる学術的な調査活動を行ふのは公海だからよろしいけれども、日本国の経済的權益を侵すやうなこと、あるいは、日本の安全を侵すやうなことは許さないとはいふものです。日本が逆に向かうの排他的経済水域に入つて行く場合も、同じことです。

ところが、中国は調査と称して入つて来て、石油探査をやつてゐます。そこではエアガンで圧力をかけて海底に小さな地震を起こし、海底油田があるかどうかを探査する。中国は、中間線近くに位置する中国側経済水域内の平湖海底油田に既にプラットフォームを立ち上げ、そこから上海まで海底パイプラインを敷いて、石油やガスを送る活動を現在展開中です。この平湖油田を辿ると、日本側にまでその油田が来てゐるわけです。

中間線の話をしました。中国は、この中間線といふものを認めず、「沖繩トラフ」と呼ばれる海溝までは中国の大陸棚の延長であつて、そこまでは全て中国の排他的経済水域であると主張してゐます。馬鹿言つちや困りますよ、沖繩の目の前まで中国の權益水域ですか、と日本としては言ひたい訳です。これは、本来激しい議論をしなくてはいけない事柄ですが、日本は、中国と決定的な対立に陥るのを避けたいといふことで、この問題に決着をつけようとしな。つまり、曖昧にしてゐるものだから、日本がいくら中間線から入つて来ては困ると言つても、中国は入つて来る。そして、我々は正当な行為を行つてゐるんだと居直ることに

なります。

尖閣諸島、これは日本固有の領土ですが、中国は、俺達の領土だと途中から言ひ始めた。この下にすごい海底油田があることが分かったからです。ボーリング調査を行ふだけではなく中国の船をしきりに往き来させる。ここは「中国の海」なんだといふ既成事実を作らうとしてゐるのです。

### 中国の海洋戦略

中国は今、猛烈な海軍の拡張をやつてゐます。海軍の活動の自由を保障するのは潜水艦です。その潜水艦が行動していく時に特に重要なポイントとなるのが、南西諸島に属する沖縄本島と宮古島間の水域です。当然、日本もアメリカも、ここを押さへておけば中国の軍事行動を抑へることが出来ると考へる。逆に中国は、何としてもこの通航の自由を確保したので、現在、潜水艦活動のための潮流を調べたり、海底の水温を調べたり、海底の地図を作つたり、純軍事的な調査活動を行つてゐる。

地図を見ると、中国海軍の太平洋への進出を阻むかのやうに、台湾があつて、日本の南西



諸島が延びてゐます。そこで、中国が絶対に欲しいのが台湾なのですが、台湾を取りに行くには、日本の領土である宮古島から与那国島までの先島諸島を、中国の完全な軍事的影響下に置き、台湾武力解放時の拠点にしたいといふ考へもある筈です。従つて、中国はここには自衛隊の基地は絶対に作らせたくない。沖縄で反米基地闘争をやらせたり、反自衛隊闘争をやらせたりするのは、そのためでもあるのでせう。

強調したいのは、中国は、二十一世紀の資源の問題、領土の問題、海洋戦略の展開の問題、あるいは軍事戦略、これら全てを周到に計算し尽くして、今この調査船活動をやつてゐるといふことです。これは杏林大の平松茂雄教授のご指摘ですが、中国のやり方は、まづ漁船を出す。漁船で色々問題を起こしながら、次に調査船が出て来る。そして、調査船である程度既成事実を作つたところで軍艦が出て来るといふのです。これは、南沙諸島でやつて、ヴェトナムやフィリピンを排除してしまつて、中国が南沙諸島や南シナ海は俺達のものなんだと宣言した経過が、正にそれだつたのです。そして、日本でもそれが始まつてゐる。漁船が出て来、調査船が出て来、一昨年からは軍艦が出始めてゐる。これからは、軍事行動が始まるでせう。

それに対して、日本側は、その中間線の主張も及び腰、ましてや、中国に対して強硬に抗



議することなどとても出来ない。中国が、中間線のすぐ外側で石油を掘り始めてゐるにも拘はず、日本側でも、例へば尖閣諸島の海域で、うるま石油といふ会社が石油を掘りたいと申請してゐるのですが、外務省は中国を刺激するといふ理由で、石油のボーリングを一切認めないのです。これは一体、まともな国のあり方でせうか。

二十一世紀、日本がこれから世界で活動していくに当たつて、この弱腰の姿勢は、決定的な日本のブレーキになると思はれます。そして、これに加ふるに日本国民の無関心。いふまでもないことですが、日本国民の日々の努力と監視が無ければ、日本の生存は確保できません。現に、中国は着々と世界戦略を実践に移してゐるのです。

中国の学校では、清朝の最大版図が本来の中国の領土で、現在欠落してゐる部分は、帝国主義によつて掠め取られた領域であると教へてゐます。私はこの地図を見たとき、初めは信じられませんでした。ところが一昨年、台湾に行つた折に、台湾の中学校の地理の教科書に同じ地図が載つゐたので驚いた次第です。朝鮮半島も、沖縄も樺太も、中国の回復すべき領土になつてゐるのです。この感覚でいくと、南西諸島は非常に軍事的に重要な地域だと申し上げたけれども、中国が、尖閣諸島は自国の領土だといふのはむしろおとなしい主張であつて、実は沖縄も俺達のものなのだといふのが中国の姿勢なのでせう。現に学校ではさう教へ

てゐる。

かうした事実を日本人は知らなくて、友好、友好と言ふだけ。しかし、本当に姉妹関係になるんだつたら、この地図は一体何ですかと、きちつと議論し合ふべきで、かういふ問題があるにも拘はらず、それに敢へて眼をつぶつて姉妹関係といふのは偽善であります。

### 「A級戦犯」分祀とは何か

もう一つ、日本の主張といふことについて考へて見ませう。

小泉純一郎首相がこの八月十五日、靖国神社に参拝すると仰つた。田中真紀子外相が中国へ行つて、唐家璇外相から日本語で「やめなさいとゲンメイします」と言はれた。外務省は「言明」だと言つてゐるが、本当は「嚴命」だつたのではないか。朝貢国の目下の者に言ふ言葉で日本の外相が言はれて、「はい、分かりました。帰つたら総理にそのやうにお伝えします」と下がつてくる。一体、日本外交の主体性はどこにあるんだと言ひたい訳です。

山崎拓自民党幹事長が中国に行つた時、唐家璇外相は「いはゆる一般の戦死者に対し手を合はせることに私達は反対するものではない。ただ、中国にあのやうな戦争を仕掛けた責任

者が靖国神社に祀られてゐることに對して、我々はそれを容認することは出来ない」と、さういふことを言つたさうです。それに対し山崎氏は、「さういふ人達の御霊を靖国神社から外せば、中国側は認めて下さるといふことでございますか」と、聞かれもしないのに日本側から言つたといふんですね。日本の首相が日本の靖国神社に参拝することに対して、何故中国の許可を得なくてはいけないのか。それも、かういふふうにすれば許してもらへますかなんて、そんな恥づかしいことをやつてゐる。しかし、それに対して、一般国民やマスコミから、「自民党を代表して何といふ外交をしてゐるのか」といふ抗議の声が起こつて来ないんですね。

そこで、出て来るのが、「A級戦犯」分祀論です。「A級戦犯」とは、かうした人々にとつて厳密な定義は、別にして、大東亜戦争の開戦に重大な責任を負つた人達、それくらゐの認識なのでせう。しかし、中国人に言はせれば、要は極悪人の別名称です。靖国神社には十四人のいはゆるA級戦犯と言はれる人達が祀られてゐます。そのうちの七人は東京裁判で絞首刑に処せられてゐる。東條英機さんは、その中の一番代表的な方です。しかし、簡単に極悪人と言ふけれども、例へばその中に廣田弘毅といふただ独り軍人ではない日本の元首相が入つてゐる。城山三郎さんの『落日燃ゆ』といふ小説があつて、これを是非、皆さん方に読ん

でもらひたいのですが、これ一つ読んで分るやうに、廣田弘毅さんは全く戦争になんて責任はない。にもかかはらず、さういふ人達もあの暗黒裁判によつて一方的に裁かれました。陸軍大将、松井石根いしねさん。この方は、たまたま南京攻略戦の時に司令官をされたものですから、中国側の主張するいはゆる「南京大虐殺」に責任があるといふことで、絞首刑に処せられた。しかし、いはゆる南京大虐殺自体が全く根拠の曖昧な主張です。この松井石根さんほど、中国と日本の友好を考へた人はをりません。現に南京攻略戦が終はつた後日本に帰つて来て、現役を引退されて、熱海に興亜観音を建てられました。中国大陸で死んだ日本軍將兵のみならず、そこで残念ながら死ぬこととなつた中国人將兵達の御霊みたまを慰めるべく、彼らの血の染みついた土を中国から持ち帰つて、それで興亜観音を造られた。これから日本と中国は、兄弟のやうに力を合はせて生きて行かなければならないし、いつかは平和を築かななくてはいけない、さういふ願ひを込めて造られたのです。南京事件に対しては、何かを命令したこともなく、監督不行届といふことだけで絞首刑にされたのです。

あるいは、絞首刑にされなかつたけれども「A級戦犯」とされた重光葵しげみつ まさるといふ、後に外務大臣を務めた外交官がゐます。ソ連は中立条約を破つて日本に攻め込んだ侵略者であるにも拘はらず、俺達にも日本を裁く権利があるのだと主張しました。しかし、ソ連の立場で日本

に文句をつけようにも、ソ連との間には戦争が無かつたのですから、ひつくくれる人物がある筈がない。そこで、たまたま駐ソ大使も務めたことのある重光葵さんを指名した。戦争に一切関係ない人ですから、世界中が驚きました。しかし、ソ連に反対されたら東京裁判自体が成り立たなくなるので、ソ連の要求通り重光さんは「A級戦犯」といふこととなつた。そして、七年の禁固刑に処せられましたが、東京裁判の検察団長を務めたキーナンといふアメリカ人が、重光さんの弁護人を務めたアメリカ人のジョージ・ファーンズに手紙を書いて、かういつてゐます。

「率直に言つて、彼のケースが無罪になることを期待するに十分な理由を持つてゐたのであり、しからざる結果になつた時に、非常に困惑したのであります。正義と公平の前に、私は彼を（裁判に）引き入れたことが間違ひであつたことを確信するに至りました。私がかうした考へは、彼が自若として、当然予期せらるべき憤懣状態を何ら現はすとなく、この状態を男らしく受け容れたことによつて、ある程度安心したのであります。しかし、リストから彼を解除することが直截な正しい措置であることと考へます。さらに、現在および将来に向かつて、われわれが直面してゐる混乱した時代に、日本人は重光のごとき経

験と信念の士を必要とするのでありませうし、彼の同胞に対する影響力は、日本国民の国内および善隣関係における健全な将来に寄与することの多いことでありませう。」

東京裁判を推し進めた検察の責任者が、あの東京裁判で重光を裁いたことは間違ひだつたと告白してゐるのです。「A級戦犯」と一言で言ふけれども、全く身に覚えのない罪によつて、暗黒裁判によつて死に到らしめられた人達です。

さらに、「A級戦犯」の方々を靖国神社が勝手に祀つたかのやうに言ふけれども、そんなことはありません。日本の独立後、獄中に入れられてゐる人達を釈放すべきだといふ大規模な運動が国民の中から起こり、実に四千万の署名が集まります。当時の日本国民は皆戦争を経験してをり、それがどういふ戦争であつたか皆分かつてゐた。だから、東京裁判で罰せられた人達が全く罪なく罰せられたことを皆知つてゐた。そして、衆議院、参議院で合計六回の赦免決議が行はれて、彼らは釈放されます。

また、刑死した方々の家族達は、A級だけでなくB級C級も含めてですが、主人を失つて貧困のどん底に喘いでゐました。この人たちに遺族年金や、拘置所から出て来た人達には恩給を与へるべきだといふ議論が起こり、国会では、遺族援護法並びに恩給法の改正が行はれ



ました。我が国では犯罪人やその遺家族はさうした法律の対象にはならないといふのが、法律の原則になつてゐる。つまり、国会が今述べた法改正を行つたことは、戦犯と称せられた人達は、少なくとも国内法の視点からは決して犯罪者ではないといふことを、国家意思として決定したことを意味します。それを日本国民全体が支持したのです。その国会決議によつて、遺族年金の対象となる人達が靖国神社の合祀対象の基本名簿に入り、靖国神社は、それを合祀した訳です。これらの法改正には社会党も含めて全員が賛成しました。その決定に基づいて、いはゆるA級戦犯合祀が行はれました。

ですから山崎氏にも、かつての日本の国会議員は大多数が毅然とした日本人の心を持つてゐたことを知つてもらひたいし、国会が結束して決定した赦免決議や法改正のことをしつかり踏まへて行動してもらひたいと思ひます。自民党の一部の人達を含め今の政治家達には日本人としての基本的な信念が余りにも無い、主張が無い、そして何よりも知識が無いのです。国家は「悪」によつて亡びるのではなく、「愚」によつて亡びると言ひます。この「愚」によつて日本人の意志が崩壊せしめられようとしてゐる。信念の無い国家が、これから二十一世紀の国際政治の中をまともに生きて行ける筈がないのですね。

戦後五十年間、日本にはまだ戦前からの生き残りの方々がをられて、その方々が信念を持

つてをられた。死んでいつた方々の記憶を胸に抱きつつ、その人達を裏切つてはならないといふ思ひでずうつと頑張つて来られた。だから日本は崩壊しないで済んだのです。しかし、この方々が今次々に鬼籍に入られてゐる。さうなつた時に、信念の無い日本人ばかりになつてしまつたら、この国は一体誰が支へるんでせうか。中国は南西諸島に出て来ますよ。先島諸島は取られますよ。先島諸島どころか沖縄本島だつて取られるかもしれない。台湾も解放される。さうなつたら日本のシーレーンは切られます。さういふ有り得べき日本の前途といふものを、一つ一つ考へて下さい。日本の生存と独立は、日本国民としての自覚を持つた者が一体どれだけゐるかといふことにかかつてゐるのです。

国力といふのは国民力なのです。「国民の信念の力」の総和が国力なのです。こんな現状の日本では、国力が出てくる筈がないといふことを考へて頂きたいのです。

### 「有条件降伏」——ポツダム宣言の意味——

連合国は戦争中に、日本を無条件降伏させると豪語してゐました。無条件降伏といふ言葉を最初に使つたのは、アメリカ大統領のルーズヴェルトですが、一九四三年、モロッコのカ



サブランカといふ所で、記者団を前にして彼はかう定義しました。「無条件降伏といふのは、日本やドイツやイタリアを徹底的に打ちのめすことだ。物理的に打ちのめすのみならず、その国の力を支へてゐる思想や哲学を徹底的に破砕することである」と。これは、ルーズヴェルトのカサブランカ発言と言つて歴史上有名な言葉ですが、非常に示唆的な言葉です。日本人を二度と立てない民族にする。言ひ方を換へると、それは精神的武装解除であり、それが具体的政策になつて現れたものを、ウオー・ギルト・インフォメーション・プログラムと言ふ。これは「我々はとんでもない馬鹿な戦争をしてしまつた駄目な民族なんだ」いふことを徹底して日本人に刷り込むプログラムのことです。占領政策とは正にこれを実施することでした。アメリカ軍の占領マニュアルである「初期対日方針」には「占領とは敵対国に対する軍事行動の継続である」と書いてある。占領とは、日本を精神的にたたきのめすための「追撃戦」であつた訳です。

しからば、日本は精神的にも完全に破砕されたのか。百パーセント破砕された訳ではなかつた。むしろ日本は強かに戦つたのです。

その戦ひの根拠となつたのが、実はポツダム宣言です。アメリカは日本を無条件降伏させると言つてゐたが、ポツダム宣言ではそれを修正してゐます。例へば第十三項に「吾等は日

本国政府が直ちに全日本国軍隊の無条件降伏を宣言し」と書いてあります。土壇場になつて日本に出してきてきた降伏勧告では、「日本国軍隊」の無条件降伏になつたのです。軍隊が無条件降伏さへしてくれば、国家は無条件降伏しなくてもいいんですよといふことです。また、第十項には「日本国国民の間に於ける民主主義的傾向の復活強化に対する一切の障礙を除去すべし」と書いてある。ルーズヴェルトの無条件降伏の定義では、今までの日本の精神を全部潰すといふことだつたけれども、このポツダム宣言では軌道修正してゐます。戦前の日本には「民主主義的傾向」はあつた、その昔からの民主主義的傾向を「復活強化」する、そのための障礙は排除するといふことなのです。

このポツダム宣言を見た時に、日本国政府は、これなら降伏できると考へた。日本国の無条件降伏だと言はれたら、日本は本土決戦でも一億玉碎でも何でもやつたでせう。そんなことを受け容れて敗けるやうな腰抜け日本ではなかつた。

何故アメリカは軌道修正してポツダム宣言を出して来たのか。例へば沖縄戦です。沖縄なんてすぐに潰すことが出来るとアメリカは思つてゐた。ところが、沖縄県民と軍が一致して激烈な抵抗を行つた。アメリカ将兵も一万五千人がここで死んだんですね。この時、アメリカの陸軍長官スチムソンは、天を仰いでうなつた。これはもう破滅だ。沖縄でこんなに犠牲

を出したのでは、本土決戦なんて絶対にやれない。アメリカ人将兵だつて何百万人も死ぬ。そんなことを私は命令できない。その時に、國務長官のジョセフ・グルーがスチムソンの所へ行つてかう言つた。「であるならば、無条件降伏なんて馬鹿なことは言はないで、日本に對して、日本の精神の生き残りは可能だ、天皇制度の生き残りは可能だといふことを保証したらどうですか」と。

そこから、このポツダム宣言の案出が始まるのです。このポツダム宣言の文言の背後に、沖繩で死んで行つた六万五千の日本人将兵、ひめゆり部隊や鉄血勤皇隊の人達の血と涙を思はなかつたらいけないです。その人達の、あるいは、特攻で散華さんけした英霊達の、その死に物狂ひの抵抗があつたからこそ、これが勝ち取れたんです。それが無かつたら、日本は無条件降伏です。日本は再建の根拠も無い程に潰されてゐたでせう。皆さん方に訴へたいのは、かういふ文章一つをとつても、その奥には、先人達の命を懸けた努力の結晶があるといふことなのです。それを読み取ることの出来ないやうな歴史学なんて「嘘」でせう。

日本の外務省条約局は、この宣言文の一言一句を見逃さなかつた。昭和天皇陛下は、本土決戦論者の主張を抑へられ、このポツダム宣言を受け容れ日本の国を再建しようではないかと仰られた。終戦の詔書の中で、昭和天皇陛下は「五内ごだい為二裂ク」といふ言葉を使はれまし

た。その意味するところは「この戦争を止めようと言はうとすると、この戦争のために今まで死んでいった沢山の人達、それは日本人だけではない、日本人と共に戦ひ協力してくれた台湾人、朝鮮人、あるいは一部の中国人を含めた東南アジアの人達、日本がアジアの盟主になつてくれることを信じて、共に立ち上がつてくれた一人ひとりのことが思はれ、私の肉体が切り裂かれるやうな苦しみ、悲しみを覚える。しかし、それでも、その苦しみ、悲しみに耐へて日本は終戦に足を踏み出さねばならないのだ」といふことです。

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも

と、昭和天皇陛下はお詠みになられた。自分の身はどうなつてもよい、占領軍がやつて来て自分を絞首刑にするかもしれないが、それでもいいのだといふ御決意をなされた。「五内為ニ裂ク」といふご心痛の中で、「このポツダム宣言は信頼できる。それは、日本人が戦つたことによつて勝ち取つたものである」と認識されて、終戦を決意されたのです。私はこの敗戦の歴史を学ぶことの中に、大変な誇りを覚えます。

## 日本の立憲制を守るための戦ひ

ところで、このポツダム宣言を踏まへて、戦後の日本人は占領政策に対しても戦ひました。第十二項には「前記諸目的が達成せされ且日本国民の自由に表明せる意思に従ひ平和的傾向を有し且責任ある政府が樹立せらるるに於いては」と書いてある。「日本国民の自由に表明せる意思に従ひ」と書いてあるのだから、たとへ明治憲法を改正することがあるとしても、それは、日本人の自主的な判断で出来る筈だし、また、さうでなくてはならない。当時の日本政府も、また、これからお話しする佐々木惣一博士もさう考へた。当たり前のことである。

今、中学校や高校の歴史教科書、あるいは大学の憲法の教科書を見ると、頑迷固陋な明治憲法の発想から抜け出ることの出来ない反動的な分子が、極めて守旧的な改正案しか作れなかつた、それを見るに見かねて占領軍は、憲法押しつけはまづいと思つたけれども、放つてはおけないので民主的憲法のモデルを示した、かう書いてある。冗談ぢやありません。

占領軍は、日本を出ていく時に“Political reorientation of Japan”『日本政治の再構成』と

いふ文書を作つて出ていった。それは、占領軍がやつたある意味での国際法違反を正当化するための文書でした。護憲派はこの文書に飛びつき、それを大急ぎで翻訳して広めていった。といふことは、日本の憲法はアメリカ軍に押しつけられたものであることはご存じの通りですが、日本国憲法の制定を正当化する理屈までも押しつけられてしまつたのが日本人であつたといふことで、こんな情けないことがありますか。

皆様方は、松本丞治さんの日本政府の憲法問題調査委員会のことをご存知だらうと思ふのですが、ここではその前の段階で、憲法改正案を天皇陛下に御奉答になられた佐々木惣一博士のことをお話したいを思ひます。

佐々木惣一博士は、当時京都帝国大学の教授で、美濃部達吉博士と並ぶ日本を代表する憲法学者でした。その方が、昭和二十年の九月から十一月にかけて箱根の旅館にこもり憲法の研究を始めるんです。その時に近くで手伝つた助手の磯崎辰五郎といふ憲法学者が、かう書いてみます。

「それは箱根の晩秋である。早朝まだ女中が炭火を運んで来ない間の寒さは厳しいものであつた。しかし、先生は自若としてその数時間こそ一番身が入るものの如く研究に精進さ



れた。全く古への名僧などが道場にこもつてひたむきな修行をしたといふのはかういふものであつたらうと、そのお姿を尊く拝したことであつた。」

佐々木博士は机の前に端座して、ただひたすら思考を深められた。机の上には一冊も本を置かれなかつたと言ひます。全部頭の中にあつた。本の中からあつちを取り、こつちを取り、頭の中の表面で色々考へることは馬鹿でも出来る。大切なのは、思考を深めることなのです。その結論が出て、天皇陛下に帝国憲法改正案について御進講され、その足で、明治神宮に行かれた。当時、人影まばらな明治神宮の社頭に額づいて「明治天皇様がお創りになられた明治憲法の改正案を私は作り、それをただ今天皇陛下にご進講申し上げて参りました。それに天皇陛下は深く聴き入つて下さいました。何といふ有り難いことかと私は感じました」。かう言つて社頭でしばし額づかれた。そして、独り日本国の前途を祈られた後、俳句を作られました。

空風や社頭に祈る老一人

その時の情景が目には浮かぶやうです。

一年後、貴族院議員になられた佐々木博士は、占領軍起草の憲法改正案を受け容れるか否かの決議が行はれる貴族院の壇上で、最終討論に立たれることになった。占領軍の厳命であるこの憲法案を拒否することが出来ないことは、誰もが知つてゐた。だからと言つて、議員としてそのまま何も言はずに引き下がつていいものだらうか。やはり、日本人としての叫びは残さねばならないと先生は考へられた。

その前日、実は佐々木博士は齋戒沐浴されて、再び明治神宮へ向かはれました。

「十月四日午後、私は独り明治神宮へ参拝した、私が議員として最大のものと思はれる役目を務める明日の日、私がただ清浄な心になりきることの出来るやう、祈願したのである。やがて拝辞しようとする時、天氣の少し曇つてゐることに気づいた。帰る道すがら、前年十一月二十四日のことに追憶が及んだ。二十四日は憲法改正に関する奉答の任を終へた日の翌日、御進講の任務を果たして明治神宮へ参拝した日なのである。同じく森厳の気の満つる社頭ながら、額づく老書生に迫る秋の声は、今年と去年と自ら別の感じを誘ふのであつた。」



「自ら別の感じ」といふのは、一年前はまだ日本の自主憲法を作れると思つてゐた。ところが今や、米國製の憲法を押し付けられた。その状況の余りの変り様といふことです。

そんな中で、反対討論に立たれた。この後は皆さん、是非この貴族院議事録を一言一句も疎かにせず読んで欲しいのです。日本の最高の憲法学者が、アメリカ製の憲法案よりも、明治憲法の方が格段と上なんですよといふことを、ここで言つてをられる。それを指摘して、何故これほど明らかであるにも拘はらず、こんな憲法案を受け容れねばならないのか。壇上でかう指摘され、最後に続けられます。

「帝國憲法は皆さんご存知の通り、明治天皇が長年月にわたり我が國の歴史に照らし國の制度の理論と實際とを調査せしめ給ひ、その結果に基づき御裁定になつたものであります。その根本は政治を民意と合致して行ひ、また國民の自由を尊重して政治を行ふといふ原理に立つてゐるのであります。加ふるに、明治天皇は憲法制定の事務をお考へになつたのみではなく、御一個として明治維新以來つとに民意政治を原理とするの必要を思はせられました。そしてそのご教養のために、あるいは我が國に學者を招いて外國の書を講ぜしめ給

ひ、あるいは侍臣をイギリスに派遣せられまして、その制度を研究せしめ給うたのであります。」

かういふふうに、明治天皇が中心になられて、正に曇り無き清浄の心を以てお定めになられたのが、この明治憲法だと指摘されたのです。親王様がお亡くなりになった報に接しても、草案審議の場からはすぐには御退席になられなかつたほど、明治天皇はこの憲法に心血を注いでをられた。さうした事実も指摘されつつ、佐々木博士はいよいよ最後にかう言はれます。

「加ふるに、我々の祖たる先覚国民がこの明治憲法の制度を請ひ願ふ時に、当路の忌諱に触れまして、あるいは獄に投ぜられ、あるいは財産をなげうち、あるいは時に生命をなげうつた者が、実に枚挙にいとまがないのであります。」

この憲法を創る為に自由民権運動といふ運動があつた。その人達は、当時は警察が荒つばかりだから、逮捕され獄中死した人間もゐる。でも、さうした者も含め皆が願つたその最終的な憲法が明治憲法だつたのです。

「かくの如く、上に聖天子あり、下に愛国先覚の国民あり。また事務的に精励の当局あり。かくの如く上下一致して長年月の努力の結果、やうやくにして成立しましたところの帝国憲法は、その發布以来今日に到るまで幾十年、これが如何に大いに我が国の国家の発展、我が社会の進歩に役立つたかは、ここに喋々するまでもありません。その憲法が今一朝にして忽々の間に消滅の運命に晒されてゐるのであります。実に感慨無量であるのであります。」

これは正に明治憲法への追悼の演説であるといつてもよからうと思ふですね。占領軍が作つた今の憲法制定史、大学の先生方が教へるそんな安っぽいものは違ふ日本人の魂の物語がここにはあります。

この発言が終つて、いよいよ採決になります。そして憲法が決まつた。拍手が起ころと思ひきや、貴族院議場一瞬寂として声無く、しばらくの間沈黙がおほつた。そして、沈黙の後、大波のやうな嗚咽の聲が議場をおほつたと言ひます。これが憲法が国会を通つた日の真実なのです。どうしてそのことを日本人は忘れてしまつたのか。そして、この佐々木惣一博士が

反論の一番の根拠にしたものは、ポツダム宣言でした。このポツダム宣言には、占領軍が憲法を制定していいなんてことは一つも書かれてゐなかつたのです。

### 東京裁判での弁護団の戦ひ

最後に皆さんにお話したいのは、極東国際軍事裁判（東京裁判）の場で弁護団の中心的役割を果たされ、東條英機被告の弁護人も務めた清瀬一郎氏のことです。ポツダム宣言の第十項には、「吾等の俘虜を虐待せる者を含む一切の戦争犯罪人に対して嚴重なる処罰を加へらるべし」とあります。連合軍は戦争犯罪人を処罰するために裁判をやるぞと宣言し、日本はそれを受け容れた。その東京裁判の冒頭、清瀬一郎弁護人は、居並ぶ裁判官と連合国側の検事を前にして、この東京裁判は、国際法的にどう考へても成り立たない、よつて、この軍事裁判所は直ちに解散すべきである、といふ爆弾発言をした。その時に根拠にしたのが、このポツダム宣言第十項です。当時の戦時国際法では、捕虜虐待や民間人をむやみに殺傷する等の戦争犯罪は禁じられてゐました。しかし、戦争を始めることそれ自体が悪であるとか、あるいは、大東亜戦争が侵略戦争であることをそのまま正当化するやうな根拠が国際法に書か

れてゐた訳ではないのです。ですから、存在しない法に基づいて裁判をやらうとするのは、無法な裁判なのだから、この裁判は成り立たないと清瀬氏は主張しました。

連合国側は愕然とし、騒然となつた訳ですが、この裁判所の管轄権動議に対して、裁判所はいづれ回答を為すであらう、回答が出るまではこの裁判は続けると言つて、連合国側は強権を以て裁判を続行したのです。しかし、それから二年間反論は出なかつた。出せないのです。そして、判決を下す際にそれと一緒にして、理屈にならない理屈を並べて、この裁判所は合法であると宣言して閉廷しました。

清瀬氏のこの裁判所の管轄権に対する動議は、世界の識者をして感動せしめました。例へばイギリスの有名な政治家であつたハンキー卿は、正に日本側弁護人の言ふ通りであつて、この裁判は暗黒裁判たるを免れ得ないと言ひました。また、日本側の弁護に協力したブレイクニー弁護士も、もしそれでも合法だといふのなら、その根拠となつてゐるのは事後法で、罪刑法定主義や法の不遡及性に違反すると主張しました。ブレイクニー弁護士はさらに続けて、「そもそも、あなた方連合国には日本を裁く資格などない。何故なら、原爆を投下したのは一体誰だ。あれほどの野蛮な行為があるのか」と言つた。その時突然、同時通訳の日本語の音声が消えてしまつたと言ひます。日本側に絶対こんなことは聞かせてはならなかつた

からです。にもかかはらずブレイクニーはさらに続けた。「あなた方の手は汚れてゐる、東條を裁くのであるならば、原爆投下に判を押したのは誰だ、その時の陸軍長官は誰だ、アメリカ大統領は誰だ、私はその名前を知つてゐる、それでもあなた方は東條を裁くのか」と。これを言はれたら、もう完全にアウトでせう。同時通訳の日本語音声を消してしまつて、そんな発言は認められないといふことで、東京裁判は始まつたのです。

初めの八ヶ月、検察側は日本が如何に侵略戦争を行つたかといふことを、延々とやつた。例へば中国関係では南京大虐殺、とんでもないことをやつたと。この連合国側の検事団が作つた起訴状、あるいは冒頭陳述、この論理が多数意見判決を含め、東京裁判史観と言はれるものです。当時マスコミは全て検閲下でありましたから、書けと言はれば日本人はいやでも書かざるを得なかつた。だから日本の新聞は書いた、ラジオもニュースを流した訳です。それを一般の日本人は聞かされて、日本人はそんな悪いことをしたのかと思はされた。正にウオー・ギルト・インフォメーション・プログラムの最高の見せ場だつたのです。

その後、日本側の反証が始まります。その時に出されたのが、清瀬一郎弁護人の冒頭陳述、そして、その冒頭陳述に基づく各個別テーマに関する立証でありました。

是非、この清瀬一郎氏の冒頭陳述を読んで頂きたいと思ふ。例へば、講談社学術文庫から



『東京裁判 日本の弁明』（小堀桂一郎編）といふ本が出てをり、その中に清瀬一郎氏の冒頭陳述が全文収められてゐます。

清瀬氏は家は焼け、庭で育てた南瓜かぼちゃで栄養を取りながら、必死で証拠集めをして戦つたと言ひます。しかし、集めた証拠も重要なここぞといふ勝負所で八割方が却下されてしまつた。その却下された証拠類に関しては、平成七年に国書刊行会から『東京裁判却下未提出弁護側資料』全八巻が刊行されてゐます。あのひもじい中で、資金もない、コピーもない、さういふ万事不便な中で、日本人はよくぞ戦つた。そして頭脳明晰だつた。いかに日本人としての心意気に燃えてゐたかといふことが、その資料集を読むと行間から伝はつて来ます。これらが証拠として採用されてゐたならば、東京裁判の結果も違つてゐたかもしれぬ。それくらの証拠を集め、弁護活動をやつた訳ですね。

しかし、もともとが公正を旨とする裁判ではなかつた。その暗黒裁判によつて一方的に断ぜられたのが、「A級戦犯」と呼ばれる人達です。にも拘はらず、日本の政治家は、それも自民党の政治家が、その「A級戦犯」を極悪人と称する中国の言ひ分に従つて、その「A級戦犯」を除けばいいんでせうかと、かういふ外交をやつてゐるのが、今の日本の現状なのです。

## 先人達の思ひに連なる学問を

最後に皆さん方に訴へたいことは、さういふ裁判が終り、日本が独立した直後に起こつたのは、その裁判で断罪された人達の釈放を求める国民運動であつた。そして署名が四千万も集まつたといふ事実です。当時は、右も左も関係なく国民一致結束して日本の名誉を回復しようとした。彼らの名誉を回復しようとしたのです。それが日本人の主張だつた。一体、その日本人の心意気、日本人の思ひはどこへ行つてしまつたんでせうか。

では、皆さん方がその先人達の思ひを自分のものにするにはどうしたらよいか。勉強するしかないのだと思ひます。国家は悪によつて亡びるのではなく、愚によつて亡びると言ひました。この先人達の思ひに連なることができるやうな勉強をやらうといふことです。さうしなければ、この日本国のことを信じ、日本の国のために戦つた人達に申し訳ないぢやないですか。私は学者ではありませんが、何とか時間をやりくりして一所懸命になつて、かういふ先人達の残された資料類を読みます。資料の中の文章の一言一句に、実は重大な日本人の思ひが隠されてゐるんです。それを読み取れるやうになるまで読み込まなければならぬと思ひ



ます。読み込んで初めて資料を読む力が出て来るんです。さういふ勉強を是非皆さん方にや  
つてもらひたい。その皆様方の学問への志が力となつて、人力となり国力になるんです。そ  
して、それが国力にまで高められた時に、この日本国の前途は安泰になるのです。しかし、  
それが無い時は、日本はまづ外交戦で敗れます。外交戦の後にやつて来るのは、多分力によ  
る戦ひの敗北でせう。

南沙諸島ではヴェトナムがやられました。フィリピンがやられました。台湾ももしかした  
ら解放されるかもしれない。それと同じやうに、日本も何かされるかもしれません。しかし、  
それを防ぐ手だてはある。それは、あなた方一人ひとりの人力であります。人力は何によつ  
て成り立つか。それは皆様方の志によつて成り立つ。志とは何か。それは先人達の思ひに連  
なり、その思ひを決して裏切らないといふ覚悟であります。そして、それを自分のものにし  
るために勉強するといふ覚悟であります。さういふ学問が今大学でも色々な所でも一番欠け  
てゐるのではないかと思ふのです。



講義

— 輪読導入講義 —

吉田松陰『講子皿餘話』

新日本製鐵(株)プラント事業部(囑託)

今林賢郁



はじめに

野山獄と『講孟餘話』

學問——「道の大本」を知ること

道統——斷然自ら任ぜん

留魂

## はじめに

これから「吉田松陰『講孟餘話』」といふことでお話し致しますが、私の話がこの後の班別の「古典輪読」にいささかでもお役に立てればと思つてをります。吉田松陰については皆さん良くご存知だと思ひますが、その短かつた生涯の後半について極く簡単にご紹介しますと、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが四隻の軍艦を率ゐて浦賀沖に現れたのは嘉永六年、西暦では一八五三年。松陰二十四歳、今から約一五〇年前の事です。この事件を契機として国内はその対応をめぐり国論を二分する激動の時代へと突入していきませんが、それから六年後の安政六年、西暦一八五九年、松陰は「安政の大獄」といふ政治的弾圧事件に連座して処刑されます。この時松陰三十歳、その七、八年後が明治維新です。この危機の時代の只中を、松陰は終生「至誠」を貫ぬくことを自己に課しその道に殉じました。

今日は松陰の最も主要な著作と言はれる『講孟餘話』に触れたいと思ひますが、「講孟」とは松陰が『孟子』を「講」じたといふ意で、「餘話」とはその際政治、外交、教育等について松陰の心の中に生じた所感を自由且つ率直に述べたものと考へていいと思ひます。それでは、この『講孟餘話』はいかにして生まれたか、最初の文章を見てみませう。

## 野山獄と「講孟餘話」

甲寅十月、余罪ありて獄に繋がる。時に余と狂狷に列する者、凡そ十一人なり、余詳か  
に之れを問ふに、其の繋がるること久しき者は數十年、近き者も三五年なり。皆曰く、  
「わが徒終に當にここに死すべきのみ、復た天日を見るを得ざるなり」と。余乃ち嗟愕し  
て泣下り、自ら己れも亦其の徒たるを悲しむに暇あらざるなり。ここに於て義を講じ道を  
説き、相與に磨厲して以て天年を歿へんと期す。

〔野山獄囚名録敘論〕安政三年三月二十八日

先づ引用文の中のいくつかの語句の説明をします。「狂狷」とは牢獄、「嗟愕」は驚き嘆く、  
「義を講じ道を説き」とは「論語」「孟子」等を講読したこと、「磨厲」は磨く、「天年を歿  
へん」は天から受けた寿命を全うするといふ意味です。引用文の最初に「甲寅十月、余罪あ  
りて獄に繋がる」とありますが、この経緯について簡単に説明します。

ペリーが開国と和親を求めて最初に浦賀に現れたのが嘉永六年（癸丑）、その返事を聞く



ために再度来日したのが翌年の安政元年（甲寅<sup>こういん</sup>）、同三月に日米和親条約調印、これを見て松陰は米艦に乗込み海外渡航を試みるも失敗（下田踏海事件）、自首。四月江戸伝馬町獄舎に拘引、九月江戸を發ち萩に向かひます。幕府の判決は国禁を犯したにも拘らず「父百合之助へ引渡し、在所に於て蟄居申付」と寛大だつたのですが、長州藩は幕府に気兼ねしてか、同十月「野山獄」に拘置しました。これが最初の一文の意味するところです。

さて、野山獄には十一人の囚人がゐましたが、その内二人が所謂犯罪人で、九人は親族、親戚等との折合ひが悪く幽囚されてゐる者で、在獄年数の最長は四十八年、歳は七十五歳、短い者でも三年で三十五歳でした。「余乃ち嗟愕して泣下り……ここに於て義を講じ道を説き」その悲惨、陰湿な状況に心

を痛めた松陰はその打開に乗り出します。七十五歳を最年長とする囚人を相手に「義を講じ道を説く」青年松陰の姿は尋常ではありません。松陰の志の大きさを思はずにはゐられませんが、この松陰の熱情と温かさは囚人たちの心を動かし、次第に学ぶ意志が獄舎の中に漲つてきました。

遂に孟子の書を抱き、講究<sup>かうま</sup>「磨磨」して以て其の所謂<sup>いはゆる</sup>道なるものを求めんと欲す。司獄福川氏も亦<sup>また</sup>來り會<sup>かい</sup>して善しと稱す。ここに於て悠然<sup>ゆうぜん</sup>として樂しみ莞然<sup>かんぜん</sup>として笑ひ、復た圍牆<sup>かんじやう</sup>の苦たるを知らず。遂に其の得る所を録し、號<sup>ごう</sup>して講孟<sup>かうま</sup>筭<sup>さん</sup>記と爲す。夫れ孟子の説は固<sup>もと</sup>より辨<sup>べん</sup>を待たず。然れども之れを喜びて足らざれば乃<sup>すなは</sup>ち之れを口に誦<sup>よ</sup>み、之れを誦<sup>よ</sup>みて足らざれば乃<sup>すなは</sup>ち之れを紙に筆<sup>ひつ</sup>す、亦<sup>また</sup>情の已<sup>や</sup>む能はざる所なり。則ち筭<sup>さん</sup>記の作、其れ廢すべけんや。

〔講孟餘話〕序)

「磨磨」は磨く、「莞然」はにつこり笑ふ、「圍牆」は獄舎のことです。ここでは「講孟筭記」となつてゐますが後に「餘話」と改めました。松陰は「之れを喜びて足らざれば乃ち之れを口に誦み、之れを誦みて足らざれば乃ち之れを紙に筆す」と言つてゐますが、別の所で



は「読み且つ抄し、或は感じては泣き、或は喜びて踊り、自ら已む事能はず」とも書いてゐる。「口に誦み」「紙に筆し」「泣き」「踊る」、まことに羨ましい読書体験です。

さて、松陰の『孟子』の講義は安政二年六月から始まるのですが、松陰の出獄（安政二年十月）までに獄中で三十三回、出獄後は中断を惜しんだ父、兄、叔父等の要請でその後二十回続けられ、開始以来丁度一年で『講孟餘話』の稿が成りました。

お配りしてある資料のこれからが『講孟餘話』本文ですが、その前に簡単に『孟子』に触れておきませう。孟軻、即ち孟子が活躍したのはBC四〇〇〜二二〇年頃の中国「戦国時代」中期と言はれてゐます。孔子から約一六〇年ほど後です。この時期はその名の通り、各国が「富国強兵」を目指して覇を争つてゐた時で孟子はそれに対して敢然として「道德による王道政治」を唱へて諸国を遊説します。しかし王たちは「迂遠にして事情に闊うとしと為す」（『史記』列伝）として孟子の言を聞入れず、最後は孟子は故郷に戻つて弟子たちと『孟子』七篇を編みました。その『孟子』を松陰はどのやうに読んだか、また孟子から何を学びとらうとしたかを心に留めながら本文を読んでみたいと思ひます。

學問——「道の大本」を知ることに

最初は『講孟餘話』梁惠王上・首章からの引用です。孟子は遊説の最初に梁といふ国に行きますが、その時梁の恵王は孟子に對して、「千里を遠しとせずして來たる。亦將にわが國を利すること有らんとするか」と聞きます、これに對して孟子が応へた言葉が「王何ぞ必ずしも利と曰はん、亦仁義あるのみ」です。孟子のこの言葉を受けて松陰は次のやうに言ひます。引用にあたつては松陰の言葉を適宜抜粹しました。

今且く諸君と獄中に在りて學を講ずるの意を論ぜん。俗情を以て論ずる時は、今已に囚奴と成る、復た人界に接し天日を拜するの望みあることなし、講學切劘して成就する所ありと雖も何の功效かあらんと云々。是れ所謂利の說なり。仁義の說に至りては然らず。人心の固有する所、事理の當然なる所、一として爲さざる所なし。人と生まれて人の道を知らず。臣と生まれて臣の道を知らず。子と生まれて子の道を知らず。士と生まれて士の道を知らず。豈に恥づべきの至りならずや。若し是れを恥づるの心あらば、書を讀み道を學ぶ

の外術あることなし。

先づ松陰は「天日を拜するの望み」もなく、學問をしても「何の功效かあらんと云々」といふ思ひを抱ひてゐる囚人たちに対して、それこそが「利の説」であると語りかけます。囚人たちの心を見据ゑた、又囚人たちがグツと身を乗り出して聞くやうな巧みな問題提起です。それでは「仁義の説」はと言ふと、「人心の固有する所」人の心にもともと備はつてゐるもの、「事理の當然なる所」道理上当然なこと、それらについてはすべて為す「一として為さざる所なし」と続け、それは人の道、臣の道、子の道、士の道を學びとることだと言ふのです。非常に具体的だし、それ故にこの「道」は誰にとつても身近な、又さうであればこそ大切な學問指標であるはずだ。が、そのいづれの「道」とも無縁だとすれば、それは「恥づべきの至り」ではないか、と松陰は強く問ふのです。人が生きて行く上で最後まで手放してはならないもの、そのやうな根元的な感覺をこの「恥」といふ言葉から感じとるべきでせう。若し「是れを恥づるの心あらば」「書を読み道を學ぶの外術あることなし」、松陰にとつて書を読むことは道を學ぶことであつたし、又道を學ぶために松陰は書物を読み、その學問は今日の課題に対処するためのものでした。実学です。そのやうな學問を続けてきた松陰の眼に

時代の姿はどのやうに映つたでせうか。

抑々近世文教日に隆盛、士大夫書を挟み師を求め、兀兀孜孜たらざるはなし。其の風懿美と云ふべし。……然れども今の士大夫、學を勤むる者、若し其の志を論ぜば、名を得んが爲めと官を得んが爲めとに過ぎず。然れば功效を主とする者にして、殆ど義理を主とする者と異なり。思はざるべけんや。嗚呼、世に讀書人多くして眞の學者なきものは、學を爲すの初め、その志已に誤ればなり。精を勵ますの主多くして眞の明主なきものは、治を求むるの初め、その志已に誤ればなり。……癸丑・甲寅墨露の變、皇國の大體を屈して陋夷の小醜に従ふに至るものは何ぞや。朝野の論、戰の必勝なく、轉じて變故を滋出せんことを恐るるに過ぎず。是れ亦義理を捨てて功效を論ずるの弊、與に逆境を語るべからざる者に非ずや。世道名教に志ある者、再思せよ、三思せよ。

近頃「文教」學問と教育は大変盛んで、武士は書物を脇に挟み師を求めて「兀兀孜孜」努めいそしんでゐて、それは「懿美」美しい風潮と言へるが、しかし、その「志」に眼を向ければ、「名を得んが爲めと官を得んが爲めとに過ぎず」これは正しく「功效を主とする者」

で「義理を主とする者」とは違ふ、よくよくその肝心の所に思ひをいたさなければならぬ、と松陰は言ふ。

一方、政治の世界に目を向けると、「學を勤むる者」と同様「精を勵ますの主」精根を傾けて政治に取り組んでゐる藩主は多いが、その目標はと言へばやはり当面の利益といふことになつてゐる。何故こんな事になつてしまふのか。これはすべて物事に取り組み始めた時の「志」が已に誤つてゐるからだ、と松陰は言ひます。かくして「眞の讀書人」も「眞の明主」もなきまま、国が大事に遭遇すればどうなるか。「皇國の大體を屈して」「陋夷の小醜」外国の無礼なる要求に従ふことになるのは明らかである。志が已に間違つてゐる以上、その胸中は唯々「變故を滋出せんことを恐るる」思ひがけない問題が続出することのみを恐れ、「穩便穩便の声天下に満ち」（安政元年一月・父宛の書簡）また「幕府の夷狄を畏るるは猫鼠の豺狼を視る如き」（「獄舎問答」）醜態となつてゐる。「是れ亦義理を捨てて功効を論ずる弊」であり、このやうな輩とは国家の重大事、今の「逆境」について共に談じる事はできない。

最初のあるべき志——初一念——こそがその人間の底力を支へる。獄中といふ逆境で『孟子』を講じてゐた松陰にはその事がはつきりと見えてゐたに違ひない。「世道名教に志ある者、再思せよ、三思せよ」突きつけるやうな厳しい言葉ですが、世の中の正しい道理と道徳

の教へに志ある者、或いは思想・教育に関心を持つ者への激励の言葉でもありませう。功効と義理、順境と逆境——今この言葉に触れて松陰の志を思ひ、翻つて己の志如何、と自分の心に問ふてみたいと思ひます。

それでは「眞の讀書人」も「眞の明主」もなき時代に「義理を主とする道」を如何にして回復するか、それは「人心を正す」以外にない、と松陰は断言します。

當今の事を以て是れを證せんに、群夷ぐんい競きよひ來る、國家の大事とは云へども、深憂とするに足らず。深憂とすべきは人心の正しからざるなり。苟いやくも人心だに正しければ、百死以て國を守る、其の間勝敗利鈍りどんありと云へども、未だ遽にかに國家を失ふに至らず。苟も人心先づ不正ならば、一戰を待たずして國を擧げて夷いに従ふに至るべし。然れば今日最も憂ふべきものは、人心の不正なるに非ずや。近年來外夷がいに對し國體こくたいを失すること少からず。其の茲こゝに至るもの、恐れながら幕府諸藩の將士、皆其の心不正にして、國の爲めに忠死すること能あたはざるに由る。然れば孟子今日に生るとも、亦正人心の三字の外一句もあることなし。



「正人心」とは、松陰にとつて人として、臣として、子として、そして士として生きる覚悟を己の中に確立することでした。だから松陰は己の全身を賭けてその事を自己に課しました。

この基本的且つ根元的な一点を見据えて松陰は「幕府諸藩の將士」に、心は正か不正か、と鋭く問ひかけるのです。外夷の要求の儘に右往左往する政府当路者の醜態はどこからきたか。「恐れながら幕府諸藩の將士、皆其の心不正にして國の爲めに忠死すること能はざるに由る」、法に触れたから不正といふのではない、問題の根源は彼らに武士としての罪と責任の自覚がないといふことだ。それが稀薄な爲に藩には藩としての独自性もなく、又幕府はと言へば、一國の独立といふ最も重要な國の大事も忘れたかの如く唯だ「功效」を主として対処してゐる。この「心の不正」が「國の爲に忠死すること能はざる」事態を招いてゐるのだと松陰は言ふのです。だから今心懸けるべきことは「人心を正す」以外にないではないか。「然れば孟子今日に生るとも、亦正人心の三字の外一句もあることなし」といふ最後の一行に松陰の確信と氣迫が偲べれます。

それでは松陰にとつて武士としての責任の取り方とはいかなるものだったのでせうか。例へば僧默霖との往復書簡の中で次のやうな事を言つてゐます。自分は毛利家の家臣だからい



つも毛利家に奉公する心を鍊磨してゐる。その毛利家は天子の家臣だから日夜天子に奉公することを考へてゐる。だから藩主に忠義を尽くす事はそのまま天子に忠勤することになるはずだ。ところが、鎌倉幕府開設以来の六百年、わが藩主は天子を蔑ろにしてきた。その罪は大きい。ならば自分はどうか。「先づ我が大夫を諭し六百年の罪と今日忠勤の償とを知らせ、又、我が主人をして是れを知らしめ、又主人同列の人々をして悉く此の義を知らしめ、夫れより幕府をして前罪を悉く知らしめ、天子へ忠勤を遂げさするなり」、あくまでも自分の位置を離れず、臣から藩主へ、藩主から幕府へ、幕府から天子へ、といふやうに近きから遠くに及んで行く。自分を抜きにしては一切を語らない、これが「正人心」についての松陰の覚悟でした。そして「若し此の事が成らずして半途にて首を刎ねられたれば夫れ迄」だが、その時は「吾れ必ず一人の吾が志を繼ぐの士をば後世に残し置くなり」これが「人心だに正しければ、百死以て國を守る」ための松陰の身の処し方でした。この覚悟は幽囚の身にあつてもいささかも変はることはありません。次の文章を読んでみませう。

今諸君と幽囚に辱しめらるると雖も、幸に孟子の書を講ずるを得、何の幸か是れに加へん。若し天下を以て任とせんとならば如何。先づ一心を正し、人倫の重きを思ひ、皇國の尊き

を思ひ、夷狄いてきの禍わざはひを思ひ、事に就つき類るに觸ふれ相あ共に切き磋さ講くわう究きゆうし、死しに至いたる迄まで他た念ねんなく、片言へんげん隻語せきごも是こゝれを離はなるることなくんば、縦令たとひ幽囚ゆうきゆうに死しすと雖なも、天下てんか後世ごせい必かならずず吾われが志しを繼つぎ成なす者ものあらん。是こゝれ聖人せいじんの志しと學がくとなり。其その他の榮辱えいじやく窮達きゆうたつ、毀譽きよぶ得喪とくさうに至いたりては、命いのちのみ天てんのみ。吾われが顧かへりみる所に非あざるなり。(「講孟餘話」・梁惠王下・第四章)

「人倫の重きを思ひ、皇國の尊きを思ひ」翻かつて「夷狄の禍」を思ふ。その念ねん已やみ難がたく、「死に至る迄他念なく、片言隻語も是れを離ることなく燃燒し尽くしたのが松陰の人生でした。心を正し、書を読み道を学ぶ。その学問は人として人の道を知ることであり、また日本の国柄の尊厳を知る学問でありました。この学問の力を体得すること、そしてその志を人から人へと繋いで行くこと、これこそが国の危機を救ふ礎である、といふ松陰の揺るぎなき確信は、孟子の次のやうな言葉に触れた時、一挙に溢れ出るかの如く躍動感を伴つて表出されます。声を出して読んでみませう。最初の三行は『孟子』の中の言葉です。

仁の不仁に勝つは、猶なほ水の火に勝つがごとし。今の仁を為す者は、猶なほ一杯の水を以て一車薪いっしやしんの火を救ふがごときなり。熄やまざれば則すなはち之これを水は火に勝たずと謂ふ。此れ又不

仁に與するの甚しき者なり。亦終に必ず亡はんのみ。

これからが松陰の言葉です。

此の章、大志ある者日夜朝暮に暗誦して志を勵ますべし。余囚徒となりて、神洲を以て自ら任じ、四夷を撻伐せんと欲す。人に向ひて是れを語れば駭愕せざるはなし。然れども此の章を以て益々自ら信じて斷じて疑はず。今神洲を興隆し四夷を撻伐するは仁道なり。之れを礙ぐる者は不仁なり。仁豈に不仁に勝たざらんや。若し勝たざれば仁に非ず。故に先づ一身一家より手を下し、一村一郷より同志同志と語り傳へて、此の志を同じうする者日々盛にならば、一人より十人、十人より百人、百人より千人、千人より萬人、萬人より三軍と、順々進み進みして、仁に志す者豈に寥々ならんや。此の志を一身より子々孫々に傳へば、其の遺澤十年百年千年萬年と愈々益々繁昌すべし。今天下の勢、無事にして多難を伏し、至安にして至危を伏す。伏するものは必ず發す、自然の勢なり。一旦多難至危の發泄するに至りては、潰敗復た収むべからず。此の時に當りて一人より三軍、一身より子孫に傳へたる所が大用をなし、神洲興隆、四夷撻伐の功必ず成るべし。而して其の規模は

今日に在るなり。願はくは此の説を讀むの人、吾が言を以て誇誕とせずして、吾が言をして果して誇誕にならざる如く心を用ひ給はば、神洲の爲めに大幸ならん。若し誇誕の言と云ひて誹謗し、自ら神洲の陸沈、四夷の跋扈を座視する者は、其の罪逆賊より百等も重きなり。(不仁に與するの甚しき者なりの甚の字、意を付くべし)吾れ其の人と共に天を戴かざるなり。(『講孟餘話』告子上篇・第十八章)

文章の勁さと言葉のリズムの快さが読む者の心に躍動感を伴つて迫つてきませんか。瑞々しい言葉の数々は、そのまま松陰の氣迫の心を表すかの如く、又松陰の不動の確信を示してゐるかのやうです。「仁豈に不仁に勝たざらんや。若し勝たざれば仁に非ず」。勁い言葉です。又「今天下の勢、無事にして多難を伏し、至安にして至危を伏す。伏するものは必ず發す、自然の勢なり。一旦多難至危の發泄するに至りては、潰敗復た収むべからず」。言葉のしぶきをあびる感じです。言葉が生きてゐるのです。

ここで少し語句の説明をして置きませう。「一車薪」とは車一杯に積んだ薪。「終に必ず亡はん」はせつかく磨きはじめた徳を失ふこと。「神洲を以て自ら任じ、四夷を撻伐せんと欲す」とは日本の運命を自己の任務として、攻撃してくる諸外国をうち破らうと思つてゐると

いふこと。「駭愕」は驚くこと。「寥々」は数の少ないさま。「遺澤」は恩恵。「三軍」は非常に多い人数のことで古代シナでは一万二千五百人を一軍としました。「發泄」はかくれてゐたものが現れること。「潰敗」はくづれ破れること。「規模」は大きさではなく、手本、しくみ、計画等のこと。「誇誕」は誇大と偽りで、大げさに言ひたてること。「陸沈」は水がないのに沈むの意から転じて国が滅びることを言ひます。

さて、一人から一人へといふ「此の志を一身より子々孫々に傳へば、其の遺澤十年百年千年萬年と愈々繁昌すべし」と松陰は信じ、その通りの人生を生き抜きましたが、その死から約百四十年、平成に生きる我々はこの「子々孫々」に入ります。そして我々は後世代にその「遺澤」を繋いでいかなければなりません。この説を「誇誕」として無関心の領域に自分の身を委ねるか否か、我々一人一人の覚悟が問はれてゐると言へませう。「其の規模は今日に在り」「神洲の陸沈、四夷の跋扈を座視する者」とは「共に天を戴かざるなり」と松陰は言ふ。厳しい言葉です。だが我々はこの厳しい言葉に自分の身をさらし、そこから己の志を定めたいと思ふのです。

道統——斷然自ら任ぜん

『孟子』の最終章は、「五百年にして必ず王者の興るあり」（公孫丑篇）といふ中国の古代からの遠く長い歴史を回顧し、孔子の道を今にして伝へるのは自分以外にはない、との自覚と責任を高らかに宣言した力強い文章です。

孟子曰く、堯舜ぎやうしゆんより湯とうに至るまで五百有餘歲……湯より文王に至るまで五百有餘歲。文王より孔子に至るまで五百有餘歲。……孔子より而來このかた、今に至るまで百有餘歲。聖人の世を去ること此かくの若く其れ未だ遠とこからざるなり。聖人の居すまひに近きこと此かくの若く其れ甚し。然り而して爾しかあることなければ、則ち亦爾しかあることなからん。

最後の「然り而して……」以下は、自分こそが孔子の大道を伝へる任にあたらなければ、後世これを知るものが絶えてしまふであらうとの意で孟子の決意が強く打ち出されてゐます。これを受けた松陰の次の言葉も又『講孟餘話』の最後を飾るにふさはしい雄大且つ力強い文



章となつてゐます。要約して掲げます。孟子の言葉と共に大きな声を出して読んだらいいと思ひます。

然り而して爾あることなければ、則ち亦爾あることなからん。

此の語孟子自任し、又千萬世に向かひて吾が輩を呼び醒すの語なり。吾が輩宜しく驚起して耳を傾け肝に銘すべし。……孟子より今に至るまで二千餘年……今吾が輩斷然自ら任ぜずんば、何ぞ後世に待つことを得んや。又何ぞ往世に沂ることを得んや。唯だ是れ人々七十年中の重任なり、忽せにすることなかれ。抑々吾が長門の国たる、西海の陬にあり、海を隔てて西、鄒・魯と対峙す。鄒・魯の聖賢を喚び起すこと固より長門人の任なり。余又常に謂ふ、兵家の貴ぶ所は戰陣の魁殿にあり。魁は先驅なり。殿は後殿なり。……人生七十古來稀なり。今吾が輩已に其の二三十を失ふ。餘るもの日に減ず。已に先驅を憚り又後殿を譲らば、尸上の恥辱、勃海を傾けて是れを濯ふとも、吾百歳千歳を経て減することなし。如何如何……抑々筭記の開卷第一義は國體人倫にあり。故に首として君臣の大義を論ず。結末に至りて、叨りに此の道を以て自ら任とするの意を著はす。同



志の諸君子始末を合考して、余が志の孔子に謬もとるや否、國體人倫もとに戻もとるや否を論究し、教を賜ふを惜しむことなくんば幸甚幸甚。（『講孟餘話』尽心下篇・第三十八章）

## 留魂

孟子の遊説は「王何ぞ必ずしも利と曰はん、亦仁義あるのみ」と敢然と言ひ放つ所から始まりましたが、その言説は遂に王たちの聞き入れるところとはならず、最後は「吾の魯候に遇はざるは天なり」として故郷に戻り『孟子』を編むと共に教育に専念することとなるのですが、吉田松陰のいのちを賭けた言動も又幕府を動かすには至りませんでした。愈々処刑を免れないと自覚した松陰は父・叔父・兄宛に手紙を書きます。処刑一週間前のことです。この書簡の中で松陰は「平生の學問淺薄にして至誠天地を感格すること出来申さず、非常の變に立到り申し候」と書き、親への尽きない恩愛の情を次のやうな歌に詠みました。死を目前にして泰然自若、心に泌み入る歌です。

親思ふこころにまさる親ごころけふの音づれ何ときくらん

このあとの書簡は、「夷狄は縦横自在に御府内を跋扈致し候へども」日本には「上に 聖天子あり、下に忠魂義魄ぎはく充々致し候へば」天下の事も余り心配には及ばないと続き、その後、父をはじめ親族の長寿を願つて筆を止めてゐますが、この書簡には今で言ふ「追伸」に相当する一文があつて、妹たちに触れたところに「呉々も人を哀しまんよりは自ら勤むること肝要に御座候」といふ言葉があります。「縦令幽囚に死すと雖も、天下後世必ず吾が志を継ぎ成す者あらん」とは松陰の言葉でしたが、精神の不朽を信じた松陰が、今我々に「呉々も人を哀しまんよりは自ら勤むること肝要に御座候」と呼びかけ、我々の覚悟を促してゐるやうな感慨に襲はれます。結局は凡てが自分の問題なのです。

(編集の都合上、講義の時に引用した原資料を一部要約又は割愛しました)

講義

「日本の思想」

埼玉大学教授

長谷川 三千子



「日本の思想」の否定

からごゝろ

取り戻すべき日本の心

宣長の警鐘

思ひ描く

中国語文字

日本語表記の発明

日本語といふ遺産

〈質疑応答〉

「日本の思想」の否定

今日ここで話ししたいと考へてゐることは、今年（平成十三年）歿後二百年を迎へた江戸時代の国学者、本居宣長についてです。「日本の思想」と題して宣長を取り上げるのは、誰が見ても、当然すぎるほどの当然のことで、今日ここにおいでの方々も、これを聞いてあなるほど、当然、とお思ひのこととせう。ただ、ここでは、むしろさういふ常識的な納得をひつくり返す事から始めようと思ひます。

最初に、今日の日本の学問の世界で、「日本の思想」がどのやうな扱ひを受けてゐるのか、といふところからふり返つてみませう。

まづ一方に、そもそも日本には、思想と呼べるやうな立派な有難いものはないんだ、といふ考へ方があります。その典型が、昭和三十六年に出版されて、当時の若い人たちによく読まれた丸山真男著『日本の思想』（岩波新書）に示されてゐます。この本に語られてゐるのは、思想と呼べるのは西洋の立派な学問であつて、日本にはさういふ思想や哲学を欠いた、非常に野蛮な精神文化しかないんだ、さういふ考へ方です。これは戦後初めて出てきたものと言

ふよりは、大正、昭和と日本のインテリたちの間に連綿と引き継がれてきた精神態度とも言へるのですが、それが敗戦による自信喪失とあひまつて異常なほどの自国嫌悪となつてゐる——それがこの丸山真男の「日本の思想」です。

それからもう一方に、（これは割合最近のことなのですが）「日本の思想」の、「日本の」といふところに文句をつけたがる傾向がある。「日本の」といふ捉へ方自体が昔はなかつたものであり、日本が西洋と接触してナシヨナリズムに目覚め、そこでやうやく出てきた輸入概念の一種にすぎないのだ、といふ考へ方です。例へば、歴史学者の網野善彦氏などは、日本の歴史学者でありながら、さういふことを一生懸命主張しようとしてゐる一人です。

さういふ二つの側から、「日本の思想」といふものを否定しようとする——これが日本のインテリの基本的な態度と言つていいのです。

かういふ状況の中で、我々が「いや、やはり日本の思想といふものは、本当に問題とするに足りる、切実な、関心の持てる問題なんだ」と言ふことが出来るためには、我々自身が一度一番深いところまで潜つて、日本の思想はいかにして可能なのか——それを根本から考へてみる必要でせう。

言つてみれば、宣長といふ人は、日本ではじめて、「日本の思想」について根本的に考へ



た人です。そして、だからこそ、宣長は今も新しい思想家です。面白いことに、現代の反日的な日本人たちは、いまでも宣長が生きてゐて、どこかに存在してゐるかのやうに、一所懸命やつつけようと論争を挑むのです。例へば今年の『中央公論』二月号にも、「本居宣長から疑え」と言つて、書家の石川九楊といふ人が論文を書いてゐます。あたかもテレビの討論番組で、席の隅に座つてゐる相手に罵倒を浴びせ掛けるかのやうに、宣長といふ人を批判してゐるのです。これも宣長が非常に新しい発想で日本の思想を考へ、しかも日本の思想を否定したがるいはば反日的な日本人にとつて、一番痛いところをずばりと突いてゐるからだ、といふ気がします。

二百年の年月をこえて、今ここでもう一度宣長を現代の我々の仲間の一人として引つ張り出してきて、



宣長が一体何を見たのか、何を追体験したのか、それを眺めてみたいと思ふのです。

### からごゝろ

さういふ同時代人としての宣長を、私に一番痛切に感じさせるのが、「からごゝろ」といふ短い一文です。宣長は、『万葉集』を研究した賀茂真淵の弟子となり国学を勉強するのですが、当時『日本書紀』に比べて重要視されてゐなかつた『古事記』に注目し、真淵の勵ましの言葉を得て、ライフワークとしてその注釈をした人です。その『古事記伝』を仕上げた後、いろいろ心に浮かんだ事を書きとめたのが『玉勝間』といふ隨筆集で、その中の一つがこの「からごゝろ」です。まづ、実際にこの「からごゝろ」を読んでみませう。

漢意からごころとは、漢国からこくにのふりを好み、かの国をたふとぶのみをいふにあらざ、大かた世の人の、萬の事の善惡是非よさあしよさを論ひ、物の理をさだめいふたくひ、すべてみな漢籍からぶみの趣なるをいふ也

まづかういふ言葉から始まつてゐます。ここに「漢意」、「漢国」、「漢籍」と言ふときのそ

の「漢」とは、もちろん中国のことを指してゐるのですが、これをそのまま近代西洋、或いは欧米と置き直してみると、実はそのまま我々の精神状況にあてはまると言つてよいでせう。今の日本にも、大つぴらに「私はアメリカびいきだ」などと公言してゐる人がゐます。まさに「漢国のふりを好み、かの国をたふとぶ」態度なのですが、それが「からご、ろ」なのかといふと、さうではない、と宣長は言ふんですね。むしろ大つぴらに「私はアメリカびいきだ」「私はフランスのファンだ」と言ふ人は、まだ害がない。さうではなくて、「萬の事の善悪是非を論ひ、物の理をさだめいふたくひ、すべてみな漢籍の趣なるをいふ也」——こちらの方が始末に悪い、と言ふのです。

ともすると、我々はごく普通の普遍的な人間の在り方を論じてゐるつもりで、例へば「社会と個人との関係について考へよう」などと言つてゐる。ところが、「社会」といふ言葉にしても、「個人」といふ言葉にしても、近代欧米でなければ出現し得なかつた、或いはまた、近代欧米人の特殊な傾向によつて世の中を見るのでなければ使ひようがない、外来の特殊なイデオロギーを背負つた言葉なのです。

いま、一寸くはしく立ち入つて、どうしてこれが「外来の特殊なイデオロギーを背負つた言葉」なのか、ご説明しておきますと、ただ普通に我々が一人一人の人間であるといふこと

が「個人」なのではありません。人間といふのは親から生まれ、ある共同体の中に生まれ出て、そこで育まれて人間らしく育つていく。これが人間についての当たり前前の考へ方なんです。それを一切切り捨ててしまつて、人間がまるでちやうど畑から芽が出るやうに、或いは木の股から産まれ出てくるかのやうな形で、一人一人ばらばらにこの世の中に登場して行くものだ、とする特殊なフィクション——それが「個人」といふ考へ方なのです。

「個人」といふ言葉はもちろん日本語にもともとあつたものではありません。明治になつて、インディビジュアルといふ英語が入つてきた。それを日本語には置き換へようがなくて、無理やり漢語で造語し、翻訳のために作つた言葉が「個人」だつたのです。また、さういふ「個人」が集まつて暮らしてゐる、それを西洋人はソサイエティーと言ふわけですが、そこにも、いはゆる「社会契約説」と呼ばれる独特のイデオロギーがはたらいてゐる。これも日本語では、「世の中」とも「世間」とも何とも訳しやうのないもので、無理やり「社会」といふ言葉を造語してその訳にあてたのです。

かうしてふり返つてみますと現代の我々の学問や議論は、まさにすべてみな「漢籍の趣」である、と言はねばなりません。見たところ日本語みたいなんだけど、実は外国からの輸入品である、さういふ言葉を使つて我々は普段ものを考へてゐるわけです。そして、さう

した的状況が、実は二百年前にも同じ形で存在してゐた。宣長はそれをズバリと見抜いてゐたのです。「大かた世の人の、萬の事の善悪是非を論ひ、物の理をさだめいふたぐひすべてみな漢籍の趣なるをいふ也」とは、さういふことなのです。一口に言へば、自分たちの知的状況を正しく認識せよ、といふことです。

「からご、ろ」の続きを読んでみませう。

さるはからぶみをよみたる人のみ、然るにはあらず、書かみといふ物一つも見たることなき者までも、同じこと也、そもからぶみをよまぬ人は、さる心にはあるまじきわざなれども、何わざも漢国をよしとして、かれをまねぶ世のならひ、千年にもあまりぬれば、おのづからその意世中こころよのなかにゆきわたりて、人の心の底にそみつきて、つねの地となれる故に……

これもまさに今の我々の状況そのままです。西洋人の書いた書物ばかり読んでゐるインテリたちが「個人」だ「社会」だと振り回すのは或る意味で当然だとも言へますが、西洋人の書いた堅い本など読んだこともありませんかといふ普通の日本人が、同じやうに「個人」だ、「社会」だと言つてゐる。つまり「漢籍の趣」で話をする状況になつてしまつてゐる。

ではいつたい、どうしてこんなことになつてしまふのか——「何わざも漢国をよしとして、かれをまねぶ世のならひ」、つまり何事につけても中国を有難がる精神態度が、千年以上もつづいてきたために、「おのづからその意世中こころよのなかにゆきわたりて、人の心の底にそみつきて、つねに地となれる」。つまり、その永年の積み重ねによつて、自分の国の文化ではない、異国の文化、異国の思考法が、自分たちの心の「つねの地」になつてしまふ、といふ文化的倒錯さくごが起つてしまつたといふわけなのです。

我はからご、ろもたらずと思ひ、これはから意こころみにあらず、当しかあるべきことわり然なり理也と思ふことも、なほ漢意をはなれがたきならひぞかし

近代西洋の「人権」思想や、「国民主権」のイデオロギーは、よく「人類普遍の原理」を自称しますが、日本人は昔も今もかういふ宣伝をすぐ鵜呑みにしてしまふ。そして、自分が全く中国流にものを考へてゐることに気づかず、これは「人類普遍の原理」なのだとかケロリとして公言してしるる——こんなところも、現代そつくりですね。

そもく、人の心は、皇国も外つ国も、ことなることなく、善悪是非に二つなければ、別に漢意といふこと、あるべくもあらずと思ふは、一わたりさることのやうなれど、然思ふもやがてからご、ろなれば……

人の心に日本も外国もない。もとの真心は同じなんだ、といふのは、一見もつともらしいけれども、実は西洋思想にしても、からご、ろにしても、「人類普遍」といふ幻想に基づいて日本人の間に染み付いてしまつてゐる。まさにその幻想それ自体が外国の思想なんだといふ指摘です。このやうな、現代流に言へば「文化相対主義的観点」が世界に登場してくるのは、二十世紀もなかば近くなつてのことです、その意味でも、宣長は先駆的な思想家だつたと言ふことができませう。

### 取り戻すべき日本の心

では、「からご、ろ」によつて毒されてゐる我々自身は、本来どうあるべきなのか、本来我々は、どういふ物の考へ方をすべきなのかといふ課題が、ここからは当然うかび上つてく

るわけですが、それについては宣長はどう語つてゐるのでせうか？

大かたこれらの事、古き書の趣をよくえて、漢意といふ物をさとりぬれば、おのづからいよく分るゝを……

つまり、日本の古典をよく理解して、日本人たちが自らの陥つてゐる文化倒錯のさまに氣付けば、すべて解決するはずである。ところが、「おしなべて世の人の心の地、みなから意なるがゆゑに、それをはなれて、さとることの、いとかたきぞかし」——日本人の心一般がすつかり漢意にそまつてしまつてゐると、それをはなれてもの事を見ることが非常に難しい。宣長はこの短文を、ペシミスティックとも言へる調子でしめくくつてゐます。

さて、宣長がかういふ形で日本文化といふものを発見したのは、世界でも非常に珍しい事と言つていいと思ひます。最初にお話ししましたやうに、最近、国民とか国といふものそれ自体を疑つてみなければならぬ、といふ新しがりやの思想家がゐます。彼らは、国、国民とは、十八、十九世紀の欧米に発した発明物であつて、それを我々アジア人がそのまま輸入して有難がつてゐるだけなんだ、と言つてゐます。



しかし、この宣長の随筆は、日本がまだ西洋文明に接する以前に書かれたもので、宣長は別に西洋人の真似をして書いたのではなく、純粹に日本の文化を日本人の眼で眺めることによつて、そこに日本を発見したわけです。いはゆるナシヨナリズムは西洋からの輸入品に過ぎないといふ指摘は、ここには全くあてはまりません。

もう一つ際立つた特色は、ごく一般的に言つて、戦争によつて物理的に他の民族とぶつかり合ふ経験を繰り返してゐる民族には、自分たちの民族としての自覚が芽生えることはききめて簡単です。

ところが、もともと日本は戦争をすることが非常に少ない国であるうへに、宣長が生きてゐたのは、日本が外国としきりと接してゐた戦国時代ではない。いはゆる「鎖国」と呼ばれる、平和な時代であり、外国との接触のもつとも少なかつた時代です。その宣長がどうして日本を発見できたのか、これはまことに不思議なことと言はねばなりません。実は、これからお話するとほり、本居宣長は、ふつうの人間なら国と国とがぶつかり合つて戦はなければ得られないやうな自覚を、いはば「知的想像力」の豊かさによつて得ることができたのです。

## 宣長の警鐘

宣長がこの「からご、ろ」といふ一文によつて訴へてゐるのは、一口に言へば日本文化の中国文化からの独立といふ課題なのですが、彼は同時にここで、その課題の持つ構造的な難しさといふものをも明らかにしてゐます。

その難しさは、言つてみれば、ふつうのウイルスとたたかふのではなしに、エイズ・ウイルスとたたかふことの難しさ、といったものでして、ふつうのウイルスや細菌が体内に入ってくると、これは外来のものだ、と体が一所懸命に反応して押し出さうとして、熱が出たりする。ところがエイズウイルスはまるでその人自身みたいな顔をして入つてくるので、人間の体が戦はうとしないうちにやられてしまふ。

宣長の言ふ「漢意といふ物をさとりぬれば……」といふのは、まさに、中国の文化を「ウイルス」(異物)として認識すれば、我々はそれに対して正常な反応をすることができるのに……といふことなのです。

ところが、あの最初に申しました丸山真男氏の『日本の思想』などは、その肝心のところ

をまるでつかみ損ねてゐる。たとへば丸山氏は、宣長のかうした姿勢を、こんな言ひ方で批判しようとしてゐます。

「……いちじるしく目立つのは、宣長が、道とか自然とか性とか性とかいうカテゴリーの一切の抽象化、規範化をからごころとして斥け、あらゆる言あげを排して感覺的事実をそのままに即こうとしたことで、そのために彼の批判はイデオロギー暴露ではありえても、一定の原理的立場からするイデオロギー批判に本来なりえなかつた。」

もちろん、宣長が漢意を告発し、人々に警戒を呼びかける、さまざまの文章のなかには、まさに「イデオロギー暴露」といふかたちを取るものもあります。たとへば、次の一文などはその一例です。

からくに、して道といふ物も、其ノ旨をきはむれば、たゞ人の国をうばはむがためと、人に奪はるまじきかまへの二ツにはすぎずなもある（『古事記伝』「直毘靈」）

しかし、重要なのは、かうした「イデオロギー暴露」を通じて、宣長が何処を目指してゐたのか、といふことです。宣長には、そもそもいまの日本人の心が、「日本人の心」ではなくなつてしまつてゐる、といふ現状が見えてゐる。「一定の原理的立場」などといふものを探らうにも、それを探る最初の一步が踏み出せないでゐる状態だといふことが見えてゐる。だから、まづ「日本人の心」の本来とは何なのかを知るためにも、「からごゝろ」を取り除く作業が不可欠だといふことなのです。

丸山氏には、その難しさが全然見えてゐない。まるでケロリとして、「一定の原理的立場」などといふものがどこかにころがつてゐるやうな氣である。

だから丸山氏は、この「直毘靈」の一節を引用して、「からごゝろ」を取り除いた後の、その日本人の清きころとは一体何なのか、それについて何も語つてゐないではないか、と文句を言つてゐるわけなのです。さらにそこから、丸山氏は国学全般をこんな言ひ方で評します。

「『神道』はいわば縦にのつぺらぼうにのびた布筒のように、その時代時代に有力な宗教と『習合』してその教義内容を埋めてきた。」

彼のこのやうな言ひ方が、へいつたいどうしてわれわれ日本人は、このやうな奇妙な倒錯——からご、ろ——に陥つてしまふのだらう？、といふ謎を問ひかけるかたちで語られてゐるのであれば、それはそれで意味のある言ひ方だとも言へます。一方で、何でも受け容れしまふやうな特色があるからこそ、他方で「漢意・仏意の排除」といふ必要が出てきてしまふ。このわれわれ自身の不思議な心の構造は何なのか？——そのこと自体に丸山氏の問ひがむかふのなら、われわれも喜んで一緒に問ひかけたいと思ひます。

ところが、いま見たとほり、丸山氏自身は「日本の思想」といふものを余りにも安易に——なにか第一条・第二条と箇条書きにできるやうな「教条」として考へてしまつてゐる。そんな見方では、国学が「のつべらぼうにのびた布筒」の清掃作業、としか見えてこないのも当然と言へるでせう。

宣長の考へた国学とは、そんな安易なものではなかつたはずで、もつとはるかに困難な発掘、再生の作業として彼の国学は目指されてゐたはずで、さうでなければ、どうして宣長はあの大部の『古事記伝』を仕上げなければならなかつたのでせう？ 宣長が、「からご、ろ」に語つた「古き書の趣きをよくえて」といふことは、決してただすらりといつぺん

日本の古典を読めばこと足りる、といったことではなかつたのです。おそらく、宣長にとつて、それは知的想像力を最大限にはたらかせることを要する、一大知的冒険であつたと思はれるのです。

後半では、われわれ自身で、どれだけ宣長のその冒険の足跡をたどることができるか、それを試みてまゐりませう。

### 思ひ描く

そもそも「思想」と言ひますと、なにか、人間が頭脳をごちやごちやと働らせて、そこから生まれてきた産物、といふ語感があります。丸山真男などといふ人も、まさにさういふ語感にもとづいて「思想」といふ言葉を使つてゐて、自らもその語感にしばらくはたれてゐるといふ感じがします。

しかし、はたして本当に「思想」とはそんなものなのでせうか？

たとへば、小林秀雄さんが晩年に著はされた『本居宣長』といふ名著があります。この本なども、「思想」といふ言葉をさうしたせこましい意味で使つてゐる人たちには、あまり

評判がよくありませんでした。つまり「思想」がない、といふ訳なのです。しかし、「思想」がないどころではない。小林秀雄さんの『本居宣長』はまさに思想の書です。つまり、文字通りに、小林秀雄さんが宣長について想ひめぐらし、思ひ描いた、その全行程があますところなく語られてゐるのが『本居宣長』なのです。これ以上の「思想書」はありえませんが、何百年、何千年の時をへだて、自分自身をその事柄の真前に据ゑて、それが本当のところ、どのやうなことであつたのかを切実に思ひ描くこと——思想の力とは、そこでいかに切実に思ひ描くことができるかの力量だらうと思ふのです。その意味で、小林秀雄さんは「思想の力」のある人だつたし、また、小林さんが想ひをめぐらした宣長といふ人も、たいへんな「思想の力」の持ち主であつたと思ひます。

その宣長の「思想の力」が存分に發揮されたのが、あの『古事記伝』だつたわけですが、なかでも、宣長自身が、自らの思ひ描く姿勢を明確にしめしてゐるのが、『古事記伝』一之卷の「かきぞま文体の事」と、二之卷の「古事記序註」であると言つてよい。いままづ、この「文体の事」から眺めてまゐりませう。「文体の事」のなかでも重要と思はれるのが次のやうな一節です。



先大御国にもと文字はなかりしかば上代の古事どもも何も、直に人の口に言伝へ、耳に聴伝はり来ぬるを、や、後に、外国より書籍と云物渡参来て……

上代には文字といふものがなくて、言葉はすべて語られ、聞きつたへられてゐた。そこに外国から文字といふものがやつてきた——まづはこれがどのやうなことであつたのかを正確に思ひ描くことから始めなければならぬ。それを思ひ描くことなしには、『古事記』といふものを理解することもできなければ、『古事記伝』を書いた宣長を理解することもできない。『本居宣長』のなかで小林秀雄さんはさう述べてゐるのですが、まさにその通りだと思ひます。無文字の世界に生きてゐる人間が文字に接するといふ、この途方もない経験を、われわれはできる限り切実に思ひ描いてみなければならぬ。そこから「日本の思想」を理解する第一歩が始まると言つてよいでせう。

しかし、それにしても、これはおそろしく困難な試みです。少なくとも、この体験を現在の我々が正確に体现することは不可能と言つてよいでせう。我々は、丸一日文字を見ないで過ごしてゐるつもりでも、実はどつぷり文字の世界に浸つてゐるのです。

その意味では、もちろん、たうてい「追体験」などと呼べるものではないのですけれども、

この春、私自身が埼玉大学で行った小さな実験のお話をしてみたいと思ひます。

埼玉大学教養学部では、今年度の前期の授業で「文明とテキスト」と題する総合講座をひらいて、何人かの教官が各々の視点からこの同じテーマを扱って講義をしました。その中で私は、「文字」といふことに注目して、「文明」も「テキスト」も、ともに「文字」といふものを前提として成り立つてゐるものなのだけれども、いつたい人間は「文字」を手に入れることによつて何を失つたのか、それを考へてみよう、といふ話をいたしました。そして、それを考へるために、現在われわれがあまりにも当然のものとして使つてゐる「文字」を、まるで使はずに一時間すこしてみようといふことを試みたのです。これは、私にとつても初めての試みでした。

まづ、「今日は、皆さんノートを取つてはいけません。筆記用具は全部しまつて下さい」と最初に宣言しました。もちろん私自身、黒板にも何も書かないし、準備のノートも作らないほんとの「ブツケ本番」です。「私がここにゐるだけです。そこにあなたたちがゐるだけです。これから話をしますから、それを捕まへられるか、捕まへられないか、どうか捕まへて下さい」と言つて、(とても一時間半の授業はもたないと思つたので)五十分と時間を区切つてやつてみたのですが、私自身鮮烈な体験となりました。ことに驚いたのは、学生たちと向

かひ合つた瞬間、ドカツといふ風圧を感じるんですね。文字通りの「集中力」がこつちにやつてくるのに押されさうになる、といふ感じなんです。それを必死に受けとめながら、授業をしたのですが、こんな授業は初めての経験でした。

後で出席した人たちに短い感想を書いてもらふと、「自分でもびつくりした」といふ意見がたくさんありました。「普段から授業を真面目に聴いてゐる方ではあるけれども、こんな集中の仕方で聴いたのは初めてだ」といふのが半数。そして（これは同じ人が同時に言つてゐるケースも多かつたのですが）半数が「非常に不安だつた」と言ふんですね。

たとへば或る学生は、「普段、自分は書くことで、聴いてゐることを咀嚼して定着させるといふリズムができ上がつてゐたので、それを全部剥ぎ取られてみると、聴いたことが全部どこかに消えてしまふやうでとても不安だつた」と言ふのです。この試みは、ほんのお遊びみたいなものですけれども、ほんの一瞬ながら、無文字の世界をかい間見せてくれる貴重な体験でした。文字のない社会では、言葉といふものに、どんなに力がこもつてゐたであらうか——そんなことを切実に感じさせられました。

「大御国にもと文字はなかりしかば」——これを簡単に受け取つてしまへば、単なる無文字社会で、要するにただ野蛮だつたといふ事ぢやないか、とも言へるわけです。最初に紹介

しました石川九楊さんなどは、（書家だから仕方ないとも言へるんですが）無文字社会なんていふものはもう言葉そのものがなかつたやうなものだ、と決め付けてゐます。

ところがそれどころではなくて、恐らく文字のなかつた世界の日本人は大変な集中力と力を込めて言葉を使つてゐたに違ひない。日本人は文字が入つてきた時、すでに我々自身の持ち物としての日本語を非常に強力な形で持つてゐたに違ひないのです。

一面ではたしかに、文字は人間にとつて、火の発明と同様に大きな発明だらうと思ひます。語られた言葉といふのは、今この瞬間に消えていきますが、書かれた文字は五分たつても、明日になつても消えない。それどころか、紙が残つてゐる限り、何年たつても消えないわけです。しかも時間を通じて消えないだけでなく、今のこの空間を離れて、世界の裏側にも伝はつて行く、さういふ時間と空間を超越した力を、書き言葉は持つてゐる。文字、テキストを持つた文明は、生身の人間が暮らしてゐる文化をはるかに離れた広範囲に支配するのです。そして、そのことを考へてみると、無文字の人間と、文字を持つた文明が接した時にどういふ事が起こるか、思ひ描けるやうな気がします。

確かに、文字のない世界は、人間たちが力を持つた言葉を語つてゐる世界ではあるけれども、「文字」といふものは、さういふ世界を変質させてしまふ威力をもつてゐる。十年、二

十年と経つうちに、「文字」は確実に「文字のない世界」を侵蝕してゆく。人間は文字といふ便利なものを持つてしまふと、火の発明と同様、それを使はないうで頑張り抜くといふことはできない。さういふ素晴らしいと同時に恐ろしい武器でもあるのです。

## 中国語文字

しかも、さらに事態を難しく複雑にしてゐるのは、我々が初めて接した文字が漢字、より正確に言ふと中国語文字だつた、といふ事です。アルファベット文字は、言つてみれば音の記録装置です。「ア」といふ音は「a」、オといふ音は「o」で表される、音と文字との単純な対応です。だから、ラテン語にも使へれば、日本語にも、英語にも、もちろん中国語にも、どんな言語にも使へる表音文字なのです。ところがこの漢字といふ中国語文字は、非常に特殊な性格を持つてゐる。普通これを表意文字と呼ぶのですが、単に表意文字と呼んだのでは不正確です。表音と表意が一緒になつてゐるのが漢字なのです。

例へば「波」といふ漢字があります。いまの我々はこれを平気で「ナミ」と読むのですが、これは日本人が訓読といふ大変な発明をしたからなんです。当時の中国人にとつては、

「プア」といふ音を表す記号である。と同時にこれは、水が斜めに傾いてゐる様子を表してゐる。つまり、「プア」といふ音と、水の傾きといふ意味とを、この文字は同時に表してゐる。「プア」といふ音自体は、日本語にも、ギリシヤ語にもある。水が傾いたさまを表す言葉も、どんな言語にも存在するわけですが、そのさまを「プア」という音で表すとすると、もうこれは中国語以外の何物でもないのです。

かういふ文字が最初に入つて来ると、非常に大変な事になる。この文字を使ふからには、この水の傾いた様子を「プア」と呼ぶ——さういふ中国語をそのまま受け入れなければならぬからです。その漢字を並べて作る文章も、日本語とは全く文法の異なる中国語の通りのものを受け入れなければならぬ。実際、最初に漢字といふ文字に接した様々な民族は、さういふ道を選ばざるを得なかつたわけです。

例へばベトナムでは、文字を使ふ役人たちは完全に中国語を使つて、中国語で文章を書いてゐた。後の世には、中国人よりもベトナム人の方が正調の漢字、漢文が書けるといふ事で、ベトナム人が中国人に自慢したんださうです。そのくらゐベトナムのインテリは完全に中国語に染まつてしまつた。そのベトナム人が、これではいけない、本当にベトナム語を表す文字を作らうとしたのは、十一世紀になつてからのことです。それも定着しないままで終はり、



結局十七、八世紀にローマ字表記が普及して、現在ベトナム人は完全にアルファベットでベトナム語を表記してゐる。それが実は一番普通の、中国語文字の受け入れ方だつたわけです。ですから、日本でも、ベトナムのやうに、上流の人間はすべて中国語で文章を書くやうになつてゐても不思議はなかつた。そして、本当にひよつとしたら日本語そのものがほろびてしまつてゐたとしても、不思議はなかつたのです。

ところがその困難な状況を、日本人はきはめてユニークなやり方で切り抜けることができた。それがまさに『古事記』の書き方そのものだつたのです。

### 日本語表記の発明

ご承知のやうに『古事記』は、古くからの歴史を口伝へに聴き取つてゐた稗田阿礼から、太安万侶が書き取つたものです。

つまり、言ふならば『古事記』とは、無文字の日本語の世界を、(本来は中国語そのものである)漢字といふ文字を通して甦らせ、再生しようといふ大変な試みだつたわけです。したがつて当然、そこにはさまざまの困難が待ち受けてゐる。その困難が「文体」かみびだいのうちにある



ありとうかがはれる、といふのが宣長の注目したところだったのです。

現に撰録執筆者の太安万侶自身が、その仕事の難しさをはつきりと述べてゐる。それが『古事記』の「序」の次の一節です。

然るに上古之時、言意並に朴にして、文を敷き句を構ふることに、字に於て即ち難し

これがまさに今言つた、無文字の世界の言葉をそのまま文字に表すことの難しさです。「朴にして」と言ふのは、単に素朴、幼稚である、といふ意味ではなくて、さっきお話ししましたやうに、無文字の世界において言葉といふものが非常な力をもつて生きてゐる——そのさまを表はしてゐる、と考へるべきでありませう。

安万侶は、当時すでに文字を知つてゐる世界の人間としてこの「序」を書いてゐるわけなので、この「朴にして」といふのは、もうすでに、自分たちが失ひかけてゐるものでもあつたわけです。それをもう一度字に書き表す事によつて取り戻すといふ、パラドクシカルとも言へる難しい事をやつてのけようとしてゐた。ところがそれをするのに、

すでに訓に因て述べたる者、詞心に逮ばず

すべてを訓読みにしてしまふ、つまりすべて漢字を単なる言葉の意味の伝達として使つて日本語を表す、これも大変な発明なんです、それだけでは、テニヲハも文の活用も消え、「心に逮ばず」、つまり意味の正確さを欠いてしまふ。かといつて、

全く音を以て連ねたる者、事の趣更に長し

音だけを万葉仮名ばかりで連ねると、ぱつと一目見て読むのが難しい。書く方だけでなく、読む方も非常に煩はしい。それを両方混ぜて、

是を以て今或は一句之中、音訓を交へ用ひ、或は一事之内、全く訓を以て録す、即ち辞理見え回きは、注を以て意を明す

一見何でもないやうに思はれますが、この方法が、まさに現在の「漢字かな交り文」とい

ふ、われわれの日本語表記法のもとをなしてゐる。そしてこの方法の発明によつて、われわれは「漢字」といふ「中国語文字」に呑み込まれることなく、かへつてそれによつて日本語を「文字のある言語」として確立することができたのです。

これは、単に言葉の表記の問題ではなく、我々が物を考へる時の一番の基本であり、我々の思想を成り立たせてゐる一番の拠り所である日本語が、かうして救はれた。それが日本の文化、歴史の一番根底となる出来事だつたわけです。

### 日本語といふ遺産

ここからもう一度さつきの宣長の「からご、ろ」を振り返つてみると、これは丸山真男が言ふやうな、単なるイデオロギー暴露でもなければ、単なる排外主義、偏狭なナシヨナリズムでも何でもない、といふ事が見えてきます。問題の中心となるのは、我々がそれなしにはもう我々自身であり得ないといふ大切な日本語が、過去にどのやうにして救はれたのかといふ事です。過去に無文字の世界を失ふことによつて、無文字の世界と文字の世界を二つながらにのみ込むといふ欲張つた事を我々はやつてのけたのです。

『古事記』は、無文字の世界で我々が体験してきたことを、できる限り生々しい形のままに伝へようとして出来上がつてゐる。それももちろん、文字がなければ今の我々にかういふ行き届いた形で伝へられるといふ事はなかつたのです。

文字との遭遇は、人間にとつて避けられない文明の歩みと言へます。世界の多くの民族は文字に接することによつて、それ以前の無文字の世界をいはば置き去りにし、或は軽蔑と共に捨て去つてしまつた。それに対して日本人は、無文字の世界の豊かさをそのまま文字の世界に持ち込んで、後の世代にも伝へ文明を作り上げてきたのです。

しかし我々にとつて漢語といふのは、やはりどこまでも外からの文明で、そこには千年たつても二千年たつても、ある種の危ふさがつきまとひます。輸入した文明である漢語で、我々の世界が広がつて豊かになる、その一方で、本来の日本語の世界を守り続けていく必要があるのです。

宣長の「からごゝろ」は、さういふ我々現代人にも共通した課題をはつきり書き表してゐる文章です。我々の無文字の世界はどういふものだったのか、それは何か力強いものだったに違ひない。それがいろんな形で今の我々のところまで引き継がれてゐるに違ひない。ここまでさかのほつて考へないと、「日本の思想」といふ言葉自体が、恐らく非常に空疎なもの

になつてしまふと思ひます。

今日、「日本の思想」といふものを後脚うしろあしで蹴飛ばす姿勢が世の中に満ちあふれてゐますが、さういふ人たちは結局、自分たちが引き継いでゐる山のやうな遺産の素晴らしさに気付いてゐないのでせうか。

それをもう一度振り返るために、宣長といふ人物は、今の我々の同時代人として改めてこの場に呼び出してみる必要のある人だ、と考へてをります。

### 質疑応答

(問) 江戸時代に日本の学者たちが儒教の教へを日本化して広めた結果、「孝行」を初めとする徳目が日本人の精神を豊かにしてきたと思ひますが、これも単なる「からご、ろ」として排除すべきなのでせうか。

(答) 外来の思想でも、我々が自らの生き方に即した、血の通つたやり方で、それを自覚的に捉へ直すと、それはもう「からご、ろ」を克服した、と言へるのではないでせうか。「からご、ろ」の何がいけないのかといふと、或る外来の思想だの概念だのを、それが「外

「来の」ものであることを忘れて、自分たち自身の伝統であるかのやうに錯覚することなのです。あらためて自覚的に「よきを取る」といふのであれば、それは少しも構はないと思ひます。

講義

## 日本の国柄

——尊いことが尊く見えてゐますか——

福岡県立嘉穂高等学校教諭

小野吉宣





一、開眼と神聖の回復

- (1) 「戦後思想克服のために」
- (2) 現代の専制（大学入試問題から）
- (3) 家庭教育と学校教育の乖離

二、期限付き大権と無限責任

- (1) ペルーのフジモリ大統領の明暗
- (2) ルイ・十六世の最期とフランス革命
- (3) 敗戦と日本

三、敗北に対する受け止め方

- (1) 終戦の詔書
- (2) 宮城前の光景
- (3) 『いのちをさげて』
- (4) 特攻隊員の悲しきいのち

四、敗戦後の天皇と国民

- (1) 全国ご巡幸
- (2) 皇室の伝統

一、開眼と神聖の回復

(1) 「戦後思想克服のために」

小柳陽太郎先生の御著書『教室から消えた「物を見る目」「歴史を見る目」』の一九八頁には占領政策がいかなる物であつたかに触れて次のやうに書いてあります。一緒に読み味はつて見ませう。

「占領政策が、決して一般に考えられているような、ひどいこともあつただろうが、いい面もあつたというような、そんな生易しいものではなかつた。それは日本の国のいのちそのものを断ち切るような、いかに峻烈、苛酷なものだったかということ直視していただきたいということ。そういう占領政策をそのまま実行に移して五十年、国が病にかからないはずはないのです。」

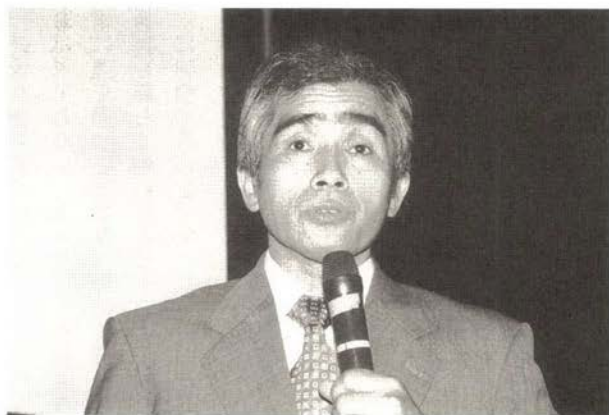
著者は「物を見る目」「歴史を見る目」が自然に「教室から消え」て行つたなどと悠長な

ことを言つてはをられない。占領政策のターゲットは「日本の国のいのちそのものを断ち切る」ことにあつた。私が副題にあげてゐます。「尊いことが尊く見えない」日本人にすることにあつた。そのやり方が「いかに峻烈、苛酷なものだつたかということ直視」していただきたいと言つてをられます。しかし現代ではこの「直視」をすることは、よほど難しいことだと思ひます。

## (2) 現代の専制（大学入試問題から）

*It seems if the present age had found a form of tyranny more difficult to tackle than any that has gone before. The old tyranny was simple by comparison. There was very little pretence that the tyrant ruled his people for their good. (現代はこれまでのいかなる時代よりも、もつと扱ひにくい専制といふものを見出したやうである。昔の専制はこれにくらべれば単純だつた。むかしの専制君主は人民の福祉のために支配してゐる振りはまづ見せなかつた)*

現代社会における巧妙なる政治テクニックについて述べたものでせうが、これを読んでわたしは現代の専制の典型的な例が「占領政策」であつたと昭和三十年代後半に大学入試の勉



強をしてみてもピーンと感じたものでした。その後、  
占領軍による「占領政策」を調べてみるにつけ、受  
験勉強時代の私の直感に正しかつたと思つてゐます。  
ここで朝日新聞の昭和二十年八月十六日の社説を  
ご紹介しませう。

「戦ひにおいて敗れたりとはいへ、そして見えざ  
る鉄鎖がひしひしと迫りつつあるとはいへ、いや  
しくもわれに自由なる魂ある以上、いかなる敵も、  
我々を奴隷とすることは出来ないのだ。国体を維  
持し得るか否かは片々たる敵の保障にかかるとは  
なく実に日本国民の魂の持ち方如何にかかるとは  
……日本国民が果たしていつの日にか再生し得  
るかは一に日本国民の魂がこの試練によつていか  
に鍛へられるかによつて決まるのである。」

終戦直後の朝日の社説には、敵の存在が見えてゐて、まだ日本国民としての自由なる魂を奪はれてゐない、きらりと光る視点がありました。残念なことに彼らはたちまちの内に占領軍に魂を売つてしまひ、日本民族としての根を断ち切る方にまはつてしまつたのです。その過程を詳しく触れることがここではできませんが、当時の新聞をファイルから取り出せばすぐに判明することです。

### (3) 家庭教育と学校教育の乖離

仁

國のためあたなす仇はくたくともいつくしむべきことな忘れそ（明治三十七年）

折にふれて

おのづから仇のこころもなびくまでまことの道をふめや國民（明治三十八年）

右の明治天皇の御製は日露戦争の時代にさかのほります。私の幼少時代には、明治は遠い時代のことではなくて、祖父母が具体的に体験を通して語つてくれました。それは日清・日露の戦ひでした。玄界灘を望む母の里では祖母が日本海大海戦の話を私たち孫が集まるとして

くれました。対馬沖で日露の戦ひが始まると砲煙が空を覆つて夜のやうに暗くなつた。砲声があがるたびに、裏の縁側のガラスが揺すぶられて「じゃじゃーん」「じゃじゃーん」と鳴つた。生きた心地がしなくて仏壇の前に座つて「日本を勝たせて下さい。どうぞよろしくお願ひします」と一心に念仏を唱へ続けたと話してくれました。祖母の身振りどガラスの鳴る身を縮ませるやうな音は今だに私には新しい響きを伴つてよみがへる音なのです。小学校の低学年のころ『明治天皇と日露戦争』といふ映画を見たものでしたが、夏休みのこと、昼寝から覚めた大叔父が「ああ、有り難い。ああ、有り難い。明治天皇様から『秋永幾之助』とわたくしの名前を呼んでいただいた」「ああ、有り難い」と大きな声で皆の前で泣いたのでした。大叔父は金鷄勲章を明治天皇に戴いてゐた日露戦争の勇士でした。日頃から謹厳であつた大叔父の感動ぶりは私にとつて忘れられない思ひ出で、ひろく日本民族としても、明治といふ時代を共感する世界に誘ひ込む逸話になり得ることだと思つてゐます。

その後、学校の授業では、日清・日露の戦ひは侵略戦争の始まりであつたと何度も何度も聞かされましたが知識として頭には入つても、家庭で聴いたハートを揺すぶるやうな話とは次元が異なつてゐたと思ひます。私の祖父母の話は古い話ではありますが、本当に尊いことは古いか新しいとかの次元で片づけられるものではないのです。

学校教育が、またマスメディアが、負のイメージをいくら私たちの心にぶち込んできても、尊いものが尊く見える心の目を曇らせてはならない。民族の誇りが汚されたままでもいいはずはありません。みなさん一人一人の開眼と神聖の回復こそがこの合宿教室の主調音であります。

## 二、期限付き大権と無限責任

### (1) ペルーのフジモリ大統領の明暗

平成八年十二月十八日、間近に迫った天皇誕生日を祝賀するパーティーがペルーの日本大使公邸で行はれてゐた。そこへ銃器を帯たトゥパク・アマル革命運動(MRTA)が襲ひかかり多くの人質をとつて立籠つたのです。年を越しても人質はなかなか解放されません。天皇陛下は、み心を痛められ次のやうな御製を詠んでをられました。

#### 在ペルー日本大使公邸占拠事件

我が生れし日を祝ひたる集ひにてとらはれし人未だ帰らず



陛下のみ心に応へ、人質の解放を成功させたのは、アルベルト・フジモリ大統領でした。人質が解放された翌年四月二十二日のあの日、私たち日本人はテレビの前にくぎづけでした。戦闘服に身をかためたフジモリ大統領はさつさうと指揮を執り、本当に輝いて見えました。しかし歴史は長期的にエイジを広げて見なければなりません。あれから四年余、権力闘争に敗れたフジモリ大統領は今はどこにいますか。ペルーには居ることが出来ないで、日本に亡命して来てゐます。昔から「窮鳥懐に入る時は獵夫も殺さず」と言ひますから暖かく日本で守つてやるのが人の道でせう。

しかしここで思考を止めないで下さい。選挙で選ばれ国家のナンバー・ワンの大権を掌握した人物がなぜ国を捨てなければならぬのか、日本の国柄を考へるヒントにさせていただきたい。

少し例をあげてみませう。近くでは一九八六年（昭和六十一年）、大統領選でアキノに敗北したフィリピンのマルコス大統領の例があります。大統領であつたマルコス一家が祖国を捨て専用の大型ジェット機に財産を積んでアメリカに亡命したのはご存知の通りです。また一九七五年（昭和五十年）、南ベトナムのグエン・バン・チュウ大統領はPrivileged Exile（特権ある亡命）をしたとアメリカのタイム誌が見出しを付けて報道してゐたやうに祖国を追は

れた。その特権とは三トン半の金塊それと十トンの宝物ださうです。金額にして何百億円になるか見当も付きませんが、さういふ金銀財宝を持ち出して、祖国南ベトナムを捨てアメリカに亡命した。見捨てられた南ベトナム国民の惨状は、ある者は、ボート・ピープルとして命からがら海上をさ迷ひ、又ある者達は共産軍により肅清されたと聞いてゐます。不幸極まりない国柄と言はざるを得ません。

## (2) ルイ・十六世の最期とフランス革命

次に世界史上の亡命の例を一つあげませう。数年前、合宿教室で竹本忠雄先生（筑波大学名誉教授）が「日本の神性と現代世界」といふ御講義をなさいました。その中で次のやうに話されました。その一節を引用します。

「一七九一年六月のある夜、ルーブルのチュイルリー宮殿からひつそりと二台の大型馬車に乗り込んだ王の家族が、ベルギーの国境のかたに亡命しようとしたが、これを追ふ革命派の面々と追ひつ追はれつの手汗を握るやうな逃避行のなかで、途中で何度か見破られながらも辛くも逃げおほせてゐたところ、つひにその運命の村バレンヌで捕まつて

パリに連れ戻される結果になります。」(『日本への回帰』三三集・一一二頁)

「ひつそりと二台の大型馬車」といふことですが、私たちの感覚からすれば「二台の大型馬車」に乗つてゐてどうして「ひつそり」といふことになるかと思ひますが、フランス人民のことよりもルイ・十六世一家のことが大事だつたのでせう。私欲に心が曇つてしまつてゐたのでせう。小型馬車でひつそりでなく大型馬車で逃亡します。当時の金貨にはルイ・十六世の肖像がレリーフされてゐたので顔が広く知られてゐたと言はれてゐます。パリに連れ戻され、后マリー・アントワネットとともに一七九三年処刑されてしまひます。

世界史上では国王や大統領が国を捨てて亡命するのはよくあることであります。日本の国柄と比較するにも比較にならないくらい血なまぐさい権力闘争が起きてゐます。

### (3) 敗戦と日本

日本は世界を相手にして戦ひ一九四五年(昭和二十年)八月十四日ポツダム宣言を受け入れ、<sup>はた</sup>戈を収めました。その時、昭和天皇はどのやうな行動を取られたか見てみませう。

昭和天皇(一九〇一―一九八九)が連合軍最高司令官マッカーサー(一八八〇―一九六四)を

訪問された時の写真があります。占領軍はこの写真を新聞で広く国民に見せて「日本が負けた」と思はせる意図があつたといひます。敗戦で自信を失つてゐたほとんどの国民は大きい国の大男に日本が負けたと言ふ印象を心理に刻印した写真だと言はれてゐます。通例、大男が小男に勝つ相撲やレスリングを今からするのではない。昭和天皇は日本国を代表者してモーニングに正装して訪問されてゐる。一方、マッカーサーの方は第一ボタンは外し両手は後ろにやつて傲然と立つてゐる。これは国の代表者を迎へる礼節をわきまへたマナーでは決してない。

マッカーサーはどのやうな心理で昭和天皇を待ち受けてゐたのでせうか。彼は世界的な先入観を持つて天皇に会はうとしてゐたやうです。

「私は天皇が、戦争犯罪者として起訴されないよう、自分の立場を訴えはじめるのではないか、という不安を感じた」（『マッカーサー回想記』下一四二頁）。古今の世界史上の支配者と同じやうに自分の地位や名誉を守るために天皇もここに來たに違ひないと不安を感じたと言ひます。実際はだうだつたか。天皇は全く予想に反することを言はれたのでした。親鳥があたかも自分の雛鳥たちをふところにかばふやうに敵將に向かはれたのでした。

「天皇の口から出たのは、次のような言葉だった。『私は国民が戦争遂行にあたって政治、軍事両面で行ったすべての決定と行動に対する全責任を負う者として、私自身をあなたの代表する諸国の裁決にゆだねるためにおたずねした。』私は大きい感動にゆすぶられた。死をとまなうほどの責任、それも私の知り尽くしている諸事実に照らして、明らかに天皇に帰すべきではない責任を引き受けようとする、この勇氣に満ちた態度は、私の骨の髄までも揺り動かした。」(同 一四二頁)

マッカーサーは電撃に触れたやうに感動したのでせう。「骨の髄までも揺り動かすような感動」に敵の將軍マッカーサーは打ち震へました。私は『マッカーサー回想記』のこの箇所を何度もこれまで読んでまゐりましたが、読むたびに新鮮な感動に突き動かされ、涙がポロポロと出てきて抑へようがないのです。諸外国の敗軍の將や国王とは、比較に絶する濁りのない神様のやうに清らかな心で「全責任」を負はうとなされたのです。この写真を撮影したカメラマンのフェーレイス氏は「天皇は、終始、堂々としてゐた」と印象を書いてゐます(『マッカーサーの見た焼跡』文芸春秋 一三六頁)。自分の身の安全が先立てば恐怖心がわくが、逆に身を捨てて国民を救はうとされてゐるのだから「終始、堂々と」振る舞へたのでせう。

マッカーサーは次のやうに言ひます。

「私はその瞬間、私の前にいる天皇が、個人の資格に於いて日本の最上の紳士であることを感じ取ったのである」(同一四二頁)。双方この時の話は誰にも言はないと約束したのでした。どのやうな政治家であつても、会談の内容といふものはたとへ秘密にすると約束し合つてゐても、手柄話として公表されがちなものです。しかし世論がどう流れやうとも、天皇陛下は約束を守られたのです。

一時はマッカーサーは天皇の上にあるやうな錯覚を日本人に与へましたが、昭和二十六年四月トルーマン大統領に解任され、帰米します。陛下は、あれほどのインパクトを与へた敵将との会談のことを永久に世に知られなくても、一向に構はないと言ふ気高い心境でをられる。そこでやむにやまれぬといふ形でマッカーサー元帥が日本から来た要人たちに何度も同じ言葉で感動を込めて伝へ、その回想記にも披瀝した次第でした。昭和三十九年(一九六四)、元帥も八十四歳の生涯を閉ぢました。

日本人記者団は陛下からも直接そのことをお聴きしたくて次のやうに質問します。それは昭和五十二年八月二十三日のことでした。「マッカーサー元帥も公表されたし、故人となられたのであるから、陛下の方からもあの会見についてお話し願えないでしょうか」と宮内庁

記者団から問はれて、次のやうにご返答になりました。「マッカーサー司令官との話でどこにも言わないという約束を交わしたことですから、男子の一言のごとく守らなければいけない。これを私が話すようでは、世界に信を失うことになります。」（昭和五十二年八月二十四日付の読売新聞）

これほどまでも「信」に篤い方がこの世にをられるのです。マ元帥がもしその場で聞いてゐたならば、自らの浅慮に赤面し、更に「日本の最上の紳士」から「私はその瞬間、私の前にいる天皇が、個人の資格において世界の最上の紳士であることを感じ取った」ときつと言ふに違ひありません。

天皇とは、国家と国民に対して期限付きで責任を負つてゐる人ではないのです。無限に責任を負つて常に国民の幸せを願つてをられる方なのであることがうかがへると思ひます。

### 三、敗北に対する受け止め方

#### (1) 終戦の詔書

ここで詔書を読む時間はありませんが昭和二十年の八月十五日、あの玉音放送のなされた



日、全国民がシーンとなつてラジオに耳を傾けどのやうに受け止めたか。敗戦だとわかると皆、泣いた。文献を通し祖父母の時代の人たちの心情を追体験し歴史に学んでほしいと思ひます。終戦の詔書はすぐに手に入る文書ですから全文を心を込めて読んでいただきたい。

## (2) 宮城前の光景

宮城前の玉砂利の上に土下座して老若男女は泣いた。国民の方では「私たちの力が及ばず敗戦となつてしまひました」「陛下申し訳け有りません」との思ひで涙を流したのです。みなさんもあの光景は写真でご覧になつたでせう。一方、天皇は一切の責任をご一身に負ひ続けてをられる。この君臣水魚の姿こそが限りなく美しい国柄であると私には思はれるのです。

## (3) 『いのちささげて』

国民文化研究会から『いのちささげて』といふ本が上下二巻で出版されてゐます。戦時中、学生であつた先輩の方々の中で多くの方が学徒の身で出征されました。そして勇敢に戦はれ、少なからぬ人達が尊いいのちを国にささげられたのです。それらの方々の遺文や遺歌が編集されて『いのちささげて』といふ本になつてゐるのです。この中に寺尾博之と言ふ方がおら

れます。

私たちは、福岡の油山で故寺尾博之少尉の慰霊祭を毎年八月十九日前後に執り行ひます。遺書には「大元帥陛下の股肱として干城の任を全くする能はず罪萬死に値す」とあります。軍人として十分な働きが出来ないで日本が敗北した。この罪は「万死に値す」と言つて昭和二十年八月十九日に自決されました。自分の命よりも尊いものが寺尾少尉にははつきりと見えてゐたに違ひありません。「願はくは 魂魄とこしへに 祖国に留めて 玉體を守護し奉らむ」死してのちも、永久に魂を祖国日本に留め、玉体すなはち天皇陛下を守護し奉るのだと言はれる。かうしてスピリチュアルな存在となつて、たくさんの方々が自分一個のいのちよりさらに尊い皇統を守護してをられるのです。(『いのちささげて——戦中学徒・遺詠遺文抄——』

国文研叢書No19 六四頁)

#### (4) 特攻隊員の悲しきいのち

特攻隊の若い勇士の方々が最終的に守らうとしたのは「日本の国柄」であつたと私は解釈してゐます。『知覧特別攻撃隊』を編集した村上薫氏は「学校を卒業したばかりの二十歳前後の若桜は、国家危急を救おうと、生死を超越して、従容機上の人となり、笑顔を残して出

撃していったのです」と言つてゐます。表紙の写真をみると五人の特攻服に身を包んだ若いパイロットたちが笑顔で子犬を抱いて写つてゐます。心のやさしい慈しみ深い表情をしてをられます。私たちよりインテリジェンスもあつた方だと思はれます。一人一人の遺書を読んでみると分かります。一つだけ紹介させよう。

#### 辞世の歌

桜花と散り九段に還るを夢に見つ鉄艦屠らん我は征くなり

浅川又之（昭和二十年四月六日出撃戦死 長野県 二十三歳）

「九段」とは靖国神社のことです。靖国神社に神となつてまつられるといふ深い深い思ひがあるのです。靖国神社に代はる国立基地を造ればよいなどと軽々言ふ人がゐますが、この方達の生命がけの信念を、その信仰にも似た思ひを生者の一存で奪ふことなどできるはずがありません。そんなことをすれば、他国の例にあるやうに墳墓を暴くに類することになつてしまひます。政権が変はることにその繰り返しが起こり、取り返しのつかないやうになつてしまひます。生者が「信仰の自由」を尊重すると言ふならば、物言はない「死者」にも「信

仰の自由」はあるのです。それ以上にこの方達の尊い捨身の行為の上に現代の私たちは生かされてゐるのだと言ふことを肝に命じておかねばなりません。

#### 四、敗戦後の天皇と国民

##### (1) 全国ご巡幸

昭和二十一年、昭和天皇御年四十六歳の御製に、

松上雪

ふりつもるみ雪にたへて色かへぬ松ぞををしき人もかくあれ

といふお歌があります。大東亜戦争の敗北、被占領、国民の飢餓と苦しみ、これらすべて天皇の御一身に降り積もる雪なのです。その下にあつて「いろかへぬ松」とは王者としての御決意であり御覚悟であつたと拝されます。年月を経るとも「信」は世界に対しても篤く変はらぬものがありました。大戦に敗北したとはいへ民族として国家再建に雄々しく立ち上がり

得たのは何故でせうか。その中核には天皇陛下がをられたからであると私たちははつきりで見定めておかねばなりません。

天皇は国民を励ますために全国御巡幸を始められます。副島廣之著『御製に仰ぐ昭和天皇』（善本社）から引用します。

「この戦争によって領土を失い、国民の多くの生命を失い、大変な災厄を受けた。この際、わたくしとしては、どうすればいいのかと考え、また退位も考えた。しかしよく考えた末、この際は全国を隈無く歩いて国民を励まし、また復興のために立ち上がらせるための勇氣を与えることが自分の責任と思う」といふのが当時の陛下の御胸中であつた（宮内府次長 加藤進）。ここで全国ご巡幸は「しかしよく考えた末、この際は全国を隈無く歩いて」と言つてをられることに注意したい。占領軍としては「石の一つでも国民が天皇に投げる」ことを暗に期待してゐた向きがあります。しかし行く先、行く先で奉迎の人波が引きも切らず「天皇陛下万歳」の歓声で日の丸を振つて陛下をお迎へする。一日が終はり宿に帰ると、残響で耳が聞こえなくなるほどの「天皇陛下万歳」の歓呼の嵐であつたと言はれてゐます。

そこで一時、占領軍からの意向で御巡幸の中断があります。しかし「全国隈無く」といふ天皇陛下のお気持ちは強くて、再開されることになります。お陰で全国民は励まされ立ち上

がる勇気を与へられました。扶桑社の「新しい歴史教科書」にのみ御巡行について紹介されてゐます。

## (2) 皇室の伝統

占領軍の情報局にいたオーテス・ケーリは著書『横糸のない日本』の中で「私は『行幸』を大いにすすめた。天皇が日本人のものなら、日本人に見せるべきだ。会って親しむべきだ」と言つてゐる通り、ご巡幸を勧めた人物の一人のやうです。だが彼は次のやうに限界があります。「このごろの日本の動きには、こわいものがある。天皇はその一つだ。せんだつて天皇は伊勢詣でをやった。そして京都、奈良と祖先のお墓参りをした。独立報告というこゝとであつた」。アメリカにはたかだが二百年の歴史しか無いから次のやうに言ふのです。

「おとうさんの墓、お祖父さんの墓までは、人情として理解できる。だが、神武天皇となると、この人が實在の人間であつたかどうか、昨今の学説では怪しくなつてゐる。伊勢もそうである。そういう行幸は、昔通りの皇統連綿や、皇紀二千何百年とかと結びつく。もうそういうことは卒業してゐるものと、思つていた」(『横糸のない日本 天皇と日本人とデモ

クラシー」(二七五頁)。

横糸のない日本とは、日本では歴史的伝統といふ「縦糸」が目立つといふ意味でせう。そこに「横糸」を入れるには縦糸である日本の歴史とのつながりを薄め、その根を断ち切れればよいと言ふ単純な発想で占領政策を行つたといふのでせうか。さうだとするならば私は「卒業しない日本人」で結構なのであります。皇統連綿の縦糸が三代前のお祖父さんで切れるわけがありません。切られてなるものですか。尊いものが尊く感じられ美しいものが美しく見える瑞々しい心を私たち日本人はもつと大切にしたいものです。



講義

古典に親しむ

——『古事記』——

昭和音楽大学短期大学教授

國武忠彦



「ものまなび学問の基本」

天の岩戸

天宇受売の命

蚕と穀物の種

「学問の本」  
ものまなび

古典とは何か。古くて価値のある大切な書物といふことでせうが、古くて価値のある大切な書物といへば、まづ思ひ浮かぶのは『古事記』です。『古事記』は、わが国最古の書で和銅五年（七一三）に成立してゐます。天武天皇（御在位六七三～六八六）が稗田阿礼に誦習させた帝紀（歴代天皇の即位から崩御に至る記録）、旧辞（古い神話や伝承）をもとにし、元明天皇の勅により、太安万侶が撰録したもので、神代から推古天皇の時代までの歴史的伝承を記した書です。

『古事記』が価値のあるのは、古いだけではありません。私たちの住む日本国家の誕生について書かれてゐる。さらに、私たちの祖先の言葉、国語（日本語）の古い言葉をそのまま残さうとしたからです。これこそ古典の中の古典と言へるでせう。江戸時代の国学者本居宣長は、「上代の清らかなる正実をなむ、熟らに見得てしあれば、此記を以て、あるが中の最上たる史典と定めて、書紀をば是が次に立る物ぞ、かりそめにも皇大御國の学問に心ざしなむ徒は、ゆめ此意をなおもひ誤りそ」（『古事記伝』）と記してゐます。『古事記』を古典の中の

古典と定め、『日本書紀』をその次に立てる。わが国の学問を志すものは、かりそめにもこのことを思ひ誤つてはならない、と言つてゐます。

昨日（第三日目）の、長谷川三千子先生の御講義をもう一度振り返つてみませう。『古事記』は上代の日本人が語つてゐた古い言葉をそのまま伝へやうとしたものである。このことを、今一度考へてみたいのです。頭の中で何かゴチャゴチャと知的に概念的に考へることを思想と思つてはゐないか。さうではない。小林秀雄は「思ひ描く」ことだと言ふ。そこに身をおいて、そこに自分がゐると追体験する。想像力を働せる。小林秀雄は、「歴史は神話である」「想像力の働かない処では、歴史はその形骸を曝すだけである」（『ドストエフスキイの生活』歴史について）と言つてゐますが、思想とは、いかに切実に「思ひ描く」ことができるか。宣長はそれができた人だ。

わが国には本来文字がなかつたこと。何事も直接口で言ひ伝へ、耳で伝へ聞いてゐた長い長い時代があつたのである。しかし、無文字社会の日本が、はじめて文字に接したのが漢文といふ外国の文字であつたこと。その驚きととまどひ。文字がなくなるとも何一つ不自由のない豊かな社会であつたが、文字を知ればこれはまた大変便利なものであることがわかつてくる。無文字社会がどんな社会であつたかと思ひ描くことは、今日の我々にとつてはとても難しい



ことです。長谷川先生は、文字のなかつた社会では、  
「言葉に力をこめて人々は生きてゐた」と仰言いま  
した。ところで、文字といふもの、漢字といふもの  
が、素晴らしいものであることが次第にわかつてく  
ると、使はない手はない。丁度、「古事記」が編纂  
されたころは、まさに漢文の全盛時代でした。その  
漢文化の中で、稗田阿礼の誦習した古い日本の言葉  
をそのまま出来るだけ文字として残したい。太安万  
侶は、その時の苦勞を、「上古の時、言と意と  
並ならびにすなは 朴にして、文を敷き句を構ふること、字にはす  
なはち難し」（『古事記』序）と言つてゐます。上代  
では言葉と心は共に素朴で、文章を作り句を作らう  
としても、文字に書き表はすことはそれはとても困  
難です。阿礼が誦習する、古くから大事に語り伝へ  
られてきた日本の言葉を、どう正確に漢字に表現す

るか、といふ困難なのです。そこで、安万侶のとつた方法は、「一句の中に、音と訓とを交へ用ゐ、或るは一事の内に、全く訓を以ちて録しぬ」。一句の中に、漢字の音で仮名書きするのと漢字の意味による方法とを交ぜて用ひ、あるいは一事を全く漢字の意味をもつて記した。例へば、音訓を交へた例として、「御頸珠の玉の緒ももゆらに取りゆらかして」（首にかけた珠の緒もゆらゆらとゆり鳴らして）の「取由良迦志」。この「取」は訓、「由良迦志」は音です。哭きいさちる（泣きわめく）の「哭伊佐知流」。この「哭」は訓、「伊佐知流」は音で表現してゐます。全訓の例としては、「万妖悉発」（よろづのわざはひことごとにおこりき）、「山川悉動國土皆震」（やまかははことごとにとよみくにつちみなゆりき）などに見られます。漢字の音と訓とを使ひながら、古い日本の言葉と心を失はないやうに非常な苦心を払つてゐるので、日本の言葉と日本の精神は一体なのです。漢文の全盛時代に失ひかけていく日本の言葉をなんとか文字化して遺したい。安万侶の強い決意と苦勞が伺へるところです。

本居宣長は、三十五歳から六十九歳まで、三十五年間かけて『古事記』の研究をしました。そして、「これぞ大御国の学問の本」と言ひ、つぎのやうな歌を詠んでゐます。

古事ふることのふみをらよめばいにしへのてぶりこと、ひ聞見るきこごとし

『古事記』を読めば、私たちの祖先の身振りや言葉を交はしてゐる様子が目の当たりに見えるやうだ、とその喜びを詠つてゐる。「古いもの言ひ」にて、「古への実ミヤコトのありさま」がこもつてゐる、といふ喜びです。

## 天の岩戸

さて、前置きはそのくらゐにして、本文を読みませう。今日は、「天の岩戸」の処を読みたいのですか、その前にそれまでのあらずじを簡単に述べます。

天地のはじめに、イザナギノミコトとイザナミノミコトとよばれる男女の神が現れ、国生みくにのみ神生みを行ひます。イザナミは火の神カグツチを生んだために、女陰はとをやけどし、死んで黄泉国よみのくに（死者の国）に行きます。イザナギはイザナミの後を追つて黄泉国を訪れますが、変り果てたイザナミの姿を目にして逃げ帰ります。その後、けがれをはらふために禊みそぎをします。このときアマテラス大御神とスサノヲノミコトが生まれる。イザナギはたいへん喜び、アマテラスには天を、スサノヲには海をお治めなさいと命じます。しかし、スサノヲは、母



のゐる国に行きたいと泣きわめく。父のイザナギは怒り、追放します。

追放されたスサノヲは、姉のアマテラスに一度お会いして黄泉国に行かうとして、天に上ります。この時、山川はことごとく鳴り騒ぎ国土はみな振動します。アマテラスは、弟は国を奪ひにきたのに違ひないと疑ひ武装する。そこで、誓約をして子を生みますと三女神が現はれる。ここに、スサノヲの疑ひがはれます。

ここに速須佐男の命、天照らす大御神に白したまひしく、「我が心清明ければ我が生める子手弱女を得つ。これに因りて言はば、おのづから我勝ちぬ」といひて、勝さびに天照らす大御神の営田の畔離ち、その溝埋み、またその大嘗聞しめす殿に屎まり散らしき。かれ然すれども、天照らす大御神は咎めずて告りたまはく、「尿なすは酔ひて吐き散らすとこそ我が汝兄の命かくしつれ。また田の畔離ち溝埋むは、地を惜しとこそ我が汝兄の命かくしつれ」と詔り直したまへども、なほその悪ぶる態止まずてうたてあり。天照らす大御神の忌服屋にましまして神御衣織らしめたまふ時にその服屋の頂を穿ちて、天の斑馬を逆剥ぎに剥ぎて墮し入るる時に、天の服織女見驚きて梭に陰上を衝きて死にき。かれここに天照らす大御神見畏みて、天の石屋戸を開きてさし隠りましき。(武田祐吉校注「古事記」)

速須佐男命の、「はや」は勇ましい、「すさ」は荒れすさぶ。勇ましく荒れすさぶ男ですから、暴風の神とも想像されるわけです。私の心が「清明ければ」、清く明るい心であつたから「手弱女」、しなやかでやさしい女の子が生まれたのです。これによつて即ち私が勝つたのですと言つて、「勝さびに」勝ちに乗じて、いい気になつて、天照大御神の作つてゐた田の「畔離ち」、田と田の大事な境である畔を取り壊す。水田に水をそそぎこむ溝も埋めてしまふ。これは古代社会では大きな罪です。畔・溝といへば、登呂遺跡を思ひ出します。水田が四十見つかつたが、水田を画する畔には杭が打ち込まれ、杭と杭の間には矢板を打ち込んだ。矢板は、長さ二メートルほどの杉の板で厚さ三、四センチ、幅三十センチ、その先端を尖らせてゐる。この杭と矢板の列の間に、石や土を運び詰め込んで畔をつくつていつたのでせう。泥深い湿地に畔を作ることには大仕事です。村人の総力を挙げて作つたことのでせう。平安時代の「延喜式」によると、「畔放、溝埋、樋放、頻蒔、串刺、生剥、逆剥、屎戸」は、天罪としてあげられ、神のもつとも忌みきらふものであり大罪でした。

また、「大嘗」、秋のお米の収穫を感謝して召しあがる、その神聖な殿に尿をまき散らしました。このやうなことをしても、天照大御神はお咎めにならないで、「屎のやうなものは酒

に酔つて吐き散らしたものでせう。また畔や溝を壊したのは、地面が無駄になるのが惜しい、そこも耕さないともつたないと思はれてなされたのでせう」と「詔り直しなほ」、悪いことも良いことに解釈して言ひ直されるのです（前記の武田祐吉校注『古事記』をもとに意識。以下同じ）。

このあたりは、天照大御神の名が度々出てきますが、宣長はかう言つてゐます。「始の一はじめを然申しかして、次々はたゞ大御神とのみあるべきを、度毎たびに天照大御神とあるは、煩はしきに似たれども、これぞ古文の格かたなるべき」と指摘してゐます。「古文の格かた」とは、古い国語の語法が伺へるといふことでせうか。

さて、天照大御神は、善意に解して弟をかばつても、その乱暴なしわざは「うたてあり」、ますます進行します。天照大御神が「忌服屋いみはたや」、汚れを忌む神聖な機織場で、神様に捧げるお召し物を織らせてゐる時に、その機織場の屋根に穴をあけて、まだら模様の馬の皮をむいて墮し入れたので、機織女はたおりめは驚いて機織りの道具の梭ひを陰はと（性器）に衝いて死んでしまひました。天照大御神はこれを見て恐れをなし天の岩屋戸を開いて中にお隠れになりました。

天照大御神が「忌服屋にましまして神御衣織らしめまたふ」の箇所、和辻哲郎は「大神は自ら神を祀つてゐる。祀られる神であるにもかかはらず、また自ら祀る神である」と指摘してゐる。天照大御神は天皇の先祖、皇祖神ですが、ここでは神に捧げる神御衣かむみそを織られて

ゐる。祀られる神といふよりは、祀る神として登場されてゐるのです。私たちは、日本史における歴代天皇をみると、天皇は常に神に祈り、神を祀られる人であられたことがわかります。神の恵みに感謝し、民安かれと祈られる人でありましたが、その原型をここに見る思ひがいたします。

### 天宇受売の命

ここに高天の原皆暗く、葦原の中つ国悉に闇し。ここに因りて、常夜往く。ここに万の神の声は、さ蠅なす満ち、万の妖悉に発りき。ここを以ちて八百万の神、天の安の河原に神集ひ集ひて、高御産巢日の神の子思金の神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集へて鳴かして、天の安の河の河上の天の堅石を取り、天の金山の鉄を取りて、鍛人天津麻羅を求ぎて、伊斯許理度売の命に科せて、鏡を作らしめ、玉の祖の命に科せて八尺の勾摠の五百津の御統の珠を作らしめて天の児屋の命布刀玉の命を召びて、天の香山の真男鹿の肩を内抜きに抜きて、天の香山の天の波々迦を取りて、占合まかなはしめて、天の香山の五百津の真賢木を根掘じにこじて、上枝に八尺の勾摠の五百津の御統の玉を取り著け、中つ

枝に八尺の鏡を取り着け、下枝に白幣青和幣を取り垂でて、この種々の物は、布刀玉の命太御幣と取り持ちて、天の兎屋の命太祝詞言禱ぎ白して、天の手力男の神、戸の掖に隠り立ちて、天の宇受売の命天の香山の天の日影を手次に繋けて、天の真拆を縵として、天の香山の小竹葉を手草に結びて、天の石屋戸に覆槽伏せて蹈みとどろこし、神懸りして、胷乳を掛き出で、裳の緒を陰に忍し垂りき。ここに高天の原動みて八百万の神共に咲ひき。

ここに高天原はみな暗くなり、葦原中国もことごとくまつ暗闇となつた。かうして、いつでも夜がつづいた。ここにあらゆる神（宣長は「悪神」といつてゐる）の騒ぎまはる声は夏の蠅のやうに満ち、数多の悪いことが起こりました。そこで、八百万の神々が、天の安河の河原にお集まりになつて、高御産巢日神の子の思金神に考へさせます。「思金神」は、「日本書紀」には「思兼神」とある。宣長は、「思慮なり。金は兼にて、数人の思慮る智を、一の心に兼持る意なり」と注釈してゐます。思慮知恵を多く兼ね持つた神なのです。

まづ、長鳴鳥を集めて鳴かせます。ニハトリの声は呪力があり、邪気を祓ひ太陽を呼ぶと信じられてゐたやうです。夜があけて早く朝がきてほしい、といふ願ひがこもつてゐます。次に、天の安河の河上にある堅い石を取つてきて、また天の金山の鉄を取つてきて、鍛冶屋

の天津麻羅を探し求めて、伊斯許理度売命に命じて鏡を作らしめ、玉を作ることの祖に命じて、「八尺の勾摠の五百津の御統の珠を作らしめて」、大きな勾玉がたくさんついてある玉の緒の玉を作らせて、このあたりは助詞の「て」が連続して使用されてゐますが、語りの調子を彷彿させます。

次に、天兒屋命と布刀玉命を呼んで、天の香山の男鹿の肩骨をそつくり抜いてきて、天の香山の波々迦の木を取つてその鹿の肩胛骨を焼いて占はしました。「天の香山」は、万葉集に「天降りつく天のかぐやま」と詠はれてゐるやうに、天から降つてきた山、高天原につながる山、聖なる山と考へられてゐたのです。「占」とは、鹿の肩胛骨を焼いて、その亀裂のやうすで神意をうかがふ太占の法でせう。弥生時代の遺跡から、占ひに使はれた鹿の骨が多く出土してゐます。次に、天の香山の枝葉の繁つた賢木を根つこから掘つて、上の枝には大きな勾玉のたくさん玉を緒を懸け、中の枝には大きな鏡を懸け、下の枝には白い楮だの青い麻の皮の晒したのなどをさげて、これらの種々の物を布刀玉命がささげ持ち、天兒屋命が莊重な祝詞を唱へ、天手刀男の神が岩戸の陰に隠れて立つた。さあ、それぞれの神が役割分担をして、天照大御神を岩戸から引き出す準備は整ひました。いよいよ天宇受売命の登場です。



天宇受売命は、天の香山の天の日影蔓をたすきに懸け、まさきの蔓を鬘として、天の香山の小竹の葉を束ねて手に持ち、岩戸の前に桶をふせて、「覆槽」とは何か。宣長は、「中を空虚ウツクに設けたる台」「空筒ウツケ」と言ふ。中がからつぽの容器のことで、西郷信綱は「太鼓の原始状態」と考へられないかと想像してをります。縄文時代の遺跡から有孔罍ゆうこうづば付土器が発掘されてゐますが、これには太鼓説（「縄文の音」土取利行）があります。桶をふせて踏み鳴らし、神懸りして胸乳をかき出し、裳の緒を陰部までおし下げた。高天原は鳴りひびいて八百万の神はいつせいにどつと笑ふ。

さて、八百万の神は天照大御神を岩戸から引き出すためにこのやうなお祭りを行ひましたが、これは宮廷で新嘗祭の前日に行はれた鎮魂祭たまひかりまつりの起源を物語つてゐるのではないかと、と言はれるます。十一月の冬至のころの寅日とらひ、太陽の光が最も弱まるころ、天皇の魂も弱まつていく。御魂を揺り動かす、元気を回復していただく。国民も国も元気を取り戻していく祭式のことではないのか。これはおそらく、『古事記』に記載されるずつと前から、農民の中で毎年繰り返し行はれてきた太陽の復活（再生）を願ふ神祭りであつたと思はれるのです。

さて、私たちも元気を取り戻すために、ここで音楽を聴きませう。喜多郎のCD『古事記』です。天の岩戸の第六楽章「饗宴」を聴きませう。喜多郎が『古事記』を読んだときの



興奮と喜びが伝はつてきます。昭和五十年、シンセサイザー（電子音楽）もまだ始まりのころです。できれば西洋風の音楽を作りたいとイギリスに出かけたのでせうが、「私の音楽——それはもう明らかだった。私は日本人であり、どこまでいっても大和民族であることに変わりはない。だから無理に日本的な音楽をと考えなくても、私の作る音楽は、自然に日本の音楽になってしまふ」（『喜多郎』）と自覚する。二十二歳の時です。「タイでは、路上に胡弓や笙しょうひちりきのような楽器を演奏している人がいる。実際、そういう人の音楽に、えんえんと半日でも一日でも聴きはれてたこともあった」。私は、喜多郎の音楽の新しさの源はここにありと思ひました（編注、ここで喜多郎のCD『古事記』第六楽章が講義室に流れる）。

ここに天照らす大御神怪しとおもほして、天の石屋戸を細ほそに開きて内より告りたまはく、「吾あが隠こもりますに因りて、天の原おのづから聞く、葦原の中つ国も皆聞けむと思ふを、何なにとかも天の宇受売うずめは樂し、また八百万の神諸もろもろ咲ふ」とのりたまひき。ここに天の宇受売うずめ白さく、「汝命いましめごとに益りて貴き神たかいますが故に、歎なげ喜び咲わらひ樂ぶ」と白しき。かく言ふ間に、天の児屋の命、布刀玉の命、その鏡を指し出でて、天照らす大御神に示みせまつる時に、天照らす大御神あやいよ奇あやしと思ほして、やや戸より出でて臨みます時に、その隠かくり立てる手

力男の神、その御手を取りて引き出だしまつりき。すなはち布刀玉の命、尻久米繩をその御後方に控き度して白さく、「ここより内にな還り入りたまひそ」とまをしき。かれ天照らす大御神の出でます時に、高天の原と葦原の中つ国とおのづから照り明りき。ここに八百万の神共に議りて、速須佐の男の命に千座の置戸を負せ、また鬚と手足の爪とを切り、祓へしめて、神逐ひ逐ひき。

そこで、天照大御神は不思議に思はれて、天の岩戸を細めにあけて内から仰せになるには、「わたしが隠れてゐるので天の世界は自然に闇く、下の葦原中国も皆闇いと思ふのに、どうして天宇受売は歌ひ舞ひ、また多くの神は笑つてゐるのですか」と仰せられました。そこで、天宇受売が申すには、「あなた様に勝つて貴い神様がおいでになりますので喜び笑つて歌ひ舞つてをります」と申しあげた。かう申す間に、天兒屋命と布刀玉命が、かの鏡をさし出して、天照大御神にお見せ申し上げる時に、天照大御神はいよいよ不思議にお思ひになつて、少し戸から出て鏡の中をのぞかれるときに、戸のそばに隠れてゐた手力男神がその御手を取つて引き出し申し上げた。ただちに布刀玉命が注連繩をそのうしろに引き渡して、「この繩から内にもどつてお入りになつてはいけません」と申し上げました。

かくて天照大御神がお出ましになると高天原も葦原中国も自然に照り明るくなりました。そこで、八百万の神々が相談をして、速須佐男命にたくさんの贖罪の品を出させ、鬚と手足の爪を切つて祓ひをして、高天原から追ひ払はれました。

### 蚕と穀物の種

また食物を大気都比売の神に乞ひたまひき。ここに大気都比売、鼻口また尻より、種々の味物を取り出でて、種々作り具へて進る時に、速須佐の男の命、その態を立ち伺ひて、穢汚くして奉るとおもほして、その大気都比売の神を殺したまひき。かれ殺さえましし神の身に生れる物は、頭に蚕生り、二つの目に稲種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麦生り、尻に大豆生りき。かれここに神産巢日御祖の命、こを取らしめて、種と成したまひき。

速須佐男命は、このやうにして高天原から追はれて、食物を大気都比売神にお求めになりました。そこで大気都比売神は鼻や口また尻から種々のうまい食べ物を取り出して、種々お

料理をしてさし上げました。速須佐男命はそのしわざを立ち伺つて、きたないことをして食べさせるお思ひになつて、その大気都比売神を殺してしまひました。殺された神の身体に生まれ出たものは、頭に蚕が生まれ、二つの耳に粟が生まれ、鼻に小豆が生まれ、陰部に麦が生まれ、尻に大豆が生まれました。神産巢日御祖命が、これをお取りになつて、種となさいました。

大気都比売神は、食物の女神です。なぜ食物が大地から生まれてくるのか。刈り取つて食べても、種をまけば生まれてくる。この不思議な世界を、私たちの祖先はどう考へたのでせうか。

粟、小豆、麦、大豆は、すでに縄文時代の焼畑で作られてゐたことがわかつてゐます。縄文時代の遺跡から土偶といふ人間をかたどつた土製品も発掘されてゐます。乳房を強調したり妊娠状態の女性を形象化したものが多い。六、二十センチほどの長さだが、どこかの部品が必ず破損してゐる。藤森栄一などの考古学者は、土偶を壊すことで増産や繁殖を祈る呪術を行つたのではないかと想像してゐます。殺されたものの身体から食物が生へだす。いつたん土偶を壊すことで、死体から豊かな作物の誕生を祈る。この大気都比売神の神話と土偶の発掘は、私たちの遠い祖先の食物への信仰を窺はせる興味深いところではあります。

さて、このやうに見てきますと、『古事記』は決して作り話ではないことがわかります。自然に生まれてきた、実際の話を集めたものです。私たちの祖先がいかに生きたか、何をいかに経験したか、その歴史を語った事実の物語だと私は思つてゐます。



講話

雅楽への誘ひ

日本芸術院会員

東儀俊美





一、雅楽の語意

二、雅楽の種類

三、雅楽の楽制改革

四、悠紀・主基の歌舞について

〈質疑応答〉

## 一、雅楽の語意

「雅楽」といふ語は古代中国で発生した言葉で、俗楽に対して「正統な音楽」といふ意味をもつてゐます。雅楽は、古くは中国・朝鮮で一時期繁栄を見ましたが、現在では両国共に跡絶えてしまひました。日本の雅楽は、これらの国および東南アジア諸国より渡来した音楽が十世紀前後に淘汰されて、日本独特の音楽として完成を見た音楽です。

## 二、雅楽の種類

「雅楽」といふのは、三種類の異なつた音楽の総称です。

一つは国風歌舞くにぶりのうたまひです。それは、外来の音楽以前の、日本にもともとあつた一番古い音楽です。これは歌と音楽と舞とからなつてゐます。そのなかには「神楽歌」とか「東遊あづまあそび」とか「久米歌」などがあります。

二つ目は外来の楽舞で、これが普通一般には雅楽といはれるものです。中国やベトナム、

インドなどのアジア大陸から五世紀の終りから八世紀ごろに伝来したものです。

三つ目は歌物といはれるものです。同じ国風歌ですが、十一世紀ごろに、日本の宮中で誕生した舞ひを伴はない歌謡です。これには「朗詠ろうえい」と「催馬楽さいばら」の二種類があります。「朗詠」とは漢詩に旋律をつけたものです。また、「催馬楽」は地方の民謡や馬子歌を雅楽風にアレンジしてこしらへたものです。

この三つを総称したものを現在では「雅楽」といひますが、一般には「雅楽」といふと外来の楽舞のことをいひますので、今日はそれを中心にお話しませう。

### 三、雅楽の楽制改革

日本人が一番最初に雅楽を聴いたのはいつ頃かと申しますと、五世紀の半ごろです。允恭天皇が崩御なされた時に、新羅国しらぎのくにから八十人の楽人が弔問に訪れて音楽を奏しました。それが、雅楽を聴いた初めです。その後順次、中国・ベトナム・インドなどから頻繁に入ってきました。それに伴ひ様々な楽器も輸入されました。それが揃つたのが八世紀半ば、平安京に遷都する少し前のころです。インド北部で使はれた天竺楽、朝鮮から入つた高麗楽こまがく、又唐の



時代に隆盛であつた、五弦琵琶などの弦楽器、笙や横笛などの管楽器、また太鼓や鉦鼓しやうこなどの打楽器など様々な楽器が入つて来ました。正倉院には現在使はれてゐない楽器が残されてゐます。中には手のひらにのるやうな小さな楽器もあれば、大きいのは二トン半もあるやうな楽器もあります。音の大きさも、ささやくやうな音の楽器から一キロ先からでも聞こえるやうな楽器もあります。始めはこれらは渡来人によつて演奏されてゐました。その中には日本人が好きな楽器とさうでない楽器もありました。九世紀ごろには日本人の中でも雅楽に堪能な者がたくさん出てきました。例へば最近小説の中で陰陽師の友人として描かれてゐる源博雅などが有名です。それらの人々が九世紀後半から約百年ぐらゐの歳月をかけて、これら中国、朝鮮及びアジア各地から伝来した

楽舞を整理・統合して今あるやうな日本風の雅楽に作り替へて行きました。これを「楽制改革」といひます。

楽制改革でまづ始めにしたことは、膨大な数の楽器を日本人好みの楽器に整理縮小したことです。笙・箏・篳篥・笛の三管、琵琶・琴の両絃、羯鼓・太鼓・鉦鼓の三鼓の八種類の楽器で演奏するやうにし、後は使はないやうにしました。いつてみれば膨大な楽器によるオーケストラ編成を、小編成の室内楽形式にしてしまつたといふことです。

二つ目は、音階や旋律・和音を日本風に改めたことです。中国、ベトナム、インド、朝鮮それぞれの地域から入つた音楽が同じであつたとは考へられません。音階も違へば調子も違つてゐたはずで、その当時六十近くあつた音楽の調子を、日本風なものに少なくし、六つの調子にまとめあげ統一しました。

三つ目は、雅楽を二つの傾向に分類したことです。中国・ベトナム・インドに起源を持つ楽舞を唐楽としました。また、朝鮮半島を経由した楽舞や、満州、北支那方面のものをまとめて高麗楽としました。それに伴ふ舞も前者を左舞、後者を右舞としました。

左舞と右舞の語源は、日本は昔から中国をお手本としてきたので、上位としての左を中国伝来のものとした説と、その当時、近衛府の左近衛府の者が舞つてゐたのを左舞、右近衛府

の者が舞つてゐたのを右舞としたといふ説があります。実際の違ひは、着てゐる装束が左舞は赤を基調とし、右舞は緑を基調としてゐることと、出入りの時、左舞は左から右舞は右からと決まつてゐることです。

又、演奏形態も音楽だけの演奏のものを「管絃」、舞を伴ふものを「舞楽」と分けました。このやうに、ほかの国から来た音楽を日本の雅楽としてまとめあげたのが十世紀終りごろになります。このやうな日本の雅楽としての改革が行はれなかつたら、恐らく今の日本の雅楽は無かつたらうと思ひます。

かうして、十一世紀に完成された雅楽は日本独特の音楽として、千年の年月をほとんど変はることなく、現在に伝承されてゐます。それは世界に類を見ない音楽文化財です。そのメロディーやハーモニーは世界中の現代音楽に多大な影響を与へてゐるほど斬新なもので、日本が世界に誇る文化遺産になつてゐます。

#### 四、悠紀・主基の歌舞について

新しい天皇が即位される時、宮中の賢所で亀甲占ひといふ神事を行ひ、その亀裂の入り方

により、皇居より東の地方に悠紀・西の地方に主基を定めます。今回の平成の即位儀礼では悠紀が秋田県、主基が大分県でした。歌人がその地方の風物を詠み込んだ和歌を作り、その歌にその地方の民謡・舞踏を取り入れて雅楽曲を作曲・作舞し、即位礼の饗宴で披露します。「国風歌舞」風の楽舞です。また、悠紀田・主基田と言ふ祭儀用の稲田を作り、収穫した新米を大嘗祭の神事に用ゐる事なども行はれます。

このやうに雅楽は皇室と共に伝へられて来たものです。皇室が衰微した時には雅楽も衰微し、皇室が繁栄した時には雅楽も繁栄しました。かうして雅楽は千二百年間、衰微と繁栄を繰り返しながら今に残されてきたものです。

これが、千二百年間の雅楽の大まかな歴史です。

### 質疑応答

(問) 「雅楽といふのは大自然の声を模倣したもの、あるいは神様の声を表したもので、人間の感情から生まれたものでない」と本に書いてあるのを讀んだ事があります。「人間の感情から生まれた音楽ではない」と言ふ事が私には理解しにくいのですが、それは大陸から伝



はつた雅楽でも、また日本で作られた雅楽でもさう言へるのでせうか。

(答) 神様の声つて知つてゐますか。私は知りません。ウグヒスの声を音楽にする事は写實的にできますが、神の声を音楽にするのは難しい。私にはよく分かりません。ただ神社の祭礼などで、警蹕けいひつといつて神社の扉を開く時などに「オーオー」と声に出すのがあります。あれは神を恐れ敬ふ心が声に出たものと言はれてゐます。雅楽はそれに近いのではないかと思ひます。しかし、神の声を音楽にしたと言ふ事は正直なところありません。さう言つた方が重みがあると言ふ事は言へます。しかし、少なくとも言へる事は雅楽は人間の為に作つた音楽ではないと言ふ事です。人間の為に作つた音楽といふと三味線の曲、箏曲、お能、歌舞伎などの音楽です。だから、人間に切符を売り人間が聴いてその上がりで生活すると言ふ形を取つてゐます。それが普通の音楽です。けれども、雅楽は人間の為に作つた音楽ではありません。平安の昔もお客さんに見せるものではありませんでした。人に見せるやうになつたのは明治になつて洋楽が入り、音楽が洋楽ナイズされた頃からです。雅楽は本来は神に捧げる音楽でした。神の声を表したといふより、神に捧げる目的で作られた音楽であるといふ事です。

(編注・先生にお断りして原稿を歴史仮名遣ひに改めました)



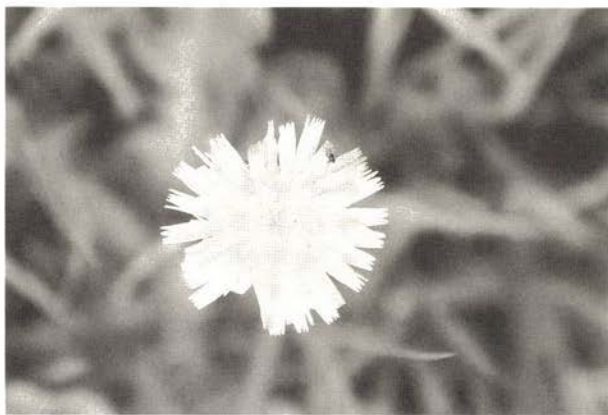
講話

若き友らへ語りかける言葉

——かまどのけぶりほそくとも——

元電源開発(株)環境立地本部本部長代理

長内俊平



不思議なこと

科学の限界

聖徳太子様のお言葉

奥田克巳先生のお教へ

かまどのけぶりほそくとも

## 不思議なこと

二月前ふたのことでした。いつもでしたら行きつけの近くの郵便局に行くのですが、その日は用事があつて街に出かけましたので、ついでにこの合宿の参加費を振込まうと思ひ、その近くの小さな郵便局に入りました。

振込みの手続をお願いして待つてゐますと、受付けの女子従業員の方が「長内先生!!」と呼びます。私はよく考へもせず咄嗟とつさに「僕は兄です」と返事をしました。と申しますのは、私の末すえの弟が永いこと青森商業高校の教諭をして居りましたので、その教へ子が弟によく似た私を弟と間違へて声を懸けて呉れたと思つたからでした。然うしましたら重ねて「長内先生でせう。國文研の合宿の参加費を振込まれるのは長内先生に間違ひがないと思ひました。私は去年、阿蘇の合宿に参加させて戴いた東北女子短大の大柳圭子です。今春短大を卒業して此処に勤めさせて戴いて居ります」と言はれます。

私は本当に驚きました。と申しますのは、昨年こぞの合宿には、姉が危篤になつた為に参加を断念せざるを得なくなり、東北女子大関係の参加者のお世話が出来なくなりましたので、そ

のお詫びを兼ねて合宿地の参加者の皆様に便りを差し上げたのでした。その便りを皆さん大変喜んで呉れて、合宿から帰られた後、東北女子大関係の参加者を代表して心のこもったお礼の便りを頂いたその方だったのです。

私がどんなに嬉しかったか、お分り戴けることと思ひます。

実は、この東北女子短大との附合が始まったこともまた不思議なのです。

それは今から二十三年前の昭和五十三年の天長節（「天皇誕生日」——四月二十九日——今は「みどりの日」）の日のことでした。当日は有志で青森の総鎮守様であられる善知鳥神社の社前に集り、お参りした後ささやかな直会なほらひを致しました。その席上、司会の方が「お一人づ、何か一言言つて下さい」といふことになり、私の番に廻つて参りました。私はその日の朝、神棚の前で拝誦致しました明治天皇御製の感想を大要次の様に申し上げました。

「今朝拝誦致しました御製のなかに「天」と題する

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな（明治三十七年）



といふ御製がございました。この御製は、殆んどの方がお知りの御製でございますが、実はこのあとに

ひさかたのあまつ空にも浮雲のまよはぬ日こそす  
くなかりけれ

といふ御製が続いてゐるのであります。

明治天皇様でさへも、心のなかに浮雲の迷はぬ日は無いとお詠みになられ、だからこそいよいよ澄みわたりたる大空の様な廣い心を持ちたいものだ、と仰せになつてをられるのではないかと拝され、この大み歌は二首合せて拝誦して、いよいよ有難く拝せられる様に思はれるのであります。」

と申し上げましたところ、私のところに、つかつか



と寄つて来て「その御製をこの手帳に書いて下さい」と言はれる方が居つたのであります。

これ以上申し上げる必要はないでせう。この方とは肝胆相照す仲となり、生涯篤い友情で結ばれました。この方こそ当時東北女子短大の學長をしてをられた神守夫先生だつたのです。その先生が私共の営んでゐる合宿教室のことを知り、早速、当時、東京の大學で学んでをられた孫娘さんを合宿に参加させて下さいました。その結果が大変良かったのでせう。翌年から毎年数名の學生さんを合宿に派遣して下さいさることになつたのです。やがて年齢になり、學長を退かれることになりました。その時神先生が「長内さん、よい人を紹介しませう」と仰つて、學長を引継がれた今村城太郎先生を紹介して下さいさつたのでした。

それは弘前城の桜が丁度美しく咲いてゐる時でした。私と家内は今村先生に招かれて、學内を案内して戴いた後、弘前城で御馳走になり、それから今日まで、今村先生が理事長をしてをられる東北女子大、短大、専門學校から、私共の合宿に全幅の信頼を置かれ、毎年数名の學生を派遣して下さいさり、今年も七名の参加者を送つて下さいました。そんなことを申し上げてをりますのは、この世の中にはまことに不思議なことが多いといふことを知つて貰ひたかつたからなのであります。

## 科學の境界

今申し上げた様な不思議なことは皆さんも屹度、經驗なさつてをられませう。私の八十年の人生を振り返つてみますと、眞に不思議の連続だつた様な気が致します。しかしそんな話をしますとなかには「それは偶然だよ」と言つて澄ました顔をしてゐる人が居ります。そのころは「科學が進めば解明出来ないものは無くなるに決つてゐるよ」といふ気分なのでせう。しかし世の中には決して科學では解明出来ない世界があるのです。第一自分は如何して日本人として生れこの父母の子として生れて来たのだらうか。これは永遠の謎でせう。眼は如何して見えるのか、その仕組についてはこと細かに科學的に説明出来ませうが、しからば如何して然うなつてゐるのか、は永遠の謎でせう。

然うした例一つ二つ取つてみただけでもこの世の中には科學では説明出来ぬことが極めて多いことに気付かれることと思ひます。

## 聖徳太子様のお言葉

宮本武藏は『五輪書』<sup>ごりんのかじ</sup>のなかで「観の目つよく、見の目よはく」それが兵法の極意であると言つてをられますが、武藏の言ふ見の目といふのは相手の手足の動きや目の動きなどの表面的な細かな動きを目許<sup>めりど</sup>でみる目であり、観の目といふのは、然うした細かな動きに執<sup>とら</sup>はれず、相手の全体の動きを心でみる目である、と言つてをります。

この見の目、でみるのが実は「自然科学」と言はれるものでせう。自然といふ生きたる全体を部分部分に分断して、これを見の目、でこと細かにみる。見の目の働きを出来るだけ拡大出来る様に顕微鏡や望遠鏡を造り、また頭脳の機能を拡大出来る様に電子計算機などを開発して、我の外にある物を客観的に——自他の二境を分つて——細かく観察し、その中から一定の法則を見つけ出さうとするのが科学と言つていいでせう。

ところが然うした部分、部分の法則をいくら掻き集めて継ぎ足<sup>た</sup>してみても生き、た全体といふものはみえて来ません。「見の目」で見たものをいくら集めても「観の目」で見た生き、た全体像にはなり得ません。生き、た全体は、生き、た全体を我を忘れて惚れ惚れと眺め直観的に

そのいのちを感じ取るしかなないのであります。

即ちみる自分（主体）とみられるもの（客体）の二境を分たぬ一体感のなかに我が身を没し得た時に、神の声と申しますか、如来の囁きとでも申しませうか、然ういふものが静かにきこえて来る、然うした知り方によつてしか感得され得ぬものでありませう。

聖徳太子様は『維摩経義疏』のなかで「自行外化を憶して以て心を調伏すと雖も、若し自他の二境を存して修行せば、則ち修するところ廣からずして、物とその苦樂を同じくすること能はず。所以に勧めて応に著を離るべしと明かすなり」（文殊問疾品——黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』六八頁・他に八三頁及び一五五頁参照——）と言つてをられます。

私はこのみ言葉を、自（主体）と他（客体）を分け隔てる心即ち、自己中心の物の考へ方をしてゐる限り、人々と一体となる道は見出すことは出来ないものであつて、共に是れ凡夫たるの痛感に立つて同じ胞として他人の悲しみ苦しみが、我が悲しみ苦しみとなる様になつて初めて他人と苦樂を共にする同胞生活が実現されるのです、との仰せと仰いでをるのであります。

今朝拝誦致しました、明治天皇の御製に、

しづのをが一人ひきゆくをぐるまの重荷の上につもる雪かな（「車上雪」明治四十年）

とございました。この御姿が、太子の御言葉を体現なさつてをられる御姿と拝され、合掌せしめられたことでございます。

この人々（衆生）に向はれる、自他の二境を分たぬ太子の御姿勢は、そのまま私達の自然に向ふ姿勢の在り方を標して下さつてをられる様に思はれるのであります。

明治天皇は「惜春」と題されて

あかずしてくれゆく春はあひおもふ友にわかるるこことこそすれ（明治四十五年）

とお詠みになられ、また千三百年の昔、山部赤人は

春の野に董採みにと来し吾ぞ野をなつかしみ一夜宿にける（『万葉集』卷八）

と詠んでをります。

これらのみ歌や歌を声に出して朗々と誦してをりますと、自然と一体となつてをられると申しますか、自然の大きな懐ふところに抱かれてゐる世にも平安な世界を思はせられるのであります。そして

ふく風もたえてふけゆくさ夜なかにただひとすぢの水のおとする（「水」明治四十年）

わがこころおよばぬ國のはてまでもよるひる神はまもりますらむ（「神祇」明治三十六年）

の、明治天皇御製を拝誦してをりますと、私達がぐつすり眠つてしまつてゐる眞夜中にも瞬時の間断もなく、我々を温く包んで見守つて下さる神々、自然のいのちの存在に気付かせられ合掌せしめられるのであります。

### 奥田克巳先生のお教へ

三十年程前、この合宿でお話し下さつた奥田克巳先生から「物を知るには三つの知り方が

ある」といふことを教へて戴きました。そのお言葉が心を離れず今日まで折りにふれては考へさせられて参りました。

私の話をよく分つて戴く爲にも、また皆さんが物を考へるときの重要な鍵ともなる様に思ひますので、今、私が至りついてゐるところを掻い摘んで申し上げます。

一つの知り方は「知解」と言はれるものであります。簡単に申し上げますと「頭で知る」といふ知り方です。即ち先程申し上げた見の目から得られる知識の習得です。今日學校で教へられてゐるものは、殆んどこれです。

いま一つの知り方は「体解」と言はれるものです。これは「身体で知る」といふ知り方です。我が身を爪つねて人の痛さを知れ」と諺にもあります様に火傷やけどの痛さは火傷をしてみた人でなければ分からないでせう。今申し上げた「知解」によつて得た知識をいくら掻き集めて説明しても、その痛さは分かつて貰へないでせう。自分の身体で知るしかないのがこの「体解」といふ知り方です。

職人さんの技や芸事やスポーツなどは殆んどこの知り方です。知識的に教へることは殆んど出来ず、お師匠さんをただ懸命に真似て身体で學びとるしかない。然ういふ知り方であります。「孫は目に入れても痛くない程めんこいもんだ」といくら言はれても孫を持つてみな



ければ分かるものではありません。これも「体解」です。

いま一つの知り方は「信解」と言はれるもので簡単に申し上げますと「心で知る、眞心で知る」といふ知り方であります。先程申し上げました「観の目」から生きたる智慧を授かるといふ知り方であります。

この知り方は初めに申し上げました「知解」が頭を使つた意識活動を通じて得られるのに反し、意識活動を全く仲介とせず、宇宙、自然、人生のいのちを直觀的に眞心で感得するといふ知り方であります。

學校へ行く様な風ふうをして欠席ばかりして居た親不孝な息子さんが、或る吹雪の凍こて付く様な寒さの朝、まだ夜も明けぬ暗い台所に立つて、母が自分の爲に弁当を作つて呉れてゐる姿をみて「あ、俺は何といふ親不孝者だつたんだ!! この母上をこんなに悲しませて」と愕然として己が非に気付き、生まれながらの眞心（をさな心）に立返り、その日から愚行をきつぱり止める様になつた、といふ様な知り方を「信解」といふのだと教へられました。

私の体験では、これ迄三つの大きな「信解」を戴きました。二十数年考へ続けて来た大きな疑問が、身体がぶるぶると震へてくる様な異状な感動と共に雲の間から太陽の光がさつと射してくる様に魂のなかにその答へが閃めく様に訪れてくる、然うした体験でした。小さな

「信解」も数多く戴きました。

皆さんも自分では確と気付いてをられなくても「信解」を戴いてゐることが多いのです。崇高なるもの、悠久なるものに対し時感激するといふのもその一つです。感激するといふことは我を忘れて他と一体となつてゐることです。その時心身は統一され生まれながらの眞心に立ち返つてゐるのです。感激して清らかな涙を流すときその涙が眞心を覆つてゐる心の塵を流して呉れてゐるのであります。

ここまで話を致しますと學校で學んで少しは物を知つた、と思つてゐたことは意外と狭い世界だつたんだなあ、国文研で斯うした合宿を營々と続けて來られたもこの爲だつたのだなあとお氣付きの方もをられませうが、いま少しよく分かる様にこの三つの「知り方」の違いの大事などころだけを申し上げませう。

一つは「知解」（知識）は言葉や文章で表現して伝えることが出来ますが、「体解」と「信解」は言葉や文章でうまく表現し伝えることは出来ないといふことであります。ですから「知解」は人に教へることも出来ますし、人から借りて來ることも出来ますが、「体解」と「信解」は人に教へることも借りて來ることも出来ません。自ら心身を勞してひたすら學び、自得するしかない世界であります。

第二の違ひは「知解」の世界は頭で考へる世界ですから抽象概念と理窟が巾をきかせますが、「体解」「信解」の世界にはこの抽象概念や理窟が入り込む余地がないと言ふことであります。

三つ目の違ひは、「知解」即ち知識はいくら増えても、生活態度は一向変らないのみならず、むしろ高慢になつて付き合ひにくくなるのに反し、「体解」「信解」を得た人は、見違へる様に生活態度が変る、即ち非常に慎み深くなるといふことであります。

あまり簡単に申し上げましたので、よくお分かり戴けなかつたかも知れませんが、冒頭に申し上げました不思議な出来事を初めとし、この世の中には私達の頭で考へても——科學が如何に發達しても——全く分からない世界があり、その世界こそ「体解」「信解」によつて齎される世界であり、それが私達に生きる力——元氣——を惠んで呉れ、自分ではそれとは確と氣付かずに發する言葉や行動に自から現はれる、身についた生き方——智慧——を決定し（これが文化と言はれるものです）、「知解」といふ怪物を生みの親とする、使ひ方によつては凶器ともなり得る文明——物質文明を初めとし、人權、自由、平等、平和、民主主義などを代表とする文明思想——をして処を得しめる本の力であることを信知らしめられるのであります。

かまどのけぶりほそくとも

我が國の現状は御承知の様に、祖先様方がどんなに心配してをられることだらうと思はれますが、この我が祖国日本を立て直すには、私達國民一人一人が、何故然うなつたかの本當の原因に氣付き、今迄申し上げて参りました「体解」「信解」を中核とする、まことの日本人としての智慧——文化力——を養ふ努力をすることにあり、その要は、「慎しみの心」を取り戻すことにある様に思はれるのであります。

食糧の自給率が僅か四十%にも満たぬ國でありながら祖先達が營々として培ひ保つて来た美田を荒地（休耕地）とし、世界中から食糧を買ひ漁り、而もそれを惜し気もなく食べ残して捨てて仕舞ふ。この「慎しみ」を缺いた生活、世界には飢餓に苦しんでゐる方達が数億にも上ると言はれてゐる中<sup>なか</sup>にあつて、それが人として爲すべきことでありませうか。

また一滴の油も産出出来ない國でありながら、二人に一台もの車を持つてこの狭い日本を所狭しと乗り廻し、三年程前來日したモンゴルの歌姫が「モンゴルでは星は大空に輝いてゐるのに東京では地面に輝いてゐる」と嘆ぜしめる様な晝をもあざむく迄のネオンを輝かせた

りしてゐる現状は、人としての慎しみを缺いた亡國の民のやることではないでせうか。

中學時代に學んだ『平家物語』の冒頭の文に「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。驕れる者久しからず、たゞ春の夜の夢の如し……」とありましたが、世界の大國ロシアと戦をせざるを得なくなつた時、明治天皇様は

民草のうへやすかれといのる世に思はぬことのおこりけるかな（「述懷」明治三十七年）

とお詠みなされ、ご安眠出来ない永い日々が続いたと聞いてをりますが、その、明治天皇様が同じ年に

國民のかまどのけぶりほそくともながく久しくたてつづけなむ（「民戸煙」くじたまみ）

ともお詠みになつていらつしやるのであります。そしてその大御心にお応へする如く新渡戸稲造先生は（明治三十二年に）『武士道』のなかで「……全國を外國貿易に開放したる時、生活の各方面に最新の改良を輸入したる時、又西洋の政治及び科學を學び始めた時に於て、吾

人の指導的原動力は物、資、資源の開發や富の増加ではなかつた。況んや西洋の習慣の盲目的な模倣ではなかつたのである。……劣等國と見下されることを忍び得ずとする名譽の感覺——これが最も強き動機であつた。」（同書二二八―九頁）と述べてをられます様に、經濟大國などにならうとすることは断じて我が国の生き方（文化）ではないのであります。

私のくに津輕の白神山地で「マタギ」をしてゐる工藤光治さん（五八歳）の話がこの間、新聞に載つてをりました。「マタギつて何ですか」といふ問に「山で暮らし獲物を神様からの授かりものとして粗末にしない人を言ひます」と答へられ、「一番悲しいことは何ですか」といふ質問に対し「自分が生きてゆく爲に殺してしまふ動物の死に直面するときです」と言はれた言葉が心に深く残りました。

自然といふ我々人間の限りある智を以つては到底計り知ることの出来ない靈妙不可思議な存在に対する畏敬の念と申しますか、慎しみの心と申しますか、然う言ふものが伝はつて来て襟を正さしめられるのであります。

聖徳太子様は「『少欲知足』とは分に過ぎざるを言ふ」（維摩經義疏菩薩行品、黒上先生の御本一〇三頁）と仰言てをられるのであります。この御言葉に仰がれます様に「人としての分を守る」といふ慎しみのところが、我が祖國日本の肇國以来の我々日本人の生き方（文化）



の根底をなして来たものと信解らしめられるのであります。

この慎しみの心を取り戻すために、私達一人一人がそれぞれ自分の置かれた立場立場に於て自分の生活に即して自分の出来ることをコツコツと実行してゆくことが、今切に求められてゐると思はれるのであります。

『古事記』を讀んで、天照大神様を尊い懐かしいお方だとお慕ひする心が生じたならば、おん身づから田を耕し機を織つてをられたみ姿を眞似て、田作りまでは出来ないとしてもせめて子供さんや旦那さんの着る物一つでも自分の手で縫つてあげて下さい。

御近所の方々や道で会ふ子供さん達に「今日は」「お早うございます」とよい声を懸け合ひませう。

お友達と和歌一首添へて便りを出し合ひませう。

「勿体ないことです」「お蔭様で」「さやうなら」「有難うございます」を初め、おくとこばを中心とする美しい大和言葉を皆さんと共に残して参りませう。「道は近きにあり」であります。

御静聴有難うございました。お帰りになつたら御両親、御兄弟そしておぢい様おばあ様に呉々もよろしくお伝へ下さい。

(文中の傍点は筆者が勝手に付したものです)





体験発表

沖縄について思ふこと

熊本製粉(株)住宅事業本部

吉村 浩之





私も二十年程前、今日の皆さんと同じ様に、大学の一年生の時にこの夏の合宿教室に参加致しました。その後大学に帰つてからも合宿を機縁として知り合つた先生、先輩、又新しく参加してくる後輩諸君と学生生活を共に致しました。寢食を共にし、本を読み、夜中まで酒を片手に議論を繰返す学生生活でしたが、その様な生活の中でゆつくりと日本の学問の伝統と自己の人生観、又、祖国へのつながりを考へる時間を過ごす事が出来ました。

私は、工業系の単科大学の学生でしたが、私の学生生活はこの合宿に始まりこの合宿に終はつたと言つても過言では有りません。それは、十五年後の今日も、日々の社会生活、家庭生活の中でのものの考へ方、様々な行動、判断の基礎となつてゐます。

### 自衛隊での出来事

この二、三ヶ月、沖縄ではアメリカ兵の女性暴行事件に端を發した、様々な沖縄県民とのトラブルが新聞に取り沙汰されてゐます。私は、この事件のその後の対応をテレビや新聞で見えてゐますと、十五年程前に経験したある事を思ひ出すのです。

私は、大学を卒業してから、兵役に就くつもりで二年間陸上自衛隊に入隊しました。入隊

した部隊は、鹿児島県国分市に有る三二一共通教育中隊といふ部隊でした。入隊した新隊員は、この共通教育中隊で三ヶ月間基礎的な訓練を受けた後、北は北海道から南は沖縄までそれぞれの任地の部隊に配属されます。

入隊した同期の隊員は殆どがどこにでもゐる青年諸君で、特別に愛国心や国防意識を持つて入隊してきた隊員では有りませんでした。中隊では、職種と任地の希望アンケートが何回か取られました。やがて、訓練の課程も終はりに近づゐたある日曜日の午後、私は、営内班のベッドで横になり休んでをりますと、外出から帰つた一人の隊員が回りの者を集めて何やら話してをります。自然私の耳にも話し声が聞こへてきました。

その隊員は、外出許可をもらひ国分市内に行き、途中散髪をしようと床屋に入つたさうです。国分の町は、昔から陸軍の基地があり町全体が自衛隊に対して好意的な町でした。隊員の制服姿に町の人もなれ親しんでゐました。その床屋の主人も国分駐屯地の新隊員である事は、直ぐに察したやうです。来月には、新しい任地に赴任することも知つてゐたのでせう。隊員に向かつてこの様に話しかけたさうです。「任地に沖縄だけは、希望しない方が良いでしょう。沖縄は自衛隊に対して好意的ではない。自衛隊員と言ふだけで、成人式に出る事は出来ないし、様々な嫌がらせを受ける事になる」と。床屋の主人にとつては、親切心からのアドバイス



スのつもりだったのでせう。ところがこの隊員は、この話に大変驚いたのでした。皆、自衛隊に対しての政治的問題などに無関心な生活を送ってきたものばかりです。この隊員は、中隊に帰りその事を皆に話したのでした。そして聞いた隊員も同様に驚いたのです。その話は、瞬く間に広まりました。中隊には、沖縄出身の隊員も三人ゐたのですが、彼等もその事を否定はしませんでした。一面事実だったからです。

沖縄は、皆の希望する任地の意識の中からまづ最初に外されました。もう誰も沖縄を希望する隊員はみませんでした。幸か不幸か沖縄からの派遣人事の要請はなく、約三五名の隊員は、その後それぞれの任地に赴任して行きました。しかしあの日曜日の午後、中隊に広がったあの空気を忘れることは出来ま

せん。

アメリカ兵の男性も女性も半分以上は、一般の兵士で二、三年で軍隊を除隊し、一般の市民や学生に戻ります。私には、同じやうな空気が今、彼等の中に生まれてゐるのではないかと危惧するのです。

反戦平和をスローガンに掲げて様々な運動がなされてゐます。彼等は、それで目的を果たし得ると思つてゐるのでせうか。私には、事は、その様に単純には見えないのです。事件の被害者の悲しみや憎しみを、高々と手を掲げて叫ぶ人々は、人と人との心の繋がりをさらに絶たうとしてゐる様にしか思へないのです。私は、この様な光景を目にすると、逆に人と人との繋がりを繋ぎがうとする作業を行ひたい衝動に駆られるのです。

### 島田知事の事

そこで、一人の県知事の話しを致します。その人は、沖縄最後の県知事と言はれ、大東亜戦争末期の昭和二十年、沖縄での戦ひが始まる僅か二ヶ月前に知事として赴任した、島田あきら勲と言ふ人です。



島田知事は、明治三十四年兵庫県の西須摩村に生まれ、京都の三高から東大を出て内務省に勤務します。以前この合宿に講師としてお越し賜った詩人の浅野晃先生は、幼少の頃からのご友人で、追悼文に次のやうに書いてをられます。「(島田は)内務省に入ったが、仲間出世は一番遅かつた。同期の知事が何人も出てゐるのに未だ地方の部長を歴任してゐた。それは、彼が信念に厚く、節義を重んじ、容易に附和する事が無かつたからである。ところが戦争も愈々断末魔に迫り込まれて、沖繩の防衛が焦眉の急になつたとき、誰を知事に起用するかのだになつて島田以外にないといふことになつた」。

沖繩は、昭和十九年十月十日にアメリカ軍の大空襲を受けます。そして愈々沖繩上陸がまぢかに迫つてゐる事を感じ取ります。

ところが、このころ沖繩では、郷土を見捨てて逃亡する公務員が相次ぎます。本土への疎開者の慰問として派遣された学校長や県議が出張先から雲隠れしたり、県の内政部長が東京の会議に出席後行方不明になつたりします。又報道機関でも、同盟通信の支局長が本土に帰つてしまひます。このことは、当時沖繩の新聞でも大きく取り上げられた程でした。その様な中、疎開事業も遅れ、県に対する軍の不信も深刻な問題へと発展して行きます。そして終に、前任の県知事の更迭が行はれ、島田知事に白羽の矢が立つたのです。

その時の模様は、島田家の運命の一日として、次の様に記録されてゐます。

昭和二十年一月十一日、大阪府の内政部長（副知事のやうな立場）だつた当時の島田知事はいつものやうに家族四人で朝食を摂つてゐました。そこに、隣の知事官舎から話しがあるから来て欲しいとの電話があつたさうです。島田知事はやや長い時間の後戻つてきました。不審に思ひ夫人の美喜子さんが質すと、「本省から、沖繩県知事の内命を聞かされた」と答へました。美喜子さんは一瞬全身の血が音をたてて退くのを感じたといふことです。そしてお受けになつたのか質すと、島田知事は静かに「もちろん受けてきた」と答へたさうです。さすがの夫人も我を忘れて、「それで私達はどうなるのか、何も悪いことをしてゐないのに沖繩にやられるなんて、そんな内務省なら辞めてしまひませう」と嘆いたと言はれてゐます。それに対して島田知事は、「どうしても誰かが行かなければならないとすれば、言はれた俺が断る手は無いのではないか。これが若者であれば召集で否応なしに行かなければならない。私が固持できる自由をいいことに断つたと成れば、卑怯者として外も歩けなくなる」と答へたさうです。

又、島田知事が沖繩知事を引き受けた話しは、各方面で話題になり、友人の中には断れるものを、早まつた事をしたと残念がつた者もゐたといふことですが、しかし、島田知事は、

「俺が行かなければだれかが行かなければ成らないだらう。俺は死にたくないから誰かに行つてくれとは言へないじゃないか」と言下に答へたと言はれてゐます。「さすが、島田だ」と称へる人もゐましたが、私情としては忍びないと言ふのが偽らざる声であつたと記録されてゐます。

昭和二十年一月三十一日、島田知事は沖縄に赴任します。アメリカ軍の上陸は、四月一日ですから僅か二ヶ月前です。

しかし、島田知事は、その間目覚ましい活躍を致します。まづ、空襲を恐れて県庁舎を捨てて分散してゐた職員を県庁に集結させます。そして、食料の確保と老幼婦女子の北部山岳地帯への避難を推し進めます。特に食料の確保には、島田知事自身で当時敵機の跳梁で危険とされた台湾に飛び大量の米を買ひつけます。又、専売局や税務署を訪問して煙草や酒の増配を要請します。警察部長には今後、風紀の取締を止めるやう指示し、村芝居の復活を勧めます。戦火を目前にしてせめて一時の間だけでも県民に楽しみや喜びをとらせておきたいとの心づかひではなかつたのかと思ひます。

アメリカ軍の上陸後は、軍司令部のある首里に県庁を移し、戦時下の行政を指導します。戦況がどうであらうと行政の重点は県民を飢ゑさせない事との信念の下、特に食料の夜間増

産、即ち芋の夜間植付けを勧めます。農民は砲火の轟くなか、一晚中落下する照明弾に照らされて、刈入や植付けの農作業を続けたさうです。終戦後その時植えた作物が食糧難の時代に随分助かつたといふ記録を読んだ事があります。

又、前線から避難してくる避難民は、村役場と地元部落の申し合せでどの畑からも自由に作物をとつて食べて良いことになつたさうです。「避難民は、わづかの食料しかもつてゐなかつたので、この様な申し合せがなかつたならば飢ゑにかられた避難民は、生きんが為に盗みといふ暗い気持ちの味はひながら人目をはばかつて作物をとつたらう。その時の有りがたさは今も身にしみて忘れられません」と生き残つた県庁職員の方が手記に書いてをられました。これも島田知事の指示が見事に生かされた成果だと思ひます。

そして、首里へのアメリカ軍の接近といふ緊迫した状況の中で県庁も軍と共に南部への撤退を行います。撤退後も島田知事と行動を共にしてゐた毎日新聞那覇支局長の野村勇三氏は暗く狭い壕の中で膝を抱いて壁に寄りかかつてゐた島田知事に小声で率直に投降を勧めたさうです。すると島田知事はきつと顔を上げて「君、一県の長官として、僕が生きて帰るわけにいくかね。沖繩の人がどれだけ死んだか知つてゐるだらう」と答へられたさうです。

六月十八日、愈々最後の時を迎へた島田知事は、県庁の職員を解散し、摩文仁の軍司令部

に牛島軍司令官を尋ねます。この牛島満中将と言ふ方も立派な方で、鹿児島出身ですが、記録を読むとその姿は、西南戦争での西郷さんの様な方でした。そして、六月二十三日、牛島軍司令官の後を追つて海に入って自害されたのです。

悲劇的であつた沖繩での戦ひに、官と軍のトップのお二方がこの様な立派な方々で有つたことは、せめてもの救ひでした。沖繩での戦ひの記録や体験談を読むと、人間の崇高さと美しさ、又愚さと醜さが混在してゐます。戦争は、悲惨であり人間の醜さや愚かさが記録の随所に現はれます。しかし、私達民族の記録として、その様な人の心の荒れた戦場であればなほさらの事、その記録の最後には、私達の祖先の崇高さと美しさが記録されなければなりません。さうでなければ、その記録を読む私達は、救はれないと思ふのです。又、美しい話しや記録は、たくさん眠つてゐます。皆が取り上げようとしないだけです。もし、人の世が愚かさや醜さだけの世界であるならば、もうこの世は住むに甲斐なき世の中だと思ふのです。

終りに

島田知事は、この様な話をよくされたさうです。「僕は、物を失ふ事はこわくない。心を

失ふ事の方がこわいのです」と。

現在沖縄には、近代的なビルや住宅が立ち並び、戦争の面影は、殆ど見る事はできません。破壊された建物は再建され、戦火で焼けた野山には、何もなかつたかのように草木が生ひ茂つてゐます。しかし、私達は心を失つてしまつたやうです。失つたものは、取り返さなくてはなりません。その力は、残された記録や手記に込められた言葉を読み取る私達の心の内にあるのです。

体験発表

文化の伝達者としての女性

主 婦

工 藤 千代子







ただいまご紹介いただきました工藤と申します。私は会社員の主人と結婚致しまして、専業主婦として、小学五年、三年、幼稚園の三人の子どもを育ててをります。

私が十九年前、初めてこの合宿教室に参加した動機は、と申しますと、中学生の時、先この合宿に参加してゐました兄の本棚にあつた国文研合宿教室の感想文集を開いたところ、二十四才の若さでフィリピンで戦死された茶谷武さん（夜久正雄先生の教へ子）の遺書が紹介されてをりました。それを拝見して大変心動かされたからでした。

茶谷さんの遺書の一節には「私の肉体はここで朽ちるとも私達の後を私達の屍を乗り越えて私達を礎として立ち上がつてくる第二の国民のことを思へば、またこれらの人々の中に私達の赤き血潮が受け継がれてゐると思へば決して私達の死もなげくにはあたらなと思ひます」とありました。

この第二の国民とは今、生きてゐる私達そのものです。遠い昔の出来事であつたと思はれてゐたあの大東亜戦争が、その時に青春のすべてをかけて肅々と戦地に赴いた人々の言葉を知つて初めて身近なものに感じられたのでした。この合宿では、学校では得られない生きる上で核になるものを得られるのではないか、といふ思ひで参加しました。

数年後、私は母親となり、この合宿で学んだ者として、日本人として誇りを持つて生きる日々感謝して暮らしてきました。けれども、世の中の流れは逆で、長谷川三千子先生のお言葉のやうに「日本人としての背骨が解けてしまった」のではないかと痛切に思ふことが多々あります。中学生による児童殺傷事件（神戸）をはじめ次々に青少年による凶悪な犯罪が起きてゐますが、先ほどご紹介した茶谷武さんのやうに五十数年前には、家族や国を守る為にわが身も惜しまず出征して行つた若者がゐました。でも、今、状況は百八十度変化して、自分の快樂の為に人を殺す若者が登場してしまひ、戦後の心の荒廃も行き着くところまできたのではないか、と思ひます。

### 低学年にも拡がる学級崩壊

神戸の事件ほどでないにしても、身近に学級崩壊があり、不登校の子があり、虐待があり、これらを私自身が実際に目にしてきました。

息子が入学した学校は日本一のマンモス校で当時は児童数千五百人を超えつつあり、小さな学校よりも問題がそれだけ多く、一年生でありながら早くも隣のクラスが崩壊に近いかた



ちになつてゐました。

今年も、すでに一年生で崩壊した学級があり、勝手に校内を歩き回る何名かの子供達を連れ戻さうと指導した先生が腕を骨折して入院されました。先生方お一人お一人が真心のこもつた指導を積み重ねてもどうにもならない時代を迎へてゐることを痛切に感じます。幸ひうちの子ども達はまだ経験がないのですが、学級崩壊は毎年どこかのクラスでおきてゐます。

### 虐待を受ける子ども

また、息子と同学年の男子に、虐待を受けてゐる、いつも顔が赤くボールのやうに膨らんでゐる子がゐました。暴力が徐々にエスカレートしてくのか、足

にギブスをはめてゐたこともありました。母子家庭といふことで、どうやら母親に暴力を受けてゐるのでは、と噂になつてゐました。その頃は児童虐待防止法施行前でしたし、その子がいきなり周りの子に暴力をふるふので、先生も私達親も対処に困りました。転任されてきた先生が事情がわからずに「その顔はどうしたの」と聞くと、その子は「生まれつきです」と答へたと聞き、やりきれない思ひが致しました。今、高学年になりましたが、今だに急に人の首をしめたり暴力をふるふさうです。先生が「何故そんなことをするの」と詰問すると「自分でもとめられないんだ」と答へたと聞きました。

最も愛されたいはずの親の手によつて小さな命が絶たれる事件はマスコミで頻繁に報じられてゐます。

### 不登校の子

不登校も私にとつてはテレビの中の話ではありません。息子の友達に不登校児がゐます。その母親は色々な教育評論家の講演を聞き歩き、結局は「学校に行かない自由がある」といふ結論に達したやうで、そのお子さんは今フリースクールに通つてゐます。

戦後の教育は「大人と子どもが平等」で「先生も生徒も親も平等」とうたつてきました。その空気の中で、先生のおつしやることの中で聞きたいことだけ聞き、聞きたくないことは聞かない、といふ新しい子ども達が育ち、学級も崩壊し、学校へ行かない自由を主張する新しい子どもが登場したやうに感じます。

### 子育ての中で心がけたこと

私が子育ての中で気をつけたことは、今日嫌なことがあつても、明日また学校へ行かれるやうに、いつでも子供が何か話したい時に、待たせないやうにしたことです。また、どこに出かける用事があつても、子どもが帰る瞬間には必ず家にゐる、といふ小さなことを積み重ね、家庭を護つてきました。

でも他の母親の中には「私が働かなければ食べていけない」といふ方もあるのですが、高級車を持つてゐたり、無理して家を買つたり、物質的な豊かさを追ひ続け、母親が働きに出なければならぬ状況を自ら作り出してゐる、と感じることもあります。

高学年になりますと、クラスの連絡網がようやく夜十時になつてまはつた、等と聞くと

「夜十時まで子どもだけで留守番してゐるのかしら」と心配になります。

学校や地域で問題行動を起こす子どもは、問題のある家庭がある、または、親が子供ときちんと向き合つてゐない家庭があるのです。子どもが小学校に入学したら働きたいというお母さんが私の周りにも多くゐます。私は外で働くことを批判してゐるのではなく外で働くことだけに価値があるといふ風潮が間違つてゐるのではないか、と感じてゐます。

### 生活の便利さの為に子供達を犠牲にする「夫婦別姓」法案

今、政府の中で「夫婦別姓」の導入を図つたり、「扶養者控除撤廃」で専業主婦への優遇をやめて外に働きに出す、といふ動きがあります。「別姓」の導入は、結婚して姓が変はる仕事上の不便さを解消しようといふのですが、本当の狙ひは違ひます。

「夫婦別姓」を推進する人の中に参議院議員であり、法政大学教授の田嶋陽子氏がゐます。この方ははつきりと「夫婦別姓は個人主義社会を実現する為の一里塚なのだ」と発言してゐます。まづ、女性が自分の名前を持つ、その上で結婚制度を廃止し、家庭を崩壊させ、個人主義社会を実現する、といふのが推進する人々の本当の狙ひです。「扶養者控除撤廃」も、

外で働くことだけに価値をおいた発想です。けれど、高齢者のお世話をしたり、地域の子どもに危険がせまつた時に逃げ込める「子供一〇番の家」も、いつもその家に主婦がゐるからこそ、出来る無償の行為なのです。世の中には、お金にならなくても大切な仕事がたくさんあります。それを支へてゐる主婦が皆働きに出てしまへば、子供達はどのようなのでせうか。先ほどからお話したやうに、こども達の世界は、まだ解決できてゐない沢山の問題を抱えてゐます。私達子供が一番近くにゐる者として夫婦別姓に反対する声を上げたいと、友人達と『ちょっとまって夫婦別姓』といふ本を出版しました。

推進派の人達から見ると私達は大変遅れた考へ方の持ち主で、自分達は進歩した知識人、といふのが本音でせう。私達は、推進派のあなたがたの目指す社会は「進歩なんかじやありません、荒廃した社会なのですよ」といふ母親達の思ひをかたちにしたと出版しました。

「女性は文化の伝達者である」

最後に入江美季さんといふ友人から届いた手紙をご紹介させていただきたいと思ひます。入江さんは、横浜で「元氣が出る歴史人物講座」を主催する一方、外資系の銀行で総合職と



して活躍されてきました。昨年（平成十二年）の美季さんが三十五才で結婚した時には、海外のスタッフから「美季さんと仕事が出来るとは私の特権であり誇りです」と賞賛されるほど有能な女性でした。その美季さんに初めて赤ちゃんが誕生し、会社からは「週三日でもよいから働いてほしい」と再三頼まれました。

「週三日」といふお話しからさらに、「週一日でもよいから」といはれ、さらには「子供が数年で幼稚園に入ったら、その後はひとりの時間をどうするのか」とまで聞かれたさうですが、逆に「いつか親から子どもが離れていくのなら、今、一緒にみたいと思ひます」とお答へし、結局十二月末で退社となりました。

この不況にあつて乳飲み子を育ててゐる女性に週三日でも、否、週一日でもよいから会社を辞めないでほしい、と請はれる。先ほど、夫婦別姓推進派の主張のひとつに「結婚して姓が変はると仕事上不都合が生じる」といふことがあるとお話ししましたが、社会といふものは「名前」ではなくその人の「実績」で評価する、といふことはこの美季さんの例でも明らかです。

その美季さんから届いたお便りには、会社勤めとは次元を異にする母親としての喜びと決意が次のやうに綴られてありました。



赤ちゃんが授かって尊い命が宿ることにしみじみと感動する幸せな思い。

赤ちゃんが誕生してからは、泣いたら抱きしめ、共に笑うことの素晴らしい毎日です。

家事もきちんと一人で手がけることは本当に素晴らしい能力がないとつとまりませんし、これに加えて育児をしている女性は人材育成という大仕事をしているわけです。

生活と人生のトータルコーディネーターであり、マネジメントする主婦をあらためて深く尊敬しました。

私は工藤さんや先輩のお母様方とおつきあいの中から「健全な子供を世に送り出す」ことは大きな社会貢献であり、会社のプロジェクトとは比べられないロマンとやりがいがある、と思います。人間の持つ愛情のうち、もっとも深いものは相手の見返りを期待しない無私の愛であり、それは母親が子供に注ぐ愛情と同じです。今私とその愛情を注ぐ立場にいると思うとうれしくなります。

私は母親が外で働くことは決して悪いことだとは思いませんが、それには「子供の心を育む」ということがしっかりできることが条件、と思います。今まで先輩のお母様と話し、子供の成長を待ってあげられること、子供が必要としているときには待たせないこと。

子育てには「時間」がとても大切な要素だと感じました。働きながら子育てをしているお母さんは、職場における立場や責任から生ずる時間のしがらみから、この時間のやりくり  
に苦闘しなければなりません。「第一にすべきものは何なのか」を考えると子供に負担を  
かけないという覚悟、愛情、知恵、体力が整わなければ、子供が大きくなるまで、外で働  
きにゆくのは待つべきだと思います。

私を必要としている家族は私にとって一番のものであり、今までのキャリアから得た力や  
知恵を別のかたちで生かす時なのだ、と思いました。

以上が手紙の内容です。

この入江美季さんも私も、日本の心を学ぶ中で励みとしてきたのは「女性は文化の伝達者  
である」といふ言葉です。祖先から受け継いできた伝統や文化を、子供たちに伝えていく使  
命が私達母親にはある。その使命を全力で引き受けて子供達を育てていく努力を続けていき  
たいと思ひます。

ご静聴有難うございました。

短歌入門

短歌創作導入講義

——自分の思ひを短歌で表現する——

羽後信用金庫川口支店支店長代理

須田清文



- 一、短歌創作にどう取り組めば良いのか
- 二、短歌の基本は何か
  - ① 一首一文
  - ② 文語表現
  - ③ 字余りと字足らず
  - ④ 書き方と詠み方
- 三、実際に短歌を創作する手順
- 四、連作短歌
- 五、短歌創作と相互批評
- 六、明治天皇御製拝誦

一、短歌創作にどう取り組みれば良いのか

この合宿教室が終はりましても、皆様が、生涯にわたつて短歌創作に取り組まれることを願ひつつお話しをして行きたいと思ひます。

私をはじめ短歌を作りましたのは、第十九回の合宿教室（九州・霧島）に参加致しました大学一年の時でした。

山頂でかわききりたるのどにしむはじめて買ひし水のうまさよ

高千穂の峯の山頂で、かわききつたのどにしみたはじめて買ったコップ一杯の水のおいしかったことが、二十七年たつた今も思ひ出されます。短歌は、ひとつの記念にもなるのです。では、次の五七五七七はどうでせう。

六時起床七時に朝食十二時に昼めしたべて今は二時なり

身長は百七十センチ体重は八十三キロ便通良好

例として無理に作ってみました。これらは短歌とは申しませんが、自分自身の感動が欠如してゐる単なる言葉の羅列だからです。頭の中だけで理的に考へたもの、単なる知識、理屈、概念を五七五七七にしても短歌とはならないのです。

## 二、短歌の基本は何か

一昨年（平成十一年）の富士合宿（第四十四回）で、レクレーションの時のことを詠んだある学生の短歌があります。その際に行はれた折田豊生先生の「創作短歌全体批評」（『日本への回帰』第三十五集）に触れながら短歌の基本について、まづお話しをしたいと思います。

A バスケット走つて飛んで汗だくだ肌をたたけばしぶきもはねる

B バスケットで走つて飛んで汗だくの肌をたたけばしぶきもはねる



レクレーションの折に

C 走り飛びバスケットボールに興じたり汗の吹き  
出で飛び散るまでに

① 一首一文

Aは「汗だくだ」で切れてをります。第三句（上の句）で切れて一首が二文になつてゐます。「腰折れ」といはれてをります。一首が途中で切れることは、精神が分裂することにもつながります。

BとAの違いは、一句目に「で」を入れたことと、三句目の「だ」を「の」に直したことの二点です。

「の」の一字で一首は一文となり統一されました。また、短歌を作る時には「てにをは」を自分の心にとがねながら正確につけていく事が大切です。折田

先生がこの二文字を直されたことにより、Aの短歌は一首一文のすつきりとした姿になりました。

## ②文語表現

折田先生は、「口語はどうしても余韻にかけるため、軽い調子の歌になつてしまふ」と言はれて、次の様に述べられてをられます。

「文語が分かると昔の歌や文章が読めます。それはすなはち、山口先生が合宿導入講義で指摘なさつた『歴史に一步を踏み入れる』ことに他ならないのです」

その山口秀範先生が「合宿教室の目指すもの」と題してなされた一昨年の合宿教室の導入講義を見てみませう。そこには次のやうな一節があります。

「五七五七七といふ定型の中で、日本人は千年以上も前から、自分の気持ちを言葉に託するといふ作業を連綿と続けてきてをります。その伝統の流れに、皆さんも歌を作ることにより一步足を踏み入れて下さい」

短歌創作が、連綿たる日本の歴史、伝統につながる道である、との重要な御指摘であると思ひます。



Bの短歌は「レクレーションの折に」といふ詞書ことばがきが添へられ、文語表現に直されてCの表現となりました。「汗の吹き出で飛び散るまでに走り飛びバスケットボールに興じたり」を、五七五七七の三十一音数律の短歌の定型に整へて、倒置法の、一首一文のリズムの良い短歌となりました。AからBへ、BからCへと表現が變つて行きましたが、どうでせうか。流れる汗を拭うともせずボールを追ひかける光景が一層はつきりと伝はつてくるやうに思はれます。

### ③字余りと字足らず

発表をせねばと心あせれどもまとまらぬをもどかしく思う

この学生の短歌は、三十一音にはなつてゐますが、五七五六八と定型がくづれてをります。折田先生は、「発表」をもつと具体的な表現に變へる（たとへば「発言」に）ことと、「思う」を文語の「思ふ」に訂正することと、もうひとつ「まとまらぬを」が字足らずなので「まとまらざるを」とすれば定型のリズムになると言はれてをります。字足らずになりますと不安定でリズムが良くありません。

どうか短歌は声に出しながらお詠み下さい。自分の心のリズムと表現した短歌のリズムがピッタリとしてゐるかどうかを確認できます。そして、五七五七七になるやうに言葉をお選び下さい。どうしてもそれにあてはまらぬやうなふれる思ひがあれば字余りの表現になつてもかまひませんが、字足らずでは困りますので注意しませう。

#### ④書き方と詠み方

短歌を書く時には、縦に一行に文字間隔を空けずに書きます。一行に書ききれない場合は、書ききれなくなつた文字から二行目に頭をそろへて書きます。詠む時は、一息で詠みませう。いづれも一首一文の原則を重んじるためです。こころの波動と言葉の調べの統一、一致へと通じていくものと思ひます。

### 三、実際に短歌を創作する手順

題材は何でもかまひません。正確に具体的に自分の思ひを見つめることが大切です。最初に申しましたやうに、理屈や概念や頭の中だけで考へたことは排除致しませう。

私は大学時代より夜久正雄先生（『短歌のすすめ』の著者のお一人、現在、亜細亜大学名誉教授）の教へを仰いでまゐりました。先生の歌集『いのちありて』の中から一首、はじめて短歌創作に取り組む方に是非御紹介したい短歌があります。昭和三十四年五月十六日にお作りになられた「国民体操祭を見る」といふ詞書の連作十一首中の一首です。小学生の御長男、御長女の入場行進のさまなどが詠まれてをりますが、その中の女子体操についての短歌です。

しかしがにうつくしきかな乙女らが太陽に観衆にさらす太腿

実におほらかで、大胆で、明るくさはやかな私の大好きな短歌です。健康な躍動する乙女らの太腿が輝やくばかりに表現されてをります（「しかしがに」は「さすがに」の意味です）。

自分の感動したその揺れ動く心を見つめて、その心のままを具体的な言葉で五七五七七に表現して行きませう。言葉を選びながら心を集中して一首一文の短歌の形式に定着させていくのです。

夜久先生が昭和六十年一月、宮中の歌会始で預選の榮に浴された時の短歌を御紹介致します。御題は「旅」です。

旅遠くルンピニの野に行き暮れて橋のたもとに螢飛ぶ見き

ルンピニは、お釈迦様生誕の地です。橋のたもとに飛ぶ螢に先生はいかばかり心をゆさぶられたのでせうか。二句目までののびやかな調べは「行き暮れて」と急速に焦点が絞ほられ景観も明から暗へと移り「橋のたもとに螢飛ぶ見き」と、澄みきつた時間の流れの中に飛ぶ螢の様子も言葉のリズムとともに感じられるやうな短歌です。

先生がルンピニを訪れたのは昭和五十一年三月二十二日のことでした。その時の連作短歌の中に次の二首があります。

ゆき暮れてバス降り立てば思ひきや闇の川べにはたるとぶ見ゆ  
遠く来てタライの荒野の夜の暗にいきづく螢のひをながめけり

次は、昭和五十七年の歌会始への先生の詠進歌です。御題は「橋」です。

ルンビニの荒野のはてに行き暮れてほたるを見たりき橋のたもとに

螢を見た時の感動は、先生の心の中に今も動いてやまず生きてゐるのだと思ひます。実際の経験を短歌に表現してふたたび経験する。そして、「橋」「旅」といふ御題に思ひを致しながら自分の心の中を見つめてゐると、その経験（感動）がまた蘇へり短歌が生まれる。実に生き生きとした心の世界がここに実現され、ますます広がって行くやうに感じられます。

#### 四、連作短歌

短歌は、一首一文で焦点を絞ることが大切です。あれもこれも一首にまとめることは避けなければなりません。深い感動、あふれ出るやうな思ひは、短歌の生まれる元です。それを自分の心に照らし合せながら短歌に表現して行きますと、自然に一首から次の一首へとつながって行きます。一首一文でその時の感動をひとつづつ短歌創作して行きますと、数首、またそれ以上の短歌が生まれます。これが連作短歌です。次に若い会員の澤部花子さんが御自分の結婚の際に御両親と二人の妹さんのことをお詠みなつた連作短歌を御紹介します（澤

部通信』から)。

結婚式の披露宴にて詠みし歌

父君へ

自らの信ずる道に誇りもちひたむきに生きます父のみ姿  
精一杯生きる姿勢を示し給ひぬときに厳しくときに優しく  
いつしかに増えし白髪に父君のご苦労偲ばれ胸の痛みぬ  
白き髪増えれど常に将来の夢を語ります父君若し

母君へ

いつまでも変わらず強く愛らしき母君のごと我も生きたし  
何事のありても常に前向きに日々を楽ししみ生き給ふ母  
母として妻としてまたお仕事につとめます母の輝くみ顔

園子へ

幼き頃つねに我がそば離れざる寂しがりやの君にありけり  
誰よりも家族思ひの妹に幸多かれと切に願ふも

蝶子へ

面白きこと言ひ皆を笑はせし明るき君に心なごめり

蝶のごと軽やかにかつひたむきに君が飛び立つ春の待たるる

暖かき思ひ出多き我が幸をしみみに思ふ嫁がむとして

あふれんばかりの家族への思ひが、一人一人に對して、ていねいに一首づつ自分の心のま  
まに表現されたすばらしい連作短歌であると思ひます。はじめて短歌を作る時から連作短歌  
に取り組む方が良いのではないかと思ひますので、参考にして下さい。

### 五、短歌創作と相互批評

「ともすれば自己を閉鎖したり、凝固停滞させたりしがちの私たちの心を、常に潑刺たる  
交流の世界に置くことの必要を強調して」ある重要な御発言であるとして山田輝彦先生  
〔短歌のすすめ〕の著者のお一人、元福岡教育大学教授）は、本会前理事長小田村寅二郎先生の

御文章を紹介されてみます。

「作者の心を憶念するときに、作者の心の迷い、考え方の独善さ、自己の殻にとじこもり  
そんな傾向などが、そのうたの中に感じられたときは、自分もまたその人の心の中には  
いつていくだけの努力をして、そのうえできびしく批判することが必要でしょう。(中略)

『直接に感じたままを言葉にして言う』ということとは理解できていても、いつしかそれが  
空しい評語になる危険もあるわけです。それをお互いに注意し合い、客観的に批評し合う  
ところに、和歌創作とその相互批評の、永遠に生き生きとした意義が存在する、と私は思  
うのです」(『短歌のすすめ』二十三―二十四頁)

短歌創作が、またその相互批評が、先生の言はれるやうに「永遠に生き生きとした意義」  
を見失はないで実現される時、それは同時に「常に潑刺たる交流の世界」が実現される時で  
もあるのです。



## 六、明治天皇御製拝誦

### 歌

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり（明治四十一年）

（『短歌のすすめ』二百八十三頁）

明治三十七年には一日平均二十首強の短歌を創作されたといふ明治天皇さまの御製（天皇さまがお作りになられた短歌）は、最高に短歌の御修業をされた方の作品としてだけではなく、生きていく上での指針ともなると思ひます。御製を拝誦することで、直接的に、連綿たる日本の歴史、伝統につながっていくことにもなると思ひます。それでは、この御製を皆さんと一緒に拝誦したいと思ひます（編注・全員で拝誦す）。どうもありがとうございます。

以上で短歌創作のための導入講義を終わりますが、これから外へ出て、眼前の富士山にまむかひまして、大きく息を吸つて、眼も耳も心も身体も全部働かせて、感じたことをそのままに、お一人おひとりの思ひをうたひあげませう。



短歌入門

創作短歌全体批評

国立療養所福岡東病院副院長

小柳左門



はじめに  
批評と添削  
をはりに

## はじめに

皆さん、刷り上った「歌稿」を手にとって、はづかしいやうな、だけれどもうれしい思ひで中を御覧になつたことでせう。とくに初めて短歌を創られた方にとつては、胸がどきどきするやうなお気持でせうが、それは貴重なとても素晴らしい体験だと思ふのです。

短歌は、単にその字面を読むだけではそのよさは仲々分りにくいものです。自分で一所懸命に作つてみて、色々に工夫して詠んでみてはじめて、その難しさもまた素晴しさも実感できるものだと思います。皆さんも体験があたりでせうが、例へば目の前に川が流れてゐるとしますね。これを眺めてゐるだけでは分らないことがある。川の流れに裸足の足をつけてみる。そして川底の砂や石をふみながら歩いてみる。さうすると川の水の冷たさ、流れをしつかりと感ずることができますね。短歌も一緒で、自ら体験することがとても大切なことです。短歌は古代の人々から詠み継がれてきた日本の国の長い長い流れです。この流れの中に、皆さんも短歌を詠むことによつて入つていつたのです。それはある意味では、日本人であることを実体験する確かな一歩でもありませう。わが国には、『万葉集』（八世紀）といふ誇

るべき国民歌集があり、そこには天皇から庶民に至る実に様々の人々の思ひがあふれた歌が収められてゐます。私どもの歌稿も小さな拙ないものではあつても、『万葉集』を現代に受けつぐ試みといつてもいいかもしれません。ここには様々の職業の方、大学生、高校生まで全ての参加者の作品がある。身分も年齢も超えた世界があるのです。

それでは今からいくつかの短歌を選んで講評して参りますが、私自身も皆さんを指導できるほどに豊富な経験を持つ者ではありません。私なりに短歌を創られた方の気持にそつて考へたつもりですが、適切でないことも多々あるかと思ひます。その場合は、各班での班別相互批評で検討して頂きたいと思ひます。

### 批評と添削

ではプリントの最初の歌から始めませう。

○

赤黒い坂を越ゆれば太陽と夏風そよぐ青空が見ゆ



昨日の富士山登山の歌ですね。この歌にはいくつか分りにくい所があります。坂を越えるとなぜ太陽や青空が見えたのだからか。ふつうは坂を越えると今まで見えなかつた前方ないし眼下に広がる景色が目に入ると思ふのですが、この歌では目は空を向いてゐる。これは、その時の様子から、霧が晴れて青空が見えたといふことなのでせう。「坂を越えると景色が見える」といふよくある表現に、つい頼つてしまつた感じがします。「夏風そよぐ青空」も分りにくいですね。夏風がそよぐといふのは、風が体に触れた時の実感でせう。青空を見て風がそよぐとはふつう感じない。ここは、霧の流れに風のそよぐのを感じられたのではないか、と思はれます。また太陽と青空を二つならべて、見えるといふものをかしい。自分の体験をありのままに直接詠んでいく、と

いふことが大切だと思ひます。「赤黒い坂」ともふつう言ひませんね。そこでこのやうに直してみました。

土黒き坂道行けば風そよぎさ霧は晴れて青き空見ゆ

いかがでせうか。実景と違ふのかもしれませんが、検討してみて下さい。

○

富士の山見るも登るも雄大の大きさだけが心に残り

「見るも登るも」といふのはどういふことなのでせう。遠くから見ても雄大だが、実際に登つてみてさらにその雄大さがわかつた、といふことでせうか。「雄大の大きさ」は、富士がよほど大きいと思はれたのでせうが、同じことの繰り返して無駄ですね。また「大きさだけ」の「だけ」は、誇張した言ひ方ですね。もつと富士山の色んな姿が見えたはずです。昔のことならまだしも、登つてきたばかりの山ですから、心に残つてゐることが「大きさだけ」といふことはないはずです。短歌は、ややもすると誇張した表現をしたくなるものです



が、それは却つて真実をゆがめ、逆に感動をうすめてしまふのです。

また最後を「心に残り」と連用形で止めてゐます。このやうな詠み方は、余韻を残すためのテクニツクのつもりでせうが、言葉の力、歌の響きが弱々しくなります。雄大な富士山とは合ひません。

富士山に登りてみればあらためてその雄々しさに心打たるる

と直してみました。

○

岩肌に臨む眼前過ぎし人黙々歩き石のやうなる

結句の「石のやうなる」が、この歌の眼目なのでせうが、どういふことなのか判りませぬね。じつと立つて動かない人なら、石のやうだと思ふかもしれませんが、歩いてゐる人が何故石のやうなのか。黙々としてゐることを石のやうだといふのをかしい。側にゐる人がずつとおし黙つてゐるのならまだしも、自分の前を過ぎて行くわづかの時間です。これも実感

ではありませんね。思ひつきの言葉に流されず、もつと正確に自分の感じるままに詠んでほしいと思ひます。また「眼前を過ぎる」といふのも、山道を登つていく時の情景としては不自然です。眼の前を歩いていく人なのか、追ひ越していった人なのか。いづれにしろ黙々と登る人に心を魅かれたのだと思はれましたので、以下のやうに直してみました。

岩肌を臨む山道を黙々と登りゆく人に心ひかるる

○

新鮮なほんの一瞬のうつくしく富士の眺めに心洗はれり

この歌から作者のある種の感動は伝はりますが、どんな情景なのか、一緒に経験した人にかかりませんか。「新鮮なほんの一瞬の」とは何だつたのでせうか。おそらく霧が一瞬晴れて、その中から雄大な富士山の一角がくつきりと見えたのではないでせうか。「富士の眺め」も問題です。もつと遠い所から景色が広がつて見えるのならばよいのですが、真近に見る姿を言ふのには不適切でせう。「心洗はれり」は八字の字余りですが、この場合はむしろ「心洗はる」と七字で止めた方が、力強く歌が締まります。

霧晴れて一瞬見えたるうつくしき富士の姿に心洗はる

としてみましたが、「うつくしき」は「あざやかなる」とした方がびつたりしてゐるかもしれませぬ。

○ 富士の山靴に石入り友との語り足痛み忘る気づけばふもと

意味はある程度理解できるのですが、それぞれの句ごとに中身が分断されてしまつてゐて、詠んでバラバラな感じがしますね。心の動きに素直に詠まれてゐないので、そのやうに感じるのだと思ひます。歌には流れ、もつといへば調べといふのがあります。それが失なはれてゐます。また一首のうちには色んなことをもりこんでゐるために、何か雑然としてゐます。もつと整理してすつきりさせたいです。

靴に入りし小石の痛みいつしかに忘れて友と語りつつ行く

としてみました。感動を一首に詠みこめない時は、連作にするといいでせう。

○

富士の上岩に寝そべり思ひしは広い祖国と小さな我心

我心に「わがみ」と振り仮名がうつてありましたが、これは無理な読み方です。女子学生の方の歌ですが、「寝そべり」といふのはちよつと行儀が悪いですね。女性はもう少し慎ましくあつてほしい。

さてこの歌の一番の問題は「広い祖国と小さな我心」にあります。ここでは祖国と自分を対比して、そのことを詠んでゐる。自分は小さい、といふやうな詠み方、言ひ方は大自然の前にした時によくなされることですが、そのやうなことはある意味で当り前のことで、一種の理屈といつてもいい。でもよく考へて欲しいのですが、「自分が小さい」のが問題なのでせうか。むしろ大自然の大きさ、祖国の広さに感動したといふのが中心でせう。その感動を詠めばよいと思ふのです。さらにいひますと、祖国の広さを思ふ心が、実は自分の中にある。教学者である岡潔氏はこのやうに言つてゐます。「大自然は心の中にある」と。だとすれば

自分とは決して小さな存在ではないのです。うまくできませんが、このやうに直してみました。

富士山の岩の上にて安らへば広き祖国の思はるるかな

「広き祖国」といふ言葉も概括的で、もう少し自分の感動を見つめて作り直して下さい。

○

心地よき汗とそよ風日の光日の本一の富士は青春

幸せ一杯の歌ですが、あまりに多くのことを次々と並べてをられ、何だかよく分らない。感動が上すべりになつて伝はらないのです。そこはもつと冷静に、ひとつひとつを丁寧に詠んで下さい。一首にできない大きな感動は、連作短歌にするといいいのです。「富士は青春」といふのもおかしい。青春となぜ感じられたのか、おそらく自分自身が青春の真只中にあるといふ喜びではないのでせうか。

心地よきそよ風うけて仰ぐかな日の本一の富士の御山を

だがかう直してみても深みがありませんね。

○

伊藤哲夫先生の御講義を聞きて

日の本のいまの愚かさ正すみち歴史の深さ見よと語る

この歌は上の五七五と下の七七とがうまく継がつてゐません。それに表現が正確ではない。「日の本の」は「日本人の」が正しいでせう。また「愚かさ」といふのもあまりに概括的です。「愚かになつていつてゐる」といふのならもう少し分りますが、私は日本人は単に愚かではないと思ひます。とかくものごとを概括的に表現しやうとしがちですが、内容が空疎になつて了ひますね。「語る」も文法的に間違つてゐます。

日の本の歴史の深さ学びつつ道を正せと語り給ひき

としてみました。

○

この壇上ゆ獅子吼せられきみ言葉の声の響きに胸のうちふるえる

これも伊藤哲夫先生の御講義を聞いて詠まれてゐます。伊藤先生の熱意あふれる講義の聲が伝はつてくるやうですが、残念ながら言葉が激してしまつて感動がひとりよがりになつてゐます。最初の「この」は unnecessary です。無駄な字余りになつてゐます。「獅子吼する」といふのは獅子が一声大きく吼へる様でせうが、その後「声の響き」と強め、さらに「胸のうちふるえる」としたために、音声の大きさが強調されすぎて感動の中味が空疎になるのです。感動をよく見つめ、言葉が上すべりにならないやうにしたいものです。

ちなみに国民文化研究会の山内健生さんが、同じく伊藤先生の御講義を聞いて詠まれた連作短歌をみてみませう。

先人の心を忘れて憲法を語るは愚なりとあつく説かるる

学ぶべきを学ばずあるは大いなる愚にほかならずてふ言の葉はげし

先人の思ひを受けつぐ覚悟こそわれらの学びの基なりとふ  
力づよくみ心こもる数々のみ言葉胸深くしみ入る

正確に自分の感動を詠んでをられます。それはまた正確に人の話を聞いてをられるといふ  
ことにも継つてきます。是非参考として下さい。

をはりに

それでは最後に印象深い短歌のいくつかを味はつてみませう。

防衛庁契約本部長崎支部

鏖 信弘

落葉松からまつの林に入れば美しく小鳥囀りさへす心和むも

林の中の濡れし草原のをちこちにオレンジ色のクルマユリ咲く  
オレンジの花びらそりしクリマユリ小さき姿の愛らしきかも



平易な言葉で、富士の草原の小鳥や花を詠んでをられるのですが、情景が目には浮かんでくるやうです。ちなみにこれらの歌を詠んだのは防衛庁のむくつけき男性なのです。名前を見ないと女学生の歌のやうですね。防衛庁の人といふといかめしい無愛想な人を連想するかもしれないが、それは私達の先入感なのです。昔から日本の武人や兵隊さんは、その多くが心優しく、もののはれを感じる人でもあつたのです。

日本青年協議会

別府正智

宝永第一火口にて先発隊として待ちし折に

うす白き霧のたちまち覆ひ来て辺りの景色をつつみかくしぬ

先頭は新六合目に達すとしちの報せを受けて待ち遠しかり

下り来る皆の姿は見えねども話し声かすかに聞こえくるかな

うつすらと霧のはれきて列をなす皆の姿の見え来りけり

宝永の第一火口はここにありと伝へむとして両手をふりぬ

この方は皆さんが富士登山をする時に、道に迷はぬやうに先発隊として出発してをられたのです。言葉のつかひ方は所々不十分ではありますが、この方の目にしてゐるものが手に

とるやうによく分るでせう。しかも不安だとか嬉しいとか、感情を伝える言葉を全くつかつてをられないにもかかはらず、その気持が伝はつて参ります。素直にありのままに詠むことが、こんなに素晴らしい短歌を生むのです。

元福岡教育大学教授

山田輝彦

合宿に寄せて（七月二十五日付お手紙）

百日紅さるすべりはや咲きそめて年ごとの合宿の日も近づきにけり

すこやかにあれば集ひに加はりて学ばむものを病む身口惜し

神さぶる富士のみ山に恥づるなき国の姿の蘇れいま

山田輝彦先生は、皆様お手持の「短歌のすすめ」といふテキストの著者のお一人です。数年前から体調を崩され、合宿教室にはお見えでないのですがこのやうに毎年、お手紙で短歌を寄せてをられます。目に見えぬ人々にも支へられて、この合宿は営まれてゐるのですね。

今から皆さんは各班に分れて、短歌の相互批評をされるわけですが、詠んだ人の心を憶念

して、その心に添ふやうにしながら批評し、歌を直していつて下さい。批評とは決して上から頭ごなしに間違ひを指摘したり、けなしたりするものではない。ともに心を寄せ合ひ、ひとつのものを目指すところに共感の世界が広がり、和が実現されていくのです。

最後に一言申し上げたいのですが、短歌を詠むうへで最も大切なことは自分の感じたことをありのままに表現することです。

明治天皇の御製に

こともなくしらべあげたる言の葉の花にぞにほふ国のすがたも

とありますが、かざらない素直な言葉が私たちの心を動かす。その中にこそ日本の国の姿があるといふことを教へられてゐると思ふのです。

ご静聴あり難うございました。



# 一年の歩み

——第四十六回合宿教室までの一年——

第四十六回合宿教室運営委員長

(社)国民文化研究会理事・事務局長

山口 秀 範





「第四十五回全国学生青年合宿教室」は平成十二年八月七日に閉会した。全国から集まつた参加者たちは四泊五日間の研修や班員との心の通ひ合ひに、新鮮な驚きと喜びを共有しつつ、雄大な阿蘇を後にした。そして、この経験を単なる「思ひ出」に終はらせたくないといふ呼びかけに呼応して、各地で新たな活動が開始されたのであつた。

早速、四十六回目の「合宿教室」開催に向けて「運営委員会」が結成され、私が委員長をお引き受けした。各地区で中心となつた委員は、須田清文（東北・北海道）、天本和馬（関西）、山根清（中四国）、古川広治（福岡）、白濱裕（熊本）の諸氏で、関東は私がまとめる事とした。合宿開催の翌月、九月の下旬には例年、道統に連なる師友の「慰霊祭」を斎行してゐるが、この年はそれに併せて、前年（平成十一年）ご逝去になつた前理事長を偲ぶ『追悼 小田村寅二郎先生』が刊行された。小田村先生はその後半生を「合宿教室」の発足とその継続発展に全人生を傾注された方で、多くの「合宿門下生」の追慕の気持ちが集めた同書をひもときつつ、来るべき四十六回合宿教室の盛會を誓ひ合つたのである。小田村先生の遺歌から二首を掲げる。

合宿にて（昭和五十八年・雲仙）

緊張の連続といふ日々なればかく疾く時は過ぎゆくらむか  
若きらにわれらが思ひ通ふべき道ここにありと信じてやまず

### 東京地区での会合

東京地区では、学生たちが寝食を共にして研鑽に励む「正大寮」(中野区上高田)を核に様々な勉強会が続けられた。その柱となつたのは、戦前から諸先輩方も大切に読んで来られた『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』(黒上正一郎先生著)である。若手会員を中心に輪読を続ける「信和会」の案内に、大日方学氏(厚木東高校教諭)は次のやうに記してゐる。

前回の輪読会では「序説附 聖徳太子の体験過程」の中の「冠位十二階」と「憲法拾七条」制定の箇所を読みました。黒上先生は、それまでの対外的不振や内政紊乱の原因が「悉く氏族朋党の個我に迷執して全体協力を志すことなき個人主義的思想」にあることを別決され、それを打ち払ふものが「和」の思想であり、「この上下和睦の思想は常に皇室の下、万民一体の国家精神に基かれたものである」と書かれてゐます。それまで垂れ込



めてみた暗雲が吹き払はれ、新しい日本国家が聖徳太子により力強く建設されて行つたことを感じます。

この呼びかけに應へて集まる学生・社会人達は、「個我に迷執」しがちな日常生活にありながらも、そこに止まることなく、「合宿教室」を契機に意識し始めた我が国のあり方について、国民の一人としてどう関るべきなのかを求める気概を持つてゐた。月に一度の会合が待ち遠しい程であつた。

他にも学生だけの読書会、短歌相互批評の会、小林秀雄勉強会、法華義疏講読会等々、活発に交流・研鑽が計られた。

### 地区合宿

秋も深まる十一月二十五・二十六の両日、時を同じくして二つの合宿が開催された。

中四国在住会員六名による一泊二日の合宿は、広島県安芸郡「国立江田島青年の家」にて営まれ、三井甲之先生著『明治天皇御集研究』を輪読し、併せて「教育参考館」（帝国海軍関

係の資料館)を揃つて見学した。従来交通事情等により会員相互の連絡が必ずしも十分でなかつたこの地区で「友よと呼べば友は来たりぬ」さながらに、日頃の思ひをじっくり語り合へたのは大きな喜びであつた。(後日、平成十四年夏の「第四十七回合宿教室」の開催地が江田島に決定されるといふ機縁をも、この小合宿が結んだことになる)。

一方、熊本地区では、熊本市の「熊本県青年会館」において「戦後思想の克服に向けて」をテーマに研修合宿を開催した。講師は寶邊正久氏(当会副理事長)で、参加者は十名。その呼びかけ文に、折田豊生氏は次のやうに書いてゐる。

二十一世紀といふ新たな時代を迎へようとしてゐる今日、私たちが日本人としての誇りと気概を持つてこの苦難の時代を生き抜いていくためには、私たちが辿つてきたその道のりを顧み、祖先が築いてきた赫々たる歴史に照らして、それぞれがその生き方を整へるしか方法はありません。私たちが生きていく力の源は、畢竟悠久の歴史に求める他はないのです。

両合宿中に詠まれた短歌の中から幾つかを紹介したい。

中四国の友ら集ひぬおちこちゆその名も高きここ江田島に  
湾沿ひの段々畑の蜜柑の実枝もたわわに今盛りなり

玉野市 内田 巖彦

「教育参考館」の遺書を拝見して

高知市 福田 仁

国思ひ父母偲び寸刻にしたため給へり最期の文を  
国難に命捧げし同胞を伝へざらめや後の世までも

同

松山市 鳥生 秀雄

父母へ別れを告ぐる言の葉は常の文のごとく穏やかなりし

寶邊正久先生の御講義

熊本市 久保田 真

戦ひの終りてのちに日の本は「からくも」残りぬと語りたまひぬ  
胸つまる思ひに耐へて守られし御国なりしを忘るまじとぞ

同

益城町 折田 豊生

戦ひにみいのち捧げしみ友らをいとほしみつつ語りたまへる  
亡き友を慕ひてやまぬみなさけの伝はりくれば胸ふるへけり  
遺されし文み歌にこもりたる尽きぬみ思ひ偲ばざらめや

## 各種講演会

四期目を迎へた「国民文化講座」は、講師に東京大学教授藤岡信勝氏を迎へて十二月二日（土）「横浜東急ホテル」にて開催された（演題「国民を育てる歴史教育を」）。今回は神奈川県区の会員が中心となつて準備を進め、教科書の検定・採択が大きな関心を呼び始めたこの時期、百名を越す熱心な参加者を集めた。また十一月十八日（土）には伊佐ホームズ（株）主催の筑波大学名誉教授竹本忠雄氏による講演会（演題「永遠の伊勢」）を協賛した。

戦前に、本会の前身である「精神科学研究所」が主催した「日本世界観大学講座」を現代に甦らせようといふ試みはすつかり定着し、講演要旨は順次、本会の月刊紙「国民同胞」に掲載されてゐる。（同紙平成十三年一、四、五月号参照）。

その他各地でも様々な企画・研鑽の試みがなされた。十一月三十日（木）佐賀市の「歴史民俗館」において、音楽家の星重昭氏と小柳陽太郎氏（当会副理事長）を講師に迎へ、ユニークな「佐賀よか講座第一回」が催された。約八十名の聴衆は講演と演奏が織り成す「日本人の心への回帰」をしみじみと味はつた。熊本地区でも平成十三年三月二十四日（土）に

「熊本県青年会館」を会場として、五十名参加の講演会を開催した。演題は「国際社会で自分自身を語れますか」、講師は布瀬雅義氏（住友電工勤務）で、豊富な海外経験を踏まへた国家論・文明比較等若い聴衆にも好評であった。

鹿児島、長崎、大阪でも折々に会合が持たれてゐる他、福岡では毎月「国民文化懇話会」で講演と輪読、青森でも前述の黒上先生の御著書輪読会が継続されてゐる。各地の集ひでは、学徒出陣を経験された大先輩から、少壮社会人、更には学生まで、正に世代を超え外的区別を離れて真摯に学び合ひ、祖国に尽す道を求めてゐる。

### 学生たちの新しい息吹き

関東地区の学生を中心にした「鎌倉合宿」が平成十三年二月十日（土）から一泊二日で行なはれた。卒業後就職する四年生、留学を控へた一年生、専門学部への進級を待つ二年生と、参加者十名の境遇はまちまちであつたが、互ひの研究発表を踏まへての徹底した討論や、古都鎌倉の散策は、友情を深め合ふまたとない機会となつた。「正大寮」の寮生も、先輩から後輩へと、戦前に端を発する寮の伝統を、受け継ぎ語り伝へながら新年度に向けて期するも

のがあつた。

平成十三年四月に、東京では「国文研塾」が開始された。その趣意書には次のやうに謳つてある。

一、目的 学校、学部、学年等の外的な枠を超えて「学問と人生」を探求する場を提供し、国家有為の人材育成を目指す。

二、対象 知的好奇心旺盛かつ人格陶冶への意欲溢れる学生で、同学の友との切磋琢磨を喜びとする者

三、費用 推薦図書の本代、講演会・合宿の参加費、交通費以外はすべて無料

定例の勉強会では、まづ小林秀雄氏の『美を求める心』を輪読し、その後は『日本への回帰』を勉強して、多くの学生にとつて初参加となる八月の「合宿教室」に備へた。同時に歌舞伎や能の鑑賞、現在日本の中枢で活躍する先輩訪問、推薦映画・講演会へのグループ参加等、徐々に学生が主体的に取組み活気を帯びて来てゐる。これまでに十名の学生が「国文研塾」に入門してをり、大半が「第四十六回合宿教室」に参加。今後の充実・発展が一層期待されるのである。

学生の新しい動きは他地区でも起つてゐる。福岡県飯塚市の九州工業大学では、勉強会が念願の学内正式サークルとして認知され、吉田松陰の『講孟余話』輪読会が毎週継続されるやうになつた。これは会員で同大卒業生、桑木康宏氏（アイ・エム・エー勤務）の熱意と献身的学生指導に負ふ所が大きい。

### 新しい時代に向けて

インターネットなど所謂ニューメディアの伸展に呼応して、本会でもすでに「五百羅漢 ネットワークプロジェクト（略称GNP）」を発足させてをり、会員相互の連絡・意見交換を初め、「合宿教室」「国民文化講座」の案内・申込みにも成果を上げてゐる。特に、布瀬雅義氏が主宰する「国際派日本人養成講座」はネット上に数万名の読者を持ち、健全な世論形成に重要な役割を果たすやうになつて来た。また、福岡市内のFM放送を通じての番組「ラジオ寺子屋」は、私が制作に参画しコメンテーターも務めてゐる。これらのメディアを通して、本会事業に理解を示す層が広がつてきた事は誠に有り難い。「合宿教室」について、第四十六回から産経新聞社の後援を得るやうになつたことも、大変喜ばしいことであつた。



この一年、青少年を巡る深刻な事件は枚挙に暇ない程であつた。そのどれもが、いはば戦後教育の「つけ」と考へられるが、問題は単に学校・教師だけで解決できる範囲を遥かに超えてしまつたやうだ。「個」を強調するばかりで「個」を包み育くんであるはずの「全体」（国の歴史や伝統）を軽視する戦後の思想の克服こそが急務となつてゐる。

中学校歴史教科書の検定・採択に関しても「子供たちに健全な愛国心を植付け、祖国に誇りを抱かせる」といふ国民教育の基本を等閑にしたまま、一部マス・メディアの内通的といふ他はない歪んだ報道姿勢もあつて徒に政治・外交問題へと転化されてしまつた。「新しい歴史教科書をつくる会」の枢要にも、各地で本会会員の活躍が見られたが、今後とも種々の活動の中心に、我が国の歴史に則つた「国柄への信」を据ゑて着実に歩を進めなければならぬ。

様々な活動、特に合宿への参加勧誘と開催諸準備に追はれるうちに、再び暑い夏が巡つて来て、富士山麓での「第四十六回」の合宿教室の開催が目前に迫つて来てゐた。



合宿教室のあらし





第一目

(八月二日・木曜日)

第四十六回全国学生青年合宿教室は、静岡県御殿場市「富士のさと国立中央青年の家」に於いて開催された。ここでの合宿教室開催は第四十四回に続き二度目である。霊峰富士の雄大な姿を間近に仰ぎ、木々の緑に囲まれた素晴らしい環境のもとで、四泊五日の合宿教室はスタートした。

開会式は日程通り午後三時から講義室で行はれた。神戸大学四年北村幸一君の開会宣言の後、国歌斉唱に続いて、祖国日本のために尊い命を捧げられたすべての御霊に対し、一分間の黙祷を捧げた。主催者を代表して、上村和男本会理事長は、「ゆきすぎた個人尊重の結果、人として生きていくための徳目が失はれ、日本は亡国への道をたどつてゐるのではないか。日本の国のことを自分のことのやうに考へ、国と自分との関はり合ひといふことを真剣に考へてほしい」と呼びかけた。続いて、参加者を代表して、東京大学三年石村善之亮君は、「この合宿は大学では得がたい感動や、学問の喜びを感じる講義があり、ぜひ何か感動する

ものを見つきたい。共にかんばりませう」と挨拶した。次に、オリエンテーションとして山口秀範合宿運営委員長から「一時的な気負ひではなく生涯を貫ぬく学問の道筋を見い出してほしい。共に研鑽するなかで真の友情の世界を体験してもらひたい」旨の合宿教室の趣旨説明が行はれ、最後に菅原亨二指揮班長が登壇して運営上の注意事項を伝達した。

開会式のあと、各参加者はそれぞれの班室に分かれて、自己紹介をかねて参加の動機を披瀝しながら研修に臨む思ひを語り合つた。夕食休憩のあと、「歴史認識と父祖の物語」と題する合宿導入講義が福岡県立太宰府高校教諭の占部賢志先生によつて行はれた。先生は明治二十八年富士山頂で世界初の冬季三千メートル級高地気象観測を為し遂げた野中至・千代子夫妻の偉業や、更に台湾人の教育に殉じた芝山巖六士先生の「史実」も紹介しながら「父祖の物語」に学ぶことの意味合ひを説かれた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義について班別研修を行つた。まづ講義内容を反芻しながら、講師の最も伝へたかつたこと、重要なことは何かを皆で話し合ひ、さらに班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて語り合つた。なほ、この班別研修は、以後

の各講義の後に続いて行はれた。お互ひに最初は緊張して意見も少なく発言も限られてゐたが、次第に討論も活発となり時には反論し時には共感し合ひながら、班員相互の心の交流が深められていった。

**第二日目**

(八月三日・金曜日)

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。今合宿の「朝の集ひ」は、「青年の家」の合同の朝の集ひに参加して、他団体と共に行はれた。富士山麓のすがすがしい空気の中、国旗掲揚の後、体操を行つて、一日の研修を気持ち新たに迎へた。

午前の日程は日本政策センター所長の伊藤哲夫先生の御講義から始まつた。「近隣諸国の動向と日本



の主権」と題されたお話は、先人の思ひに連なる真当の生き方を忘れたことが自国領土への防衛意識を稀薄にし、総理の靖国神社参拝にまで内政干渉を許すことになつてしまつた等々、力強く参加者一同の覚醒を促す内容であつた。御講義のあと、先生は学生の質問にも懇切に応答して下さつた。

午後は短歌の創作を兼ねた「富士登山」が日程に組み込まれてゐた。出発の前に羽後信用金庫川口支店支店長代理の須田清文先生から短歌創作導入講義を聴講し、創作上の留意点を学んだ。五感の全てを使つて感じたことを素直に詠むやうにしませうとの先生の声に励まされた参加者は、弁当持参でバスに分乗して富士山新五合目に向かつた。五合目からは徒歩となり宝永火口を見下ろして戻るといふコースで、冷んやりとした夏の富士の涼風を感じながら、しばし爽やかなレクリエーションの時間を持つた。

登山道で、宝永火口を見下ろしながら、また帰路のバスの中で、そして班室に戻つてからも、指を折りつつ短歌創作にいそしむ姿が見られた。

夕食後は新日本製鉄(株)プラント事業部(嘱託)の今林賢郁先生によつて輪読導入講義が行

はれた。メイン・テキストは「吉田松陰『講孟餘話』」。終生を「誠」で貫き通した松陰の瑞々しい言葉を味はつて、その志に肉迫する中で自らの力で人生を切り開くべしと奮起を促す御講義だった。

講義のあとの班別研修は「講孟餘話」の文章に即しながら、同じ章句に班員全てが意を注ぐ輪読が行はれた。時には皆で声を揃へて松陰の文章を読み味はつた。幕末動乱の時代に生きた吉田松陰の言葉に直接ふれる貴重なひとときであつた。

### 第三日目

(八月四日・土曜日)

午前の日程はまづ「日本の思想」と題する埼玉大学教授の長谷川三千子先生の御講義が行はれた。歿後二百年を迎へた本居宣長を通じて「日本の思想」を根本から問ひ直してみたいとする先生は、丸山真男を初めとする近代日本の知識人の傾向を批判し、宣長が外来の思想に染まる以前の日本人の姿を発見したきっかけは「古事記」との出会いであつたと論を進められ、無文字の世界の豊さを今日に伝へた先人の英知は、我々にも大きな財産として引き継

がれてゐると語られた。そして参加者からの質問にも丁寧にお答へになつた。

三日目の昼食は、合宿教室としては初めての体験となる野外でのバーベキューとなつた。

班ごとに、薪を用意する人、火をおこす人、野菜などの食材を切る人、肉を焼く人等の役割を分担して調理が進められた。炊事の煙が立ちこめるなか、やがて皆で力を合はせた料理ができ上がり、楽しく語らひながら、おいしさうに料理を頬ばる姿が見られた。御講義を終へられた長谷川先生も参加者の仲間に入られて一緒にお食べになつた。あちらからもこちらからも笑ひ声が聞こえて、リラックスした一同交流のひとつときでもあつた。

野外炊飯後の休憩時に、前日の富士登山の際に参加者が詠んだ短歌をプリントしたホッチキス綴りの歌稿が出来上がつて各人に配られた。そこには選歌された二百十九首の歌が載せられてゐた。午後の創作短歌全体批評の時間は、この歌稿に拠りながら国立療養所東福岡病院副院長の小柳左門先生によつて行はれた。参加者がこの合宿で詠んだ歌をとり上げて、表現の正確さや誤りを具体的に指摘しながら正確に観察することの大切さと率直にありのままに気持ち表現することの意味合ひを添削するなかで例示的に説かれた。



短歌の全体批評の後、班別短歌相互批評が行はれた。歌をつくつたのは初めてといふ参加者が多かつたが、各人が一人一人の歌に心を寄せて、作者の思ひに沿つた正確な表現を求めて心を砕いていつた。人の思ひを正確に受け止めること、自分の気持ちを率直に伝えることが如何に難しいかを実感させられた。内心の思ひをうまく歌に表現できた時、大きな喜びが生まれる。お互ひの心が通ひ合ふ充実したひとときであつた。

夕食後は体験発表が行はれた。学生時代に合宿教室で学び、現在は中堅社会人としてその責務を果たしてゐる二人の合宿教室の「先輩」が登壇して日頃の思ひを語つた。

はじめに登壇した熊本製粉(株)勤務の吉村浩之氏は、沖縄での過剰な反戦平和運動に触れ、自身の陸上自衛隊入隊の経験をふまへつつ、昭和十九年四月、決戦のわづか二ヶ月前に死を覚悟して、本土から赴任した島田<sup>あきら</sup>勲知事の事績を紹介した。続いて登壇した主婦の工藤千代子さんは、学生時代に合宿教室で学んだことによつて、母親になつても日本人としての誇りを持ちながら子供を育てられることに感謝してゐると語つた。そして、これからも祖先から受け継いだものを子供達に伝える母、主婦としての使命を全力で果たしたいと語つた。

体験発表のあと、参加者は屋外に設けられた齋庭に移動して慰霊祭に臨んだ。

慰霊祭に先立ち、小田原市立下曾我小学校校長の岩越豊雄先生が慰霊祭の意義と式次第、それに臨む際の心構へについて説明された。その中で『万葉集』の古歌や柳田国男の『先祖の話』などを引きつつ、いのちの根源につながるとういふことなのかを諄諄と説かれた。慰霊祭では参加者一同を代表して坂東一男本会理事が祭文を奏上、次いで銚信弘氏による御製拝誦が行はれた。続いて小田村四郎本会会長、上村和男本会理事長、山口秀範合宿運営委員長により玉串が捧げられた。一同拝礼の後、「海ゆかば」を斉唱した。曇り空も祭礼の間は美しい満月が齋庭を照らし、一同が直会の御神酒を頂く頃、また月は雲間に隠れて行つた。

左は奏上された「祭文」と拝誦された「御製」である。

## 祭文

ここ霊峰富士の裾野の広ごれる 御殿場国立中央青年の家「富士のさと」に集へる  
社団法人国民文化研究会理事長上村和男をはじめ我ら百五拾余名 第四十六回全国学生  
青年合宿教室を営みて はや三日目の夜を迎へぬ

今し天つ日はかくろひ 高原にそよ風吹きて 秀峰富士のさ霧ただよふこの富士のさ  
と美まし「集ひの広場」を齋庭と定めまつりて とこしへにみ国を守ります遠つみ祖達  
をはじめ み国のために尊き生命を捧げたまひし もろもろのはらから達のみたまを招  
きまつりて み祭りを仕へまつらむとす

顧みれば 混迷を極めたる時代に 故小田村寅二郎大人命を先頭に日本国民としての  
大道を求め 祖国日本の真正なる独立を果たさむと合宿教室を営み はや四十あまり六  
とせの回を重ねたり

我が国の政治 教育 マスコミ各界の混迷いまだ晴れたりとは言へねど 戦終りて五  
十年余にしてやうやく外国の厳しき圧力にも拘らず 新しき兆しみえはじめたり

小泉総理大臣の靖国神社参拝 或は新しい歴史教科書の動き等々の大きなうねりにならむとの兆しは 新しき局面の中で 我が国民文化研究会にかけられし大いなる期待の中で迎へ これをさまたぐる者は力の限り打ち払はむことを ここに謹みて祈り告げまつらむ

我れ等四十六年を連ね営みきたるこの学びのにはに相集ひ 伊藤哲夫 長谷川三千子  
両先生をはじめとする御講義に耳を傾け 講孟餘話の輪読に はたまた短歌の創作に心を開き心をかたむけり語りかはしつ み祖たちの尊きみ言葉を学び老も若きももろもろに心を鍛へ言葉を修め 祖国日本をとことにはに榮えゆかしめむと誓ひまつらむ

ここに我が日本の行くべき道をさだかに見定めむと心を合せ集ひを過ごしきたれるさまを 畏かれどもいましみこと達みそなはし給ひて 米国のゆくてをとこしへに守らせ給へと参加者一同に代り 坂東一男謹み敬ひ恐み恐みも白す

御製拝誦

明治天皇

山

萬代の國のしづめと大空にあふぐは富士のたかねなりけり

神祇

ちよろづの神のみたまはとこしへにわが國民を守りますらむ  
國民のうへやすかれと思ふにもいのは神のまもりなりけり

をりにふれて

うつせみの世のことわざはしげくともものまなぶまのなかるべしやは

歌

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな

昭和天皇

橋

ふじのみね雲間に見えて富士川の橋わたる今の時のま惜しも

朝海

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

海上日出

つはものは舟にとりでにをろがまむ大海の原に日はのほるなり

折にふれて

老人をわかき田子らのたすけあひていそしむすがたたふとしとみし

靖国神社の九十年祭

ここのそぢへたる宮居の神々の國にささげしいさをぞおもふ

今上天皇

戦後五十年遺族の上を思ひてよめる

國がためあまた逝きしを悼みつつ平らけき世を願ひあゆまむ

對馬丸見出ださる

疎開児の命いだきて沈みたる船深海に見出だされけり

第四日目

(八月五日・日曜日)

合宿教室の日程も残り少なくなってきた。第四日目はまづ「日本國柄——尊いことが尊く見えてゐますか——」と題する福岡県立嘉穂高校教諭小野吉宣先生の御講義から始まった。巧妙なる敗戦後の占領政策によつて「歴史を見る目」を奪はれたが、日本人としての「物を見る目」を取り戻すことの大切さを内外の歴史を回顧しつつ強く述べられた。

午後は現在に続く伝統の姿を現実に体験するべく、雅楽についての御講話とその実演が行はれた。日本芸術院会員の東儀俊美先生は千数百年の年月を経て今日に伝承されてゐるわが国の雅楽の歴史を懇切に説明された。また「雅楽道友会」の方々による楽器紹介及び合奏も行はれ、悠久の時を越えて伝へられてきた妙なる音色に誘はれるやうに、参加者一同は耳を傾けた。伝統を身近に感じる一時でもあつた。

続いて昭和音楽大学短期大学部教授の國武忠彦先生による『古典に親しむ——『古事記』

——と題する御講義が行はれた。先生は、『古事記』上巻の「天の岩戸」の箇所を取り上げられ、天照大御神が岩戸にお隠れになつてからの闇夜と、岩戸から引き出すまでの神々の準備については、古くからの鎮魂祭たまふりのまつりの原型ではないかと指摘され、『古事記』は決して作り話ではなく古代の人達の精神生活が反映してゐると話された。

夕食後は「若き友らへ語りかける言葉——かまどのけぶりほそくとも——」と題する国民文化研究会常務理事の長内俊平先生の御講話が行はれた。物を知るには知解と体解と信解の三つがあるといふ先学の指摘から、まごころを直感的に知ることは信解ではなからうかと知解の限界に気づくことで、祖先の生き方に近づくことができるはずと若者を励ますがごとき御講話であつた。

厳しい日程を送つてきた合宿教室も最後の夜を迎へ、「夜の集ひ」は屋外でのキャンプファイヤーとなつた。富士山麓の天候は若干不順であいにくの小雨まじりの天気ではあつたが、各班ごとや大学別に楽しい出し物が続いた。合宿中の講義や出来事に題材をとりユーモラスに演じた「八俣の大蛇やまたのおろち」をはじめとする寸劇、校歌などを高らかに歌ふグループ、社会



人班の「鉾を納めて」の斉唱など、様々の趣向が披露され、時に場内は爆笑と拍手に包まれた。最後に、「進めこの道」を国民文化研究会の会員のリードで全員が唱和した。

第五日目

(八月六日・月曜日)

合宿終了も間近となり、合宿を顧みての時間となった。まづ小田村四郎本会会長が、合宿初日からの各講義を順番に、丁寧に辿りながら振り返った。四泊五日を懸命に過ごした参加者にとっては、学んだ筋道をあらためて説き起されたやうで、参加者は自分の記憶が次第に蘇り、また、はつきりした形で整理されて行くといふ貴重な時間を味はった。次に登壇した山口秀範合宿運営委員長は、合宿中の「朝の集ひ」の折に紹介された若山牧水の「いま来よと言ひ告げやらば為し難き事をして来む友をしぞおもふ」を詠み上げ「国文研の会員の皆さんもそれぞれ忙しい仕事を何とかやり繰りし「為し難き事」を乗り越えて集まつて合宿を営んでゐる。その原動力は自分自身の初参加時の感動に他ならない。皆さん方に多くの成果を得ていただきたいと願つて、裏方の作業を続けた人々の支へによつて本合宿は運営された」と述べて、参加者からの感想発表を促した。

続いて四泊五日を振り返つて参加者が思ひのたけを発表する全体感想自由発表の時間に移つた。「今まで自分の心につかへてゐた疑問や不安が少し取れた」「先生方の助言や励まし、友との語らひをこれからの自分の糧としたい」「先生の話を伺ひ、一番大事なものは『心』ではないかと気付かされ、まごころ、日本を思ふ心、心からの言葉をこれから培つていきたいと思つた」「単なる論争ではなく、雅楽や古典にふれ、日本といふものを深く考へることが出来た」「自分の中にもつと本が読みたい、もつと学びたいといふ気持ちがある」「文化や伝統は、懸命に守つていかうと強まつたといふことに、自分自身が感動してゐる」「文化や伝統は、懸命に守つていかうとしない限り、守られないものだとあらためて気付いた」など数々の所懐が発表された。

いよいよ閉会式を迎へた。主催者を代表して登壇した本会副理事長宝辺正久氏は、先の戦争で亡くなつた同信の友人達を偲びつつ「國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて」といふ明治天皇の御製を拝誦し、「かうした先人達の思ひを胸に合宿で学んだことを深めていつて欲しい」と挨拶し今後の精進を呼びかけた。続いて学生代表の早稲田大学一年穴井宏明君が「班別討論の折、小田村四郎先生が『歴史を学ぶことは、愛情をもつて学

ぶことだ』と言はれ、目が醒めるやうな体験をした』と語つた。最後に東京大学一年の武田有朋君が閉会を宣言し、全日程を終へた。

8月3日(金)	8月2日(木)		第四十六回(平成十三年) 全国学生青年合宿教室「日程表」
(起床)		6:30	
洗面・清掃		7:00	
朝の集ひ 班別散策 朝食		8:00	
講義 伊藤哲夫 先生		9:00	
質疑応答		10:00	
班別研修		11:00	
短歌創作導入講義 須田清文 先生		12:00	
(昼食) レクリエーション		1:00	
富 第一 士 回短歌 登 創作 山	開会式 国民文化研究会理事長 上村和男氏 オリエンテーション 合宿運営委員長 山口秀範氏 合宿指導班長 菅原亨二氏	2:00	
	班別自己紹介	3:00	
夕食 入浴 休憩 (短歌提出)	夕食 入浴 休憩	4:00	
輪読導入講義 今林賢郁 先生	合宿導入講義 占部賢志 先生	5:00	
班別輪読	班別研修	6:00	
就床	就床	7:00	
消灯	消灯	8:00	
		9:00	
		10:00	
		11:00	

\* 社会人特別コース……集合 8月3日午前 8:00  
解散 8月5日午後 3:00

合宿教室のあらまし

8月6日(月)	8月5日(日)	8月4日(土)
(起床)	(起床)	(起床)
洗面・清掃	洗面・清掃	洗面・清掃
朝の集ひ 班別散策 朝 食	朝の集ひ 班別散策 朝 食	朝の集ひ 班別散策 朝 食
清掃 合宿を顧みて <small>国民文化研究会会長 小田村啓徳氏 合宿運営委員長 山口秀範氏</small>	講 義 小野吉宣 先生	講 義 長谷川三千子 先生
参加者による 全体感想自由発表	班別研修	質疑応答
感想文執筆及び 第二回短歌創作		班別研修 (記念写真撮影)
昼 食	昼 食	野外炊飯 野外活動
閉会式 <small>国民文化研究会副理事長 齋藤正久 氏</small>	講 話 東儀俊美 先生	創作短歌全体批評 小柳左門 先生
解 散	講 義 國武忠彦 先生	
	班別研修	(短歌再提出)
	夕 食 入 浴 休 憩	夕 食 入 浴 休 憩
	講 話 長内俊平 先生	体験発表 吉村 浩之氏 工藤千代子氏
夜の集ひ		<small>慰霊祭の説明 岩越善雄 先生</small>
		慰霊祭
		班別懇談
就 床	就 床	
消 灯	消 灯	

参加者の内訳

(学生班 四十一大学) (洋数字は参加学生数)

北海学園大1 東北女子短大3 東北女子大4 東北大1 新潟工科大1 筑波大1  
亜細亜大3 慶應大1 國學院大1 成蹊大1 多摩美術大1 東京大2 東京芸大1  
東洋大1 日体大1 武蔵工大1 明星大1 明治大1 早稲田大7 防衛大1  
京都大3 同志社大1 立命館大1 大阪大1 神戸大2 鳥取大1 岡山大1  
岡山理科大1 山口大1 山口県立衛生看護学院1 愛媛大1 九州大1 九州工大1  
西南学院大1 福岡教育大1 福岡県立大1 福岡女子大1 佐賀大1 長崎大1  
熊本大1 熊本学園大1

計 五十八名 (うち女子十七名)

(社会人・教員参加者) 十二名

(招聘講師) 三名 (雅楽演奏者) 三名

(国民文化研究会) 六十七名

(事務局) 三名 (写真) 一名

(見学参加者) 三名

総計 一五〇名

合宿詠草抄







富士山

日本体育大 体育一 大竹良直  
朝早く目覚めて富士を仰ぎ見ればその雄々しさに心打たるる

伊佐ホームズ(株) 山川和男

流れゆく濃き山霧の晴れ間よりあらはれいづる富士の頂

慶應義塾大 法四 伊藤哲郎

雲晴れて西の御空にそそり立つ富士の御山に心奪はる

御講義・御講話

占部賢志先生の導入講義を聞きて

京都大 文一 荒金健太

観測に命を賭けし御夫妻の功を偲べば心震へる

(野中至、千代子)

京都大 文三 服部源憲

ひたむきに夫を支へんと覚悟して冬山目指す妻のありけり

御夫妻をしのびて頂き見上ぐれば富士への想ひまた新なり

伊藤哲夫先生の御講義

同志社大 法三 石井一賢

今のまま国家の意思のなかりせばみ国あやふしと師は述べ給ふ

早稲田大 大学院一 星原大輔

憲法を変へざるをえぬくやしさに静かなる議場に嗚咽もれしと

長内俊平先生の御講話を聴きて  
早稲田大 大学院一 松下文彦

心眼で物を見よとの先生の教へを体し学びゆかなむ

『古事記』を読む

大阪大 理一 有井宏敏

古に使はれたりし言の葉のけふの我らに伝はるうれしも

国学院大 文二 竹下健太郎

愉快なる神々産みしこの国に生まれしことに心はづめり

いにしへゆ伝はるやまとのことばにて国のいのちは守られ来しか  
長崎大 教三 廣中 涉

雅楽

雅なる音色奏でる人々に誘はれ見たり大和心を  
九州大 理卒 石川 麻由

ひちりきの音色こころにひびきたり神のみこゑのきこえたるがに  
中村学園大教務課 中村 智道

班別研修

新しき友らと学び語らひて開けそめたる道を歩まむ  
東北女子短大 生活二 竹田 紗耶香

みともらの秘めたる思ひ聞くうちに新たなる決意胸にわきくる  
筑波大 大学院一 寺澤 知之

西南学院大 法一 春木 寿潤  
学ぶことの初めて楽しく思はれてわが胸内に兆すものあり

レクリエーション（富士登山）

早稲田大 法一 穴井 宏明  
富士にふくうましそよ風吸ひこめば心はづみて浮きたつごとし

九州大 農一 村山 賢一  
ゆるやかに雲は山腹はふやうに上へ上へのほりゆくなり

神戸大 文三 井上 智史  
立ちこめし霧の晴れゆき鮮やかな富士の稜線現れにけり

愛媛大 大学院一 佐々木 智訓  
火山灰に根づくムラサキモメンヅル生命の力感じられけり

東北大 大学院三 大岡 一亘  
富士山の林の終れば眼前に大きなしらくも迫り来るかな

(有)万 デザイナー 諏訪田 尚子

火口原ゆ仰ぎて見れば宝永の稜線美しく我描きたし

短歌詠草

先人の文より御心偲ばむと敷島の道さらに学ばむ

佐賀大 理工三 片岡正憲

感じたる心そのまま描かむと求むる言葉の出でこづくやしき

福岡女子大 文一 黒岩礼子

歌詠んで想ひを語る若き友のその口もとを好もしく見る

福岡コミュニティ放送(株) 江崎志保

短歌をば難かしきものと思ひしが詠めると何かうれしかりけり

熊本大 文一 村上洋平

合宿終る

まがまがしきこゝろのよろひ脱ぎ去りて故郷へ向かふけふぞうれしき

防衛大 人文社会三 徳田雄三

曇りたる我の心に一筋の光明差して晴れ渡るかな

武蔵工業大 工一 石川光尚

富士のもとに新たに結びし友情を胸に抱きて生きて行きたし

東京大 文一 武田有朋

今友と別れゆけども新たななる道をもとめてつとめゆきたし

岡山大 法二 野上哲子

富士の地で開かれし集ひに参加して我学問せんと強く決意す

亜細亜大 国際関係二 大橋広和

合宿で出会ひし人のあたたかき思ひは胸に深く残りぬ

東北女子大 家政二 小野さくら

来年もふたたび会ひたしお互ひに語り合ひつつ学びし友らと

亜細亜大 国際関係二 長田里香

富士のさとに真摯に学びし時は過ぎて友との別れのひたに惜しまる

船橋市議会議員 中村実

早稲田大 法一 濱崎史嘉

富士の場で厳しき日程終へた今新たな歩み始めたしと思ふ

東京大 文Ⅲ二 石村 善之亮

国のため命捧げし先人の思ひ偲びつかで継ぐべき

父母を思ふ

亜細亜大 国際関係二 野村 亮

心から日の本の国を思ふたび思ひ浮かぶは父母の顔

東北女子短大 保育二 小林 亜矢子

温かく包むがごとき富士の山それを見る度父母想ふ

大学教官有志協議会・国民文化研究会

朝の集ひ

国民文化研究会会長・拓殖大学総長 小田村 四郎

深みどり澄みわたる空に富士の嶺は朝日を浴びてあざやかにそびゆ

緑濃き富士のふもとに集ひ来て国旗を仰ぐあしたすがしき

全体感想自由発表

学問への意欲湧きぬところもごもに語る友らの言葉嬉しき

国民文化研究会理事長・(株)千代田コンサルタント相談役

上村和男

五合目にバスにて着けば頂上に登り行く人あまた見えけり

宝永の噴火の跡の激しさをしぬばれにけり火口に立ちて

友どちと登り下りを楽しみつ語らひすごす時のうれしさ

登山

(株)宝辺商店取締役会長

宝辺正久

谷下ゆさがしきなだりを這ひ上る霧たちまちにわが前とぞす

岩みちの高きに立てば先に行きし友らゐたりき風のすずしさ

砂<sup>すばし</sup>走りの山ちを高き声あげて駈け下りるあり若きをとめら

はへ松や低きかんばも生ひ立てる森みちゆけば木洩れ日さしぬ

八月二日早朝

元九州造形短期大学教授

小柳陽太郎

よべの霧くまなくはれて西空に大富士<sup>おほ</sup>が根のさやにそびゆる

もろびとの国のいのちと慕ひこし富士のみ山を今仰ぎ見る

留守守る妻に見せたしさやかなる朝空に立つ富士の神山



すぎし日の伊豆の旅路に妻と見し遠富士がねをはるにしのびつ  
朝目すがしく仰ぐみ山のふもとべを純白の雲ややに流るる

元電源開発(株)環境立地本部本部長代理 長内俊平

富士山五合目にて―友らを待ちつつ―

谷ぞこゆ霧のぼりくる森にしてうぐひすの声ま近くきこゆ  
みはるかす谷の彼方はみえずしてただ一面の霧の海原  
上めざす友らやいかに手をとりにて難き坂道登りゆくらむ

伊藤哲夫先生の御講義をお聞きして 新日本製鐵(株)嘱託 今村賢郁

迫りくる御国の危機をほとばしる心のままに訴へ給ふ  
御国今ただならぬ時ぞ心して若きら励めと語り給へり

大日本園芸(株)常務取締役 磯貝保博

青空に姿雄々しき富士の嶺の初めて見えし今朝のつどひに  
体操をはりて見れば雲かかり長き稜線かき消えてなし

小田原市立下曾我小学校校長 岩越豊雄

朝霧のふき払はれていつの間に富士の靈峰姿現はず

朝霧の動き早しもたちまちに富士のみ山の姿うせにき

君が代の歌うたふうちくつきりと富士の高嶺の現はれいでけり

皆人の氣に感ずごと霧晴れて富士のみ山の神さびて立つ

国民文化研究会事務局長

山口秀範

あな嬉し祈る思ひに迎へたる富士登山の日に雨降らざれば

おほひたる霧あし速く流れ行き宝永山の山容見えくる

憩ひつつ語らふうちに霧晴れて陽射しさやかに山肌照らす

レクレーションにて

熊本市役所東部環境工場工場長補佐

折田豊生

ゆるやかに霧を巻きつつ山肌をなで登りくる風心地よし

み友らに交りて吾娘もにこやかに語れるを見れば心安らぐ

すなほなる吾娘の顔ほど麗しきものはなきなり大人となりても

合宿に来る

千代田漢方クリニック

桑木崇秀

古き友らと会ひたき心に出でて来ぬ八十余り六とせの老いたはりつ

若きらと暫し語らふ喜びを思ひ描きつつ我は来にけり

若きらよまがつ世直すは君ら措きて他にはあらし唯君ら頼む

伊藤哲夫先生の御講義をお聞きして

(株)中央塩ビ製作所会長

星野

貢

心こめ語りつがる、御講師のみ言葉身内にしみわたるかな

国柄を根こそぎ絶やすてふおぞましき策ぞにくらし我れ忘れまじ

東京裁判無効と言ひし辯護士の清瀬一郎我れ忘れまじ

元法政大学人事部長

香川亮二

十一班の集ひ楽しき短かき間の交はりなるに忘れがたしも

己が心友の思ひを心こめて見つめ偲びつつ言葉えらびし

一人づ、一首の歌の生りゆくに心開かれて喜びあひぬ

うつしゑを眺めつつ思ふすこやかに学びたまへや別れ住むとも(集合写真)

伊藤哲夫先生の御講義にて

舞岡八幡宮宮司

関正臣

先の帝下し賜へる御言葉をただ畏みて頂きまつる(みかど くだいためにさく(五内為に畏く)

大御身を捧げましけるすめろぎの恩頼を畏みまつる(おほみみ みたまのゆかり)

すめろぎにまつろひまつる国民の鑑と仰ぐ阿南惟幾

慰霊祭にて

元佐賀商業高等学校教諭

末次祐司

浄闇のしじまの中に朗詠の聲神さびて魂降り給ふ

神々に捧ぐる祝詞厳かに亡き友のみ名偲びまつれり

天翔けり地駈けりつ、國守る魂安かれとひたに祈るも

川重八千代エンジニアリング(株)担当部長 山本博資

東儀俊美先生の「雅楽への誘ひ」を聞きて

洒脱なる語りに誘はれ厳かな雅楽の世界にしばしたゆたふ

いにしへに外より来たりし雅楽をもわが国独自のかたちに変りき

世界にも類まれなる日の本の雅楽のいはれ初めて聞きたり

笙に笛箏築合せた三管の音色は壮重神々しかも

皇室と共に衰微と繁栄の歴史を耐へ来しうるはし雅楽は

伊藤哲夫先生の御講義 新潟工科大工学部建築学科教授 大岡 弘

国民の約半数が署名せり殉難者らの釈放求めて

国力とは国民皆の信念の力なりしと語り給ひぬ

我もまた持たまほしきかな信念を学問に基づくその信念を

国立療養所福岡東病院副院長 小柳左門

ひちりきの音色すがしと草笛を吹くがごとくに胸にしみいる

ひちりきの音色を聞けば神代より伝はりて来し息吹きを思ふ

東儀俊美先生の御講話及び雅楽演奏

戸田建設(株)東京支店開発課長

青山直幸

主旋律を奏でるといふ「ひちりき」の調べ胸ぬちに響きわたるも

なつかしき思ひ沸きくも横笛の切々とした妙なる調べに

天上に響きわたれる神々の調べとも覚ゆ笙の音色は

朝のつどひにて

福岡県立太宰府高校教諭

占部賢志

まなかひにあらはれ出づる富士の峰薄墨色に映えてそびゆる

息のみて見つつしをればたちまちに雲流れきて山影隠れゆく

わが国の氣象観測拓かむと若き夫婦の籠りし御山

つるはしをふるひて氷壁くだきつつよぢ登りゆく姿しのばる

御供を致したしと夫追ひて山頂めざす千代子尊し

富士登山

関西熱化学(株)

天本和馬

足を止めふと見上ぐればおほふごと頂きはるかに雲かかり見ゆ

左の方廻りて行けば突然に宝永火口広がりてあり

大山をすりばちのごとえぐりたる噴火の跡のまざまざと見ゆ

水もなき火口の岩の間にも小さき草の生きづきてあり

合宿教室に参加して

湯亭こんや代表取締役

青砥誠一

久し振り夏合宿に参加すれば懐かしき顔数多く見ゆ

遅くなり夏合宿に参加せし我を御友は温かく迎ふ

参加者は少なくなるも御友らの熱き思ひは変らざりけり

忙しき時間を割きて合宿に参加し給ふ思ひ尊し

消燈のラッパの音の聞こえる演習場は近くにありて

三日目の朝の集ひの折に

羽後信用金庫川口支店支店長代理

須田清文

君が代のしらべとともに日の丸はのほりゆくなり子どもらの手で

日の丸ののぼるにつれて富士山のいただきわづかにあらはれてゆく

一面の雲去りゆきて朝日子に照らさる富士を仰ぎ見るかな

静岡県立焼津水産高等学校教諭

菅原亨二

起き出でて今日は如何と空を見る移ろひ易き山の天気

いろいろのことども学びし合宿も今日が最後の朝とはなりぬ

長谷川三千子先生の御講義を聞きて

若築建設(株)東京支店

池松伸典

古への人らの思ひ偲ぶこそ大切なりと師はのたまへり

古への文字なき代には今よりも話す言葉も生きてありけむ

主婦

工藤千代子

みまつりの庭のみ空を仰ぎみれば夜を照らしゆく月さやかなり

國武忠彦先生の御講義にて喜多郎のCD「古事記」を聴く

自営業

北村公一

神々の宴の太鼓の音繁く大きくなりて轟き渡れり

ひとときの静寂ののち曙の光射すがに澄みし音増す

今まさに岩戸開きてみ光とともに大神出でましぬかも

天照らすみ光のさま思はする澄みし音色に心震へり

岡山県立成羽高等学校非常勤講師

横畑雄基

久々に友に会へると楽しみに富士のすそのに足はこべり

合宿を運営されし先輩の姿目にして心うたるる

## あとがき

第四十六回合宿教室は、去る八月上旬の四泊五日の間、「富士のさと 国立中央青年の家」(静岡県御殿場市)において大学生・社会人及び関係者合計一五〇名の参加者によつて「今の日本はおかしいといふのなら、何かを変へる一歩がここにある」を主テーマに真剣な研鑽がなされた。本書は、この合宿研修において繰り広げられた各種講義等を中心にしてその要旨を収録したものである。どうぞあらためて味読いただき、人生の葉としてまた、日本のあるべき姿をもとめるための指針として活用されんことを願ふ次第である。

さて、来夏で、四十七回目を迎へる「合宿教室」は、平成十四年八月八日(木)から十二日(月)の日程で、「国立江田島青年の家」(広島県)を会場として開催される。

京都大学教授の中西輝政先生や元・九州造形短大教授の小柳陽太郎先生を初め、諸講師の登壇が予定されてゐる。全国の学生、青年諸氏のご参加を願ひつゝあとがきとする。

平成十三年十二月

編集委員 山内 健生

磯貝 保博



——日本への回帰——  
(第37集)

平成十四年一月二十五日発行

定価 九〇〇円

送料 二四〇円

編者

大学教官有志協議会

麴国民文化研究会

編集委員代表

上村和男

発行所

麴国民文化研究会

〒一五〇一〇〇一 東京都渋谷区東

一十三一―四〇二

TEL (〇三) 五四六八―六三三〇

振替〇〇一七〇―一六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替えいたします









大学教官有志協議会編  
数 国民文化研究会

